国鉄高千穂線建設埋蔵文化財
発掘調査報告書

薄糸平遺跡

昭和53年3月

日本鉄道建設公団下関支社
高千穂町教育委員会

国鉄高千穂線建設埋蔵文化財

発　掘　調　査　報　告　書

薄　糸　平　遺　跡

第22図1	第24図
第23図	第21図1

序

この報告書は，国鉄高千穂線建設事業に伴い，予定路線内の埋蔵文化財記録保存の措置として，本年度，日本鉄道建設公団下関支社の委託を受けて実施した発掘調査の記録である。

本町は九州の中央部，宮崎県の最北西部にあって，大分，熊本両県に境し，北に九州の雄峰祖母及び傾の連山を，南に諸塚，椎葉を経て南走する九州山脈に接する盆地を形成している。こうした地形に囲まれたいにしえの高千穂は守るに易く，攻めるに難き要害の地であったと考えられる。

本町の縄文，弥生遺跡は現在100数箇所を確認しているが，今回調査が行なわれた薄糸平遺跡はかねてより土器片の散布も多く，かつて押型文土器や須玖式系土器が出土している地区である。調査の結果としては，縄文式土器の出土は少なく，弥生中～後期の住居跡様遺構として結論がだされたようであるが，いずれにしても，本書が古代高千穂をひもとく考古学研究上，少しでもご活用いただければ幸いである。

最後に，本書の刊行にあたり，現地調査から報告書発刊までご指導，ご援助いただいた宮崎県文化財保護審議会委員日高正晴氏をはじめとする調査員の方々や宮崎大学教授遠藤尚，同講師大塚誠両氏，ならびに関係各位のご協力に対し，深甚の謝意を表する。

昭和53年3月

高千穂町教育委員会

教育長　後　藤　辰　男

例　言

1．本書は国鉄高千穂線建設に伴ない，日本鉄道建設公団下関支社の委託を受けて，高千穂町教育委員会が実施した薄糸平遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は昭和52年7月18日から8月20日まで実施した。

3．調査関係者は次の通りである。

調査主体

高千穂町教育委員会

教育長	後藤辰男
教育次長	飯干昇
社会教育課長	久峩道雄
文化財担当	田尻隆介
高千穂町役場主幹	川辺隆
高千穂町文化財保存調査委員	鈴木由春
	河内保
調査員	日高正晴（県文化財保護審議会委員）
	茂山護（県総合博物館学芸員）
	岩永哲夫（県教育庁文化課主事）
	田ノ上哲（宮崎考古学会員）
	北郷泰道（　〃　）

事業主体

日本鉄道建設公団下関支社

高千穂鉄道建設所長	七浦照次
地元協力	上田原公民館

4．本報告書の作成は調査員が担当し，執筆した。執筆者名は各文末に明記した。編集は調査員が担当した。

5．土層については，宮崎大学教育学部遠藤尚教授の御指導を受け，炭化樹種の鑑定は宮崎大学農学部大塚誠講師に依頼した。

6．調査員相互の話し合いを持つ機会が少なかったので，各自の見解や用語に不統一がみられるかも知れない。

本　文　目　次

頁

第 1 章　序　　説 …… 1

1．発掘調査に至る経緯 …… 1

2．遺跡の位置と環境 …… 2

3．調査の経過 …… 4

第 2 章　包含層の状態 …… 7

1．第Ⅲ地区の状態 …… 7

2．第Ⅱ地区の状態 …… 8

3．第Ⅰ地区の状態 …… 9

第 3 章　遺　　構 …… 10

1．第Ⅲ地区の検出遺構 …… 10

2．第Ⅱ地区の検出遺構 …… 13

第 4 章　遺　　物 …… 14

1．土　　器 …… 14

2．石　　器 …… 55

3．住居跡木材炭化物の樹種 …… 71

第 5 章　結　　語 …… 73

挿　図　目　次

頁

第１図　遺跡の所在地 …… 1
第２図　薄糸平遺跡周辺地形図 …… 3
第３図　発掘地区図 …… 5
第４図　第Ⅲ地区北壁土層実測図 …… 7
第５図　第Ⅱ地区北西壁・北東壁土層実測図 …… 8
第６・１図　第Ⅰ地区土層実測図 …… 9
第６・２図　第Ⅱ地区北東壁土層実測図 …… 9
第７図　第Ⅲ地区上層ピット配置図 …… 10
第８図　第Ⅲ地区中層ピット配置図 …… 10
第９図　第Ⅲ地区Ａ・Ａ′—31，32区炭化材出土面周辺図 …… 11
第10図　溝南西部断面土層実測図 …… 12
第11図　第Ⅱ地区中層ピット配置図 …… 13
第12図　第Ⅱ地区出土遺物散布図（レベル100まで） …… 15
第13図　第Ⅲ地区出土遺物散布図（レベル100～200） …… 15
第14図　第Ⅲ地区土器散布レベル図 …… 17
第15図　第Ⅱ地区土器散布レベル図 …… 18
第16図　薄糸平遺跡表採押型文土器実測図・拓影 …… 18
第17図　縄文式土器実測図・拓影 …… 20
第18図　出土土器実測図・拓影 …… 21
第19図　第Ⅰ類土器実測図・拓影 …… 23
第20図　甕形土器実測図 …… 27
第21図　第Ⅲ地区出土壺形土器実測図 …… 29
第22図　第Ⅲ類土器実測図・拓影 …… 31
第23図　第Ⅱ地区出土尖底土器実測図 …… 32
第24図　第Ⅱ地区出土壺形土器実測図 …… 32
第25図　第Ⅱ地区Ａ—24，25区遺物散布図 …… 33
第26図　第Ⅳ類土器実測図・拓影 …… 35
第27図　第Ⅲ地区Ａ・Ｂ—31，32区主要部実測図 …… 37

第28図　第Ⅴ類土器実測図 …… 39
第29図　出土土器実測図 …… 41
第30図　拡張区出土壺形土器実測図・拓影 …… 43
第31図　出土土器実測図 …… 45
第32図　壺形土器実測図 …… 46
第33図　出土土器実測図・拓影 …… 47
第34図　出土土器実測図・拓影 …… 48
第35図　出土土器実測図 …… 49
第36図　第Ⅱ地区出土の石器 (1) …… 59
第37図　第Ⅱ地区出土の石器 (2) …… 60
第38図　第Ⅱ地区出土の石器 (3) …… 61
第39図　第Ⅱ地区出土の石器 (4) …… 62
第40図　第Ⅲ地区出土の石器 (1) …… 63
第41図　第Ⅲ地区出土の石器 (2) …… 64
第42図　第Ⅲ地区出土の石器 (3) …… 65
第43図　第Ⅲ地区拡張区出土の石器 (1) …… 66
第44図　第Ⅲ地区拡張区出土の石器 (2) …… 67
第45図　第Ⅲ地区拡張区出土の石器 (3) …… 68
第46図　第Ⅲ地区拡張区出土の石器 (4) …… 69
第47図　第Ⅲ地区拡張区出土の石器 (5) …… 70

図　版　目　次

図版１　薄糸平遺跡遠景・近景
図版２　発掘調査状況・ピット検出状況
図版３　炭化材検出状況・炭化材
図版４　第Ⅱ地区壺形土器・甕形土器出土状況
図版５　第Ⅲ地区壺形土器出土状況・第Ⅲ地区二重口縁出土状況
図版６　第Ⅱ地区北東壁土層・第Ⅲ地区北東壁土層
図版７　拡張区の溝・溝横断面土層
図版８　第Ⅱ地区出土甕形土器・尖底土器・壺形土器
図版９　第Ⅲ地区拡張区出土壺形土器
図版10　流水文・有文土器片・縄文式土器片
図版11　第Ⅰ類土器
図版12　第Ⅱ類・第Ⅵ類・甕形土器口縁部
図版13　第Ⅲ類土器・沈線文土器
図版14　第Ⅳ類土器・免田式土器片
図版15　第Ⅴ類土器
図版16　壺形土器口縁部・頸部・甕形土器
図版17　鉢形土器・椀形土器・底部
図版18　壺形土器口縁部・頸部・甕形土器口縁部
図版19　壺形土器
図版20　甕形土器口縁部・刻目突帯・突帯
図版21　甕形土器突帯文
図版22　磨製石鏃
図版23　磨製石鏃未製品・打製石鏃
図版24　石皿・石斧・磨石・敲石・砥石・スクレイパー
図版25　砥石・石庖丁・管玉・小凹石・鉄鏃・剝片

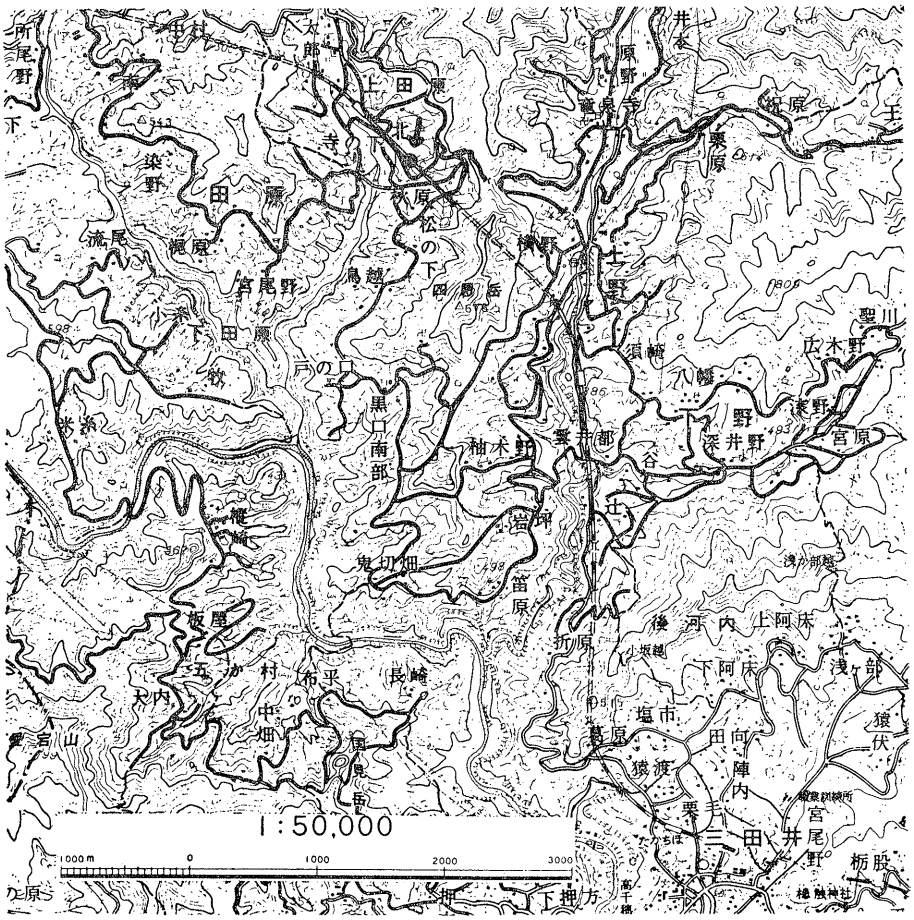
第１章　序　　説

1.　発掘調査に至る経緯

国鉄高千穂線は，現在延岡駅～高千穂駅が開通している。この高千穂線を更に延長して，高千穂駅から熊本県高森駅まで全長約23㎞を建設することになった。

これに伴い，昭和51年から「日本国有鉄道の建設事業等工事施行に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」（昭43.3.8，文化財保護委員会事務局長，日本国有鉄道副総裁）による協議が宮崎県教育委員会と日本鉄道建設公団下関支社との間で続けられ，その間，計画路線内の分布調査を実施した結果，薄糸平遺跡の路線内存在が明らかになった。

その後の協議により，高千穂町が日本鉄道建設公団の委託を受けて，薄糸平遺跡の発掘調査を実施し，記録保存の措置をとることになった。　　（岩　永　哲　夫）



第１図　遺跡の所在地

2. 遺跡の位置と環境

薄糸平は高千穂町田原に位置している。高千穂町から熊本に通じる国道325号線に沿って進み，上野の龍泉寺を経てしばらく行くと道路が岐れて左の方へ下る町道がある。この道路を約300m進むと北というバス停があるが，そのすぐ東方の台地上に薄糸平の遺跡がある。この地点は標高約430mであり，その発掘場所は国鉄高千穂線の鉄道敷設予定地であるが，現況は畑地になっている。高千穂町の中心街からこの田原へ続いている深い谷間を流れる田原川の向い側，この遺跡から真西に見下される所に，旧高千穂高校田原分校の屋舎が残置されたままになっている。この場所から北西の方を望むと眼前に熊本県側の山々が迫って見える。この薄糸平遺跡についての記録で最も古いものは昭和19年10月，上代日向研究所発行『上代遺跡遺物地名表』の中に，樋渡正男氏によって薄糸平で押型文土器が確認されたことが記されている。

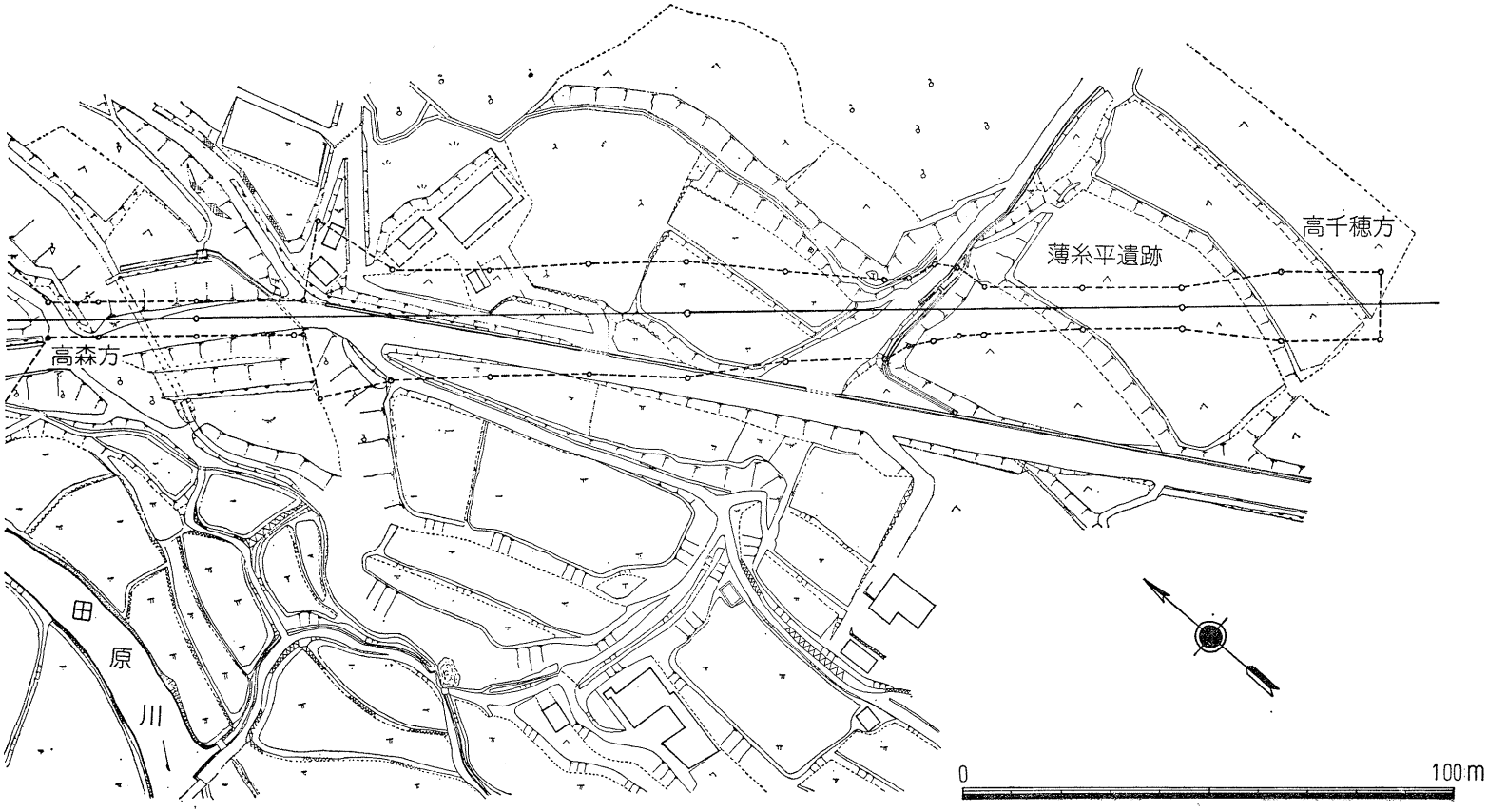
また，上記の地名表によると北地区で小字の記入はないが，当時の県史跡主事瀬戸口伝九郎氏から須玖式土器の出土についても報告されている。今回調査した薄糸平遺跡からも須玖式土器が発見されているので，あるいは，同一遺跡であるかもしれない。

さらに，この北地区には萱野と樫尾野に弥生式の散布地，中瀬に弥生式に伴う磨製石鉄が確認されている。さらに，昭和31年7月，神道文化会主催による高千穂阿蘇の綜合調査が実施された際，調査員として石川恒太郎氏と共にこの薄糸平を探訪して，そばの民家に保存してあった押型文土器などを調査したことがある。この薄糸平についてはこのような前歴があったので，今度の発掘調査に際しても押型文土器に関連した縄文土器が発見されるのではないかと期待したのであるが，その出土地点は今回の発掘場所とは異っていたことになる。

さらに，この田原から河内にかけての地区には古墳時代の横穴が10数基存在しているが，昭和31年の高千穂調査の際は，筆者ら考古調査班は当時東京大学考古学研究室の吉田章一郎氏を中心に河内の横穴を発掘調査した。

また，河内の奥鶴には石棺群も確認されており，先年，発掘調査も行われたが，さらに，同所には経約25mもある大形の円形墳も点在しており，高千穂地方では古墳時代においても一拠点をなしていたと考えられる。

（日　高　正　晴）



第2図　薄糸平遺跡周辺地形図

3. 調査の経過

調査地は，高千穂と高森を結ぶ国道325号から千弁鶴で分岐して田原へ下る町道下野・河内線沿いに開けた傾斜地にあり，2～3 mの段差で造成されている段々畑のうち宮交バス夕塩線北停留所のすぐ東側に連なる3段の畑地に位置する。鉄道建設予定線は，この3段の畑地をほぼ東西に斜断しており，この路線にかかる幅員8 m，全長80m，面積約640m²の範囲が今回の調査対象地であった。

発掘は，7月18日の打合せに従って，19日着手の予定であったが，雨の為に1日遅れ，翌20日から8月20日にかかる22日間の日程で実施した。

調査に際して，調査地を3地区に分け，町道に近い下段の畑から上段の畑地へ向ってそれぞれ第Ⅰ地区，第Ⅱ地区，第Ⅲ地区と呼ぶことにした。トレンチ設定にあたっては，各区とも路線の中央線を基準に各4 mのグクッドを組み，さらにこれを2 m×2 mで区分して，1区おきに発掘することにした。各区の呼称は，中央線に平行して南側からA・B，西側から第Ⅱ地区は21～26第Ⅲ地区は31～33とし，A—32（a—b）のように標示した。

なお，遺跡周辺の地形測量は，鉄道建設公団の安東次長他職員の方々の協力を得た。

以下発掘経過を概括する。

第 1 週（7月20日～23日）

包含層の有無・広がりと，各地区の層位の確認を当初の目的として，20日の午後から試掘を開始した。試掘は，段々畑造成時の掘削が最も少ないとみた第Ⅲ地区から実施し，第Ⅱ地区，第Ⅰ地区へと下った。23日までに第Ⅲ地区ではA—31d～33d，B—31d～32dを，第Ⅱ地区ではA—21a～25aと，B—21a～25a区を発掘した。この結果，第Ⅲ地区では，最初遺物の出土量は少なかったが，弥生後期の土器片が検出され，第Ⅲ層以下に本格的な包含層の存在が期待された。第Ⅱ地区は，第Ⅱ層上層部まで攪乱が甚だしく，土器はほとんど砕屑状態に近いものであり，包含層の存在について最初は悲観的であった。その後，A—23a，B—24a区にピットが検出されたことから，住居跡遺構の存在への期待も生れ，第Ⅱ地区の調査は，23～25区に集中することにした。

第 2 週（7月25日～30日）

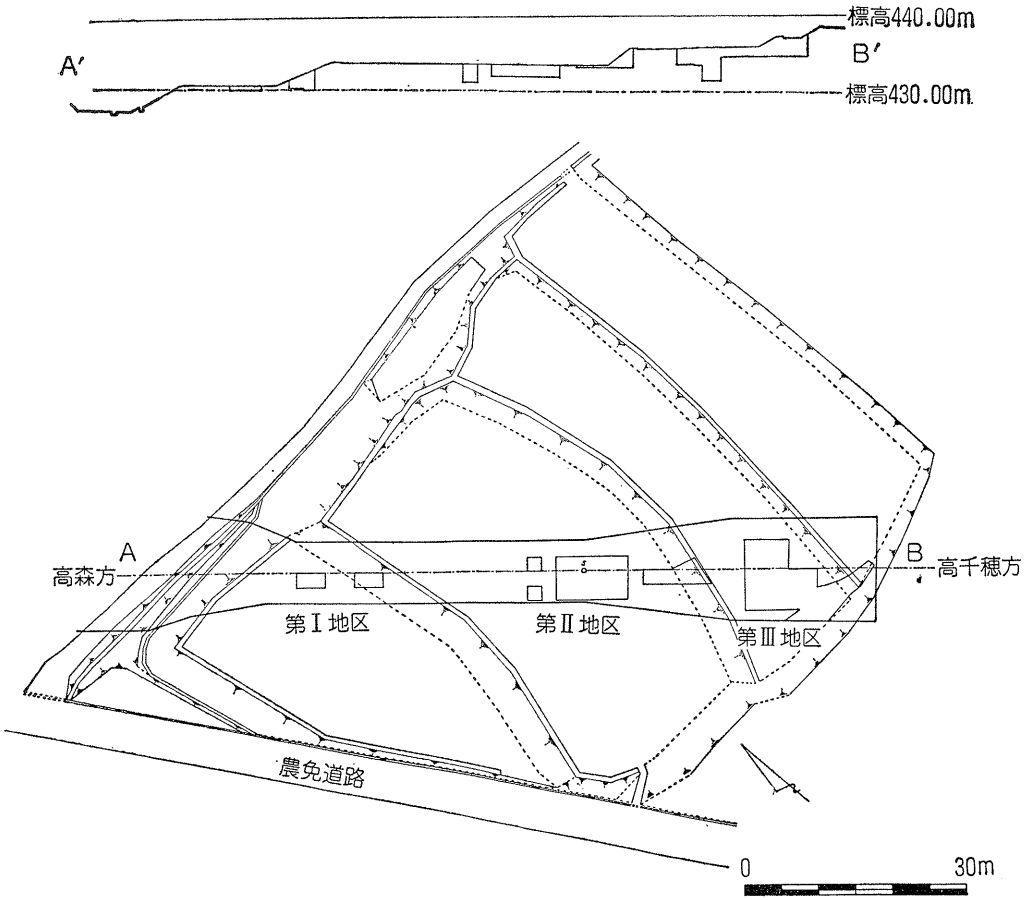
先週掘り残した第Ⅰ地区の試掘から第2週の作業を開始した。調査範囲の狭いこともあって，A—10と，A—12を2 m×4 mのトレンチ調査をした。発掘の結果，耕土下40cmで無遺物層の黄褐色粘土層に達した。遺物包含層の存在が認められないことから第Ⅰ地区の調査は25日だけで打切り26日以降の調査は，第Ⅲ地区と第Ⅱ地区に集中することになった。

第Ⅲ地区では，まずA—31～33区の発掘を進めたところ予想通り第Ⅲ層から次々に遺物が出土するようになったので，B—31～32も同時に表土剝ぎを行ない，第Ⅲ地区全面を発掘することにした。この結果，A—31～33では第Ⅲ層上層に炭化材の分布面が検出され，B—31～32では，北東壁に沿った掘り下げ部分で，第Ⅲ層下層面に須玖式土器を伴う生活遺構の存在が想定されるにいたった。そこで，29・30日にかけて，まず，A—31～33区の炭化材の完全露出作業に集中した。この作業中，A—33の南東隅に陥込み面のあることがわかったが究明は後日に残された。

28日夕刻，日高調査員到着，29日より調査を担当。茂山は所用の為30日までで帰省した。

第 3 週（8月1日～6日）

1日から北郷調査員参加，A—32～33の炭化材の精査，実測作業と並行して，A′—33隅の陥込みを確める為に，A′—34の拡張区を設け，2日から4日にかけて遺構の検出につとめた。その結果，幅1～1.2m，深さ80cmの溝であることが判明した。調査区の制約もあり，全長5mが確認できただけであった。当初遺物をめぐる環状溝になるのではないかと予想されたが，調査が進むに従がい溝底の土砂の堆積状態などから若干の疑問を残すことになった。



第3図 発掘地区図

5日には，宮崎大学農学部森林利用研究室の大塚誠講師が来訪され，炭化材の鑑定と取り上げ作業にご指導助言を得た。炭化材取り上げ後直ちに下層部分の調査を行なったが，特に変化は認められず，ピットも検出されなかった。

B—31～32区の幅2*m*の掘り下げ部分では，第Ⅲ層下層の須玖系土器とは別に第Ⅳ層下層に下城系土器が包含されていることが確かめられ，第Ⅲ地区全域を層位ごとに掘り下げ，変遷の確認につとめることになった。

第 4 週（8月8日～12日）

第Ⅲ地区に検出された遺物や遺構の実測作業を進めると共に，調査の遅れていた第Ⅱ地区24～25区の発掘作業を並進した。この結果B—24を中心に，床面とみられるような固い焼土面が検出された。

この頃から調査区の掘り下げ進行に伴い排土の量も多くなり置き場について，しばしば作業の中断をみるようになった。12日は雨の為に作業を中止し，宿舎で遺物の整理にあたった。

13日から15日の間は，盆の為作業を休止した。

第 5 週（8月16日～20日）

16日雨の為に午前中遺物整理にあたる。調査も終結に近ずき，各区とも検出された遺構を中心に精査につとめ，まとめの作業に重点を置いた。

第Ⅱ地区では，B—24～25区の遺構の精査によって，弥生後期の生活痕跡であることを確認した。第Ⅲ地区では，A′—34の溝東端の遺構確認の為に更にトレンチを東方へ伸したところ新たに生活痕跡面とみられる遺物の分布面を検出した。この分布面には，溝で切断された形跡がなく，溝底は，この生活面より上層にあったものと解された。さらに，A—32においては，第Ⅲ層下層で焼土Bと同位層に溝状遺構が検出されたが，住居跡周溝としての確証は得られなかった。最終的には，第Ⅳ層下層で，下城系土器に伴う焼土Cが検出されたところで，ほぼ全体の発掘作業を終了し，精査，実測をおこない20日をもって今回予定した調査対象区域全体の調査を完了した。

なお20日には，宮崎大学教育学部地学研究室の遠藤尚教授が来訪され，遺跡地の地質やA′—34に検出された溝の形成等についてご指導を得ることができた。

第 2 章　包含層の状態

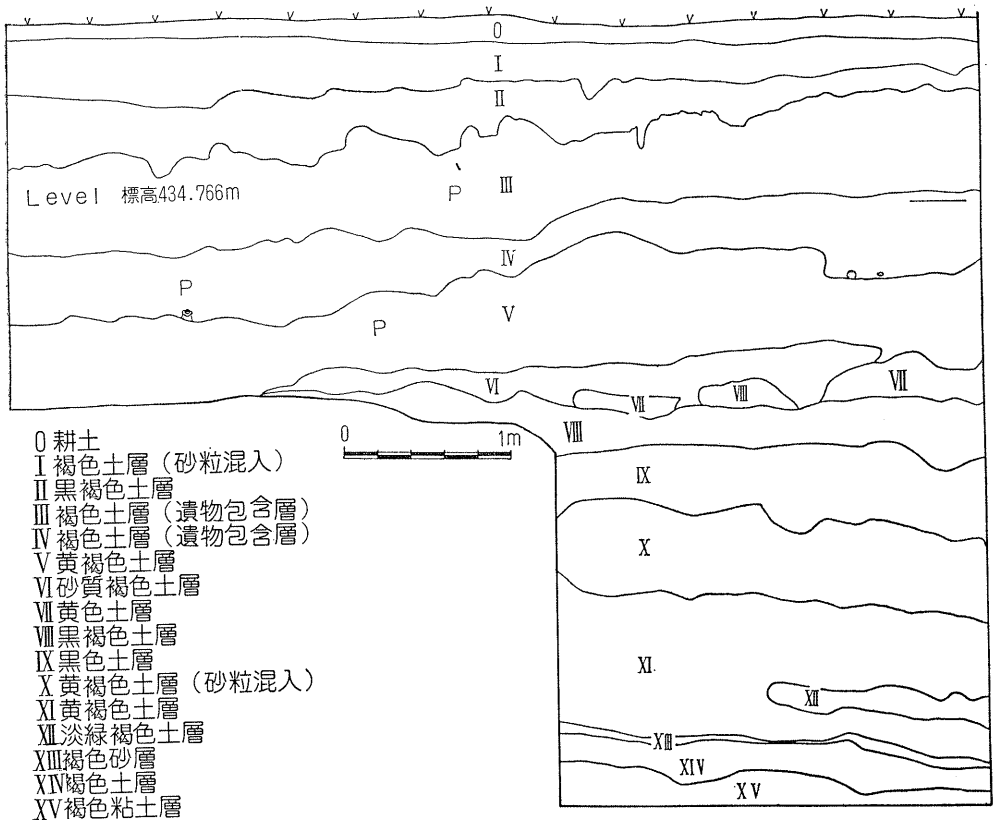
今回の調査では，第Ⅱ地区と第Ⅲ地区に遺物包含層を確認したが，包含層の主体は第Ⅲ地区にあった。

第Ⅲ地区では，第Ⅲ層から第Ⅳ層が包含層になっており，弥生前，中，後期の遺物が層位的に包含され変遷のたどれることが確認された。

第Ⅱ地区では，B—24～25区を中心に小範囲ながらまとまりのある包含層が第Ⅱ層中に検出されている。第Ⅰ地区には包含層が認められなかった。

1.　第Ⅲ地区の状態

第Ⅰ層，畑地造成時の客土であり，（耕土と，（第Ⅰ層）褐色土層，（第Ⅱ層）黒褐色土層の3層に分けられる）表土層に相当し，厚さは50～60㎝を測る。遺物は砕屑化した土器や，須恵器の細片が断片的に出土している。



第4図　第Ⅲ地区北壁土層実測図

第Ⅲ層，褐色土層（45～60㎝）。表土層が客土される以前の耕作によるものか上層部に攪乱がみられた。上層に炭化材が，中・下層には上下2段に焼土が検出されている。出土遺物には磨製石鉄，弥生式土器がある。土器は下層になるほど出土量も多く，第Ⅳ層上層部にかけて集中していた。上層と下層では土器型式に違いがみられ，焼土の分布面を介在しながら型式の前後の推移をとらえることができた。

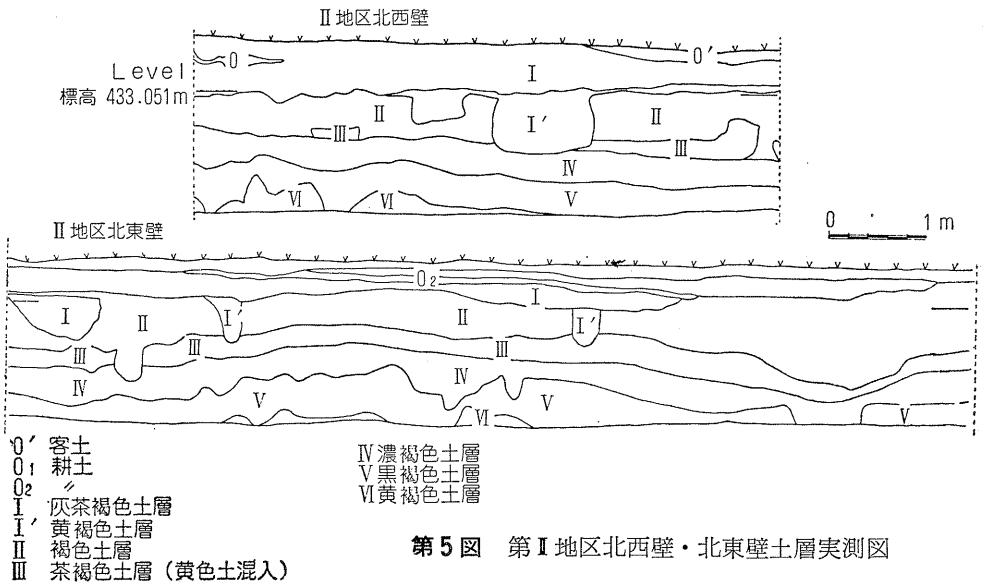
第Ⅳ層は，第Ⅲ層より粘質性の強い褐色土層である。土層の厚さは40～50㎝を測る。上層には，第Ⅲ層下層と同じく須玖系土器が多く検出されたが，下層では，弥生前期に比定されている下城系統の土器が主体を占めていた。

第Ⅴ層に黄褐色土層（60～70㎝）がくる。上層部に若干第Ⅳ層に出土した遺物の混入がみられたが，土層全体としては遺物は包含しなかった。以下第XV層まで層序が確められたが第Ⅴ層以下はすべて無遺物層であった。

薄糸平からは，過去に大形楕円の押型文土器が採集されているだけに，縄文前期の遺物包含層の存在に期待が寄せられていたが，今回の調査区内では確認されなかった。

2. 第Ⅱ地区の状態

第Ⅱ地区では，地表下170㎝の深さまで掘り下げ，5層を観察した。各層とも起伏が著しく不安定な地層を示していた。また表土層下に旧耕作面を示す芋の貯蔵穴や掘り込みがあり随所に地層の攪乱がみられた。従って，土器にしても砕屑化したものが多く，顕著な包含層はA—24～25区以外には確認されなかった。A—24～25区では，第Ⅱ層の褐色土層下層において，後期弥生式土器を伴う炭化物や焼土の分布面を確認することができた。土器型式からみて，第Ⅲ地区の第Ⅲ層土層部に検出された土器に類似し，層位的にも対比される。第Ⅲ層以下は無遺物層であった。

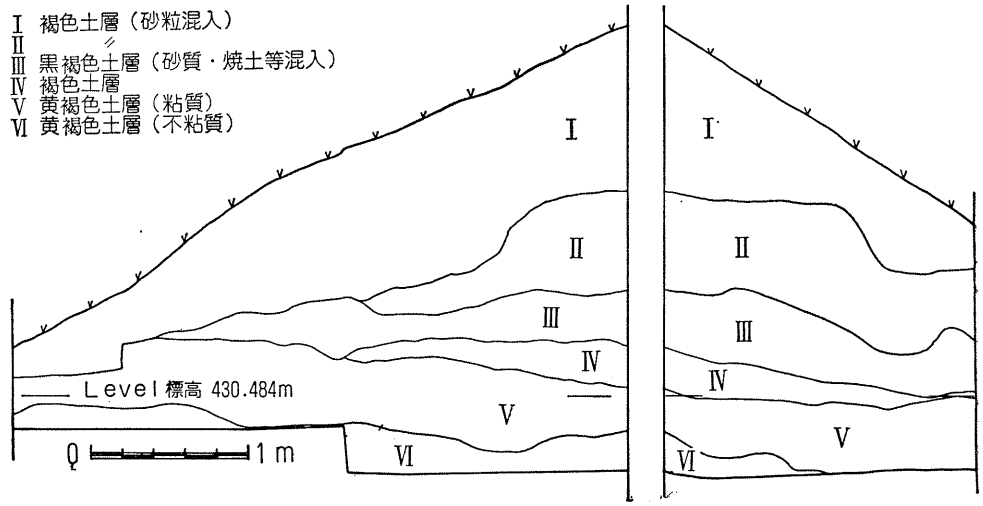


第5図 第Ⅱ地区北西壁・北東壁土層実測図

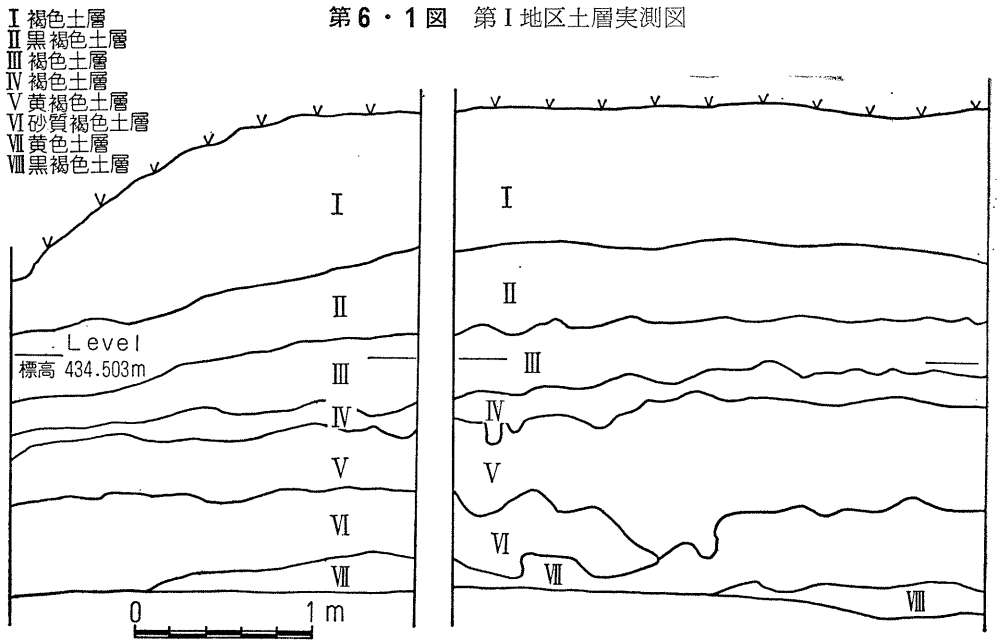
3. 第Ⅰ地区の状態

第Ⅰ地区の耕土面は，第Ⅲ地区の地表面からおよそ5m下にある。上層部が完全に削平された状態で，調査区内では遺物包含層は確認できなかった。

A—12の北西壁では，第Ⅰ層から第Ⅲ層までが畑地造成時の盛土層であり，3mの段差をなす土堤の成因になっていた。第Ⅳ層に褐色粘土質土の間層をはさみ，第Ⅴ層が安定した黄褐色粘土層になっていた。この第Ⅴ層は，第Ⅲ地区の第XV層褐色粘土層に対比される無遺物層であった。



第6・1図 第Ⅰ地区土層実測図



第6・2図 第Ⅱ地区北東壁土層実測図

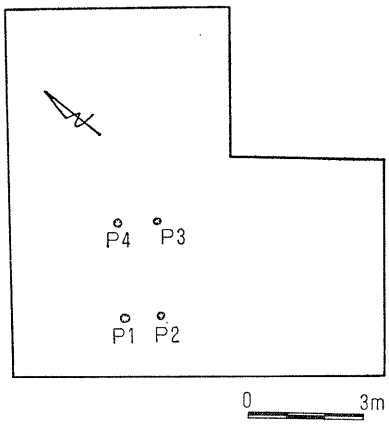
第3章　遺　　構

今回の調査区では，性格の明確な遺構は検出されなかった。第Ⅲ地区と第Ⅱ地区の一部に検出された炭化材，焼土，溝状遺構，ピットなどが，これらを介在して変遷の確められた遺物とともに生活の痕跡と認められる遺構であった。

1.　第Ⅲ地区の検出遺構

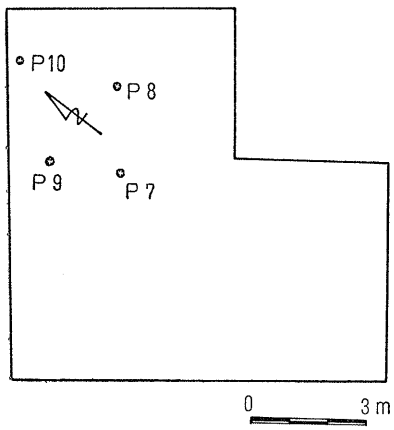
(1)　ピ　ッ　ト

A—32の第Ⅲ層上層で7，A—31～32の中層で4，計11のピットが検出されている。第Ⅲ層上層に検出された7ピットのうち，まとまりをみせたのはP1～P4で，2.5m×0.9mの長方形の配置をみた。各ピットは，P4の径24cmを最大として，いずれも20cm前後の大きさにあり，深さはP4の28cmが最も深いもので残りはいずれも15cm前後の掘り込みしかもたなかった。掘立小屋の柱穴にしては掘り込みの浅いものであった。最初の検出面が，炭化材の検出面より上層にあり，しかも，ピット内に黒褐色土が充塡していたことから，後世の作小屋の支柱穴の可能性もあり，弥生土器に伴うピットとは異るものであった。



第7図　第Ⅲ地区上層ピット配置図

A—31～32の第Ⅲ層中層で検出された4個は，直径18cm前後の大きさで，深さはP10で18cmを測ったほかはいずれもそれ以下の浅いものであった。このうちA—32区に，2.8mの間隔で検出されたP7とP8は，偶然にもP1，P4と一線に並ぶ位置に検出されており，北東から南西方向に並ぶ柵列を想定させるものであったが，層位差が明瞭なだけに疑問が残った。



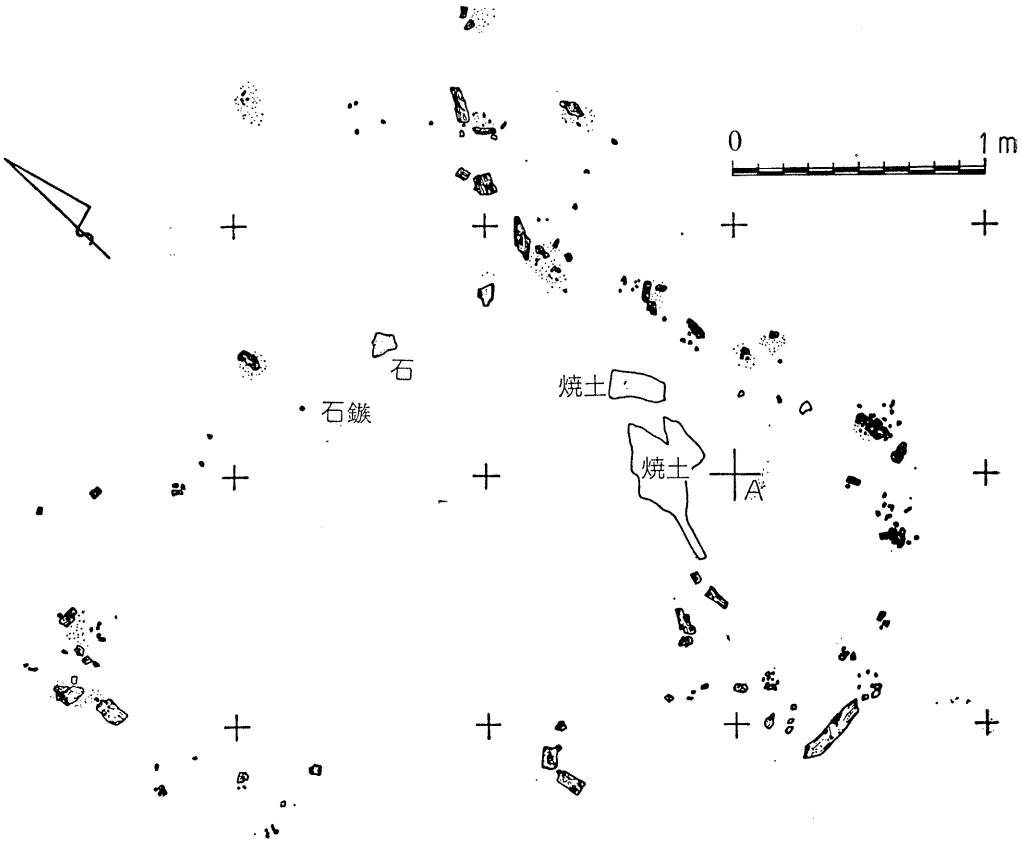
第8図　第Ⅲ地地中層ピット配置

(2)　炭　化　材

A—31の第Ⅲ層上層部に，東西 3.5m，南北4mの広がりをもって検出された。東側では南北方向に直線状に点列し，南側では全長30cm，径5～6cmの丸太状の炭化物を中心に東西方向に断続的な分布がみられた。西側は炭化物の量が少なく北西寄りに集中した形で，径8cm，長さ10～20cmほどの炭化材の断片がみられた。北

側には1ケ所に検出されただけであった。これらの炭化物の点列を結ぶと長方形状の広がりになる。東寄りの地点には90×80cmの範囲に焼土が検出されている。長方形状の広がりや焼土の存在をみると，これらの炭化物は，小屋組に使用された木材の炭化物とも考えられるが，小屋組の支柱となるようなピットは検出されなかった。

なお，炭化材の取りあげ作業は，宮大農学部の大塚誠講師が実施された。



第9図　第Ⅲ地区A・A′—31，32区炭化材出土面周辺図

(3) 焼 土 A

B—31と33区の交点を中心に，東西1.8m，南北75cmの範囲に分布していた焼土である。検出面は，第Ⅲ層褐色土層の中間で地表下80cmに位置する。前述の炭化材の分布面からは30cm下層にあたる。焼土面は固く，6～8cmの厚さであった。焼土に直接関連する遺構は検出されなかったが，周辺に出土した遺物から弥生後期に属する生活痕跡とみられた。

(4) 焼 土 B

A—31～32区にかけて，径1.8mの範囲に分布していた焼土である。属位では第Ⅲ層の下層に位置している。焼土Aからさらに20cm下層にあたる。焼土の状態から，かなり大規模な焚火

の行なわれたことが推定された。焼土のすぐ南側に東西に通る溝状遺構が検出されているが，両者を直接関連づける確証は得られなかった。周辺の遺物から須玖系土器に伴う生活痕跡と考えられる。

(5) 焼 土 C

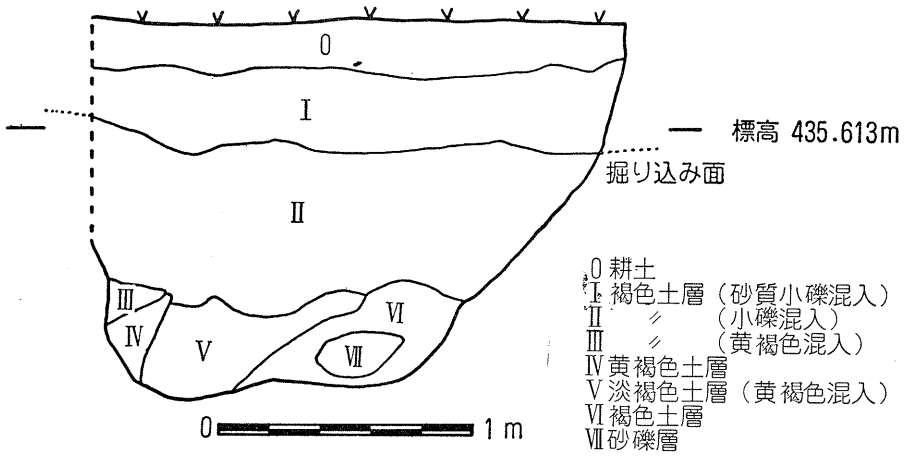
B—32の第Ⅳ層下層に検出された焼土である。 地表下140㎝に位置し，遺物包含層の最終面に近い。焼土の状態からは，一時的な焚火の跡とみられるものであった。焼土に直接関連づけられる遺構は検出されていない。付近からは，下城系統の土器が出土している。

(6) 溝状遺構

A—32の中央部分で，焼土Bと同一層面に検出されたものである。 溝幅 25～40㎝，深さは20㎝ほどの，断面形U字状の浅い溝である。 東西方向に直線状に通り，全長3.7mほどが確認された。溝の両端は自然消滅に近い状態で切れており，全貌が明らかでないだけに溝の性格を確認するにはいたらなかった。溝の西端に近い地点に，伊佐座式土器の系統をひくとみられる壺型土器の二重口縁部が1点出土しており，溝状遺構や焼土Bの時期比定の上で注目される。

(7) 溝

A′—34の拡張区に検出された溝である。調査対象区の制約を受け， 全長5mほどが確認できただけである。溝は東西に流れをもち，溝幅1.2～1.5m，深さ85～90㎝，U字状の断面形を呈する。東端は削平された状態で消滅しており形状の確認ができなかった。西端は調査区域外にかかるため未調査である。 最初に溝の堀り込み面が確認されたのはA′—33の南東隅の第Ⅲ層上面であった。拡張発掘の結果，溝は一段高い南側傾斜面に沿った形で，東から西方へ流下しており，溝底の傾斜は西へ深くなり，地形の傾斜に一致した勾配が観察された。溝断面の土砂堆積状態をみると，急激な流れに浸蝕されていたことが明らかである。このような溝底の状



第10図 溝南西部断面土層実測図

態や，広狭一定しない溝の状態を考えると，人為的な排水溝とするより，傾斜面の側辺に集まる流れの侵蝕で形成された自然溝とみるべきものかもしれない。事実その可能性の強いものであった。

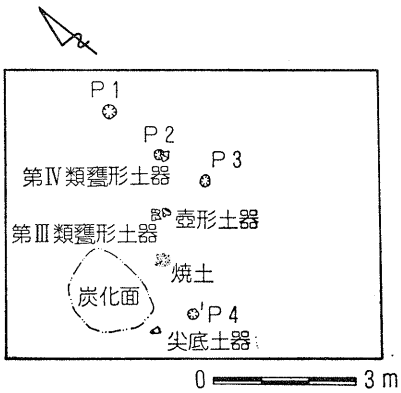
出土遺物としては，溝の東端部分から石鏃や石庖丁が検出されているが，これらの遺物は拡張区東部に散布した遺物群の一部に属するものであった。

2. 第Ⅱ地区の検出遺構

第Ⅱ地区では，A—24～25区を中心にして，ピット4，焼土，炭化物の分布面が第Ⅱ層褐色土層中に検出された。これらは，ほぼ同一層位面にあり同時期の生活痕跡としてとらえられるものであった。

ピットは，南北5*m*，東西4*m*の遺構分布面の東側に，P_1・P_2・P_3が南北方向に1.4*m*，1.1*m*の間隔で直列し，P_3から南西2.9*m*の位置にP_4があり，全体形は三角形状の配置になっていた。このピット列の西側に焼土・炭化物の分布がみられた。焼土は，P_4の北1.2*m*の位置にあり，焼土の西側2*m*四方に炭化物が分布する。また，焼土の北東1*m*，ピットP_3からは西へ1*m*の地点に，わりとまとまりのある形で，壺形土器と甕形土器が出土している。このような遺構の配置からみて一連の生活痕跡であることは明白であるが，ピットの配列からは特定の住居跡構造を想定することは困難である。仮に一種の住居跡様遺構とするにしても，それは，あくまで野営地的性格の強いものであった。出土遺物からみて，弥生後期に比定される。

（茂　山　　護）



第11図　第Ⅱ地区中層ピット配置図

第4章　遺　　物

1. 土　　器

過去，本遺跡周辺において押型文土器片(第16図)の表採が知られているほか，当高千穂地方は昭和35年に発掘された陣内遺跡を有しており，また弥生式土器では三田井出土の「下城式」の施文（文様）構成をみる甕形土器，岩戸出土の突帯文の著しい壺形土器，同岩戸の円形浮文および突帯文をみる壺形土器等の重要の土器類が知られていることなどから，本遺跡発掘に臨み次の諸点にわたる問題点が想起された。

1つは，縄文早期押型文土器の明確な包含地（層）の追求の問題であり，その生活跡の確認の問題であった。東九州地方の中で，ことに宮崎県内における縄文早期の編年的問題が未だ空白の感を免れぬ今日，本地域における発掘調査は重要な意味と予感を持つものであった。

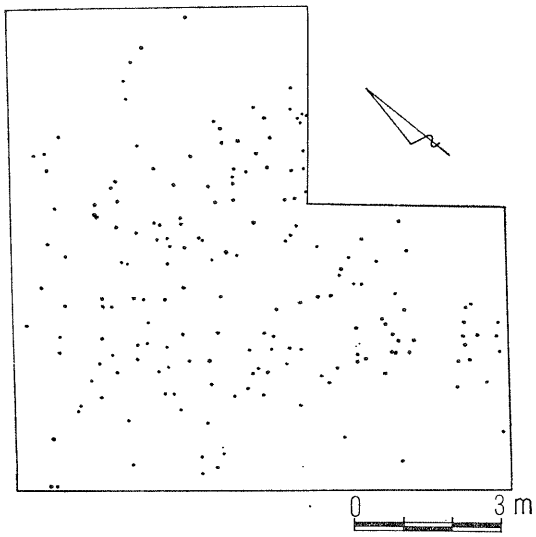
2としては，「陣内式」を含む縄文後・晩期の問題であった。編年的には「陣内式」に先行する型式として「下弓田式」が設定され，後続する型式として「松添式」が設定されてはいるが，土偶を伴い特異な地域相と時代相を呈した当九州山岳地域における縄文後・晩期の様相はそれ程には単一にその面の全貌を未だ明らかにしていないとみるべきであった。また，本地域における縄文後・晩期の資料を豊富化することは，ことに陣内遺跡の調査が層序的問題を中心としたため，その空間的生活跡ないしは文化圏・交易圏を追求する上で多くの問題を孕むものであった。

3としては，いうなれば「陣内以降」とでもいうべき問題であった。すなわち，縄文晩期から弥生前期にかけての<過渡期>としての問題であり，農耕生産を経済構造ないしは社会構造の基礎に組み入れはじめる弥生時代を迎え，当山岳地域における経済構造ないしは社会構造はどのような刻印をその生活の表裏に残し変化していったのかの問題であった。

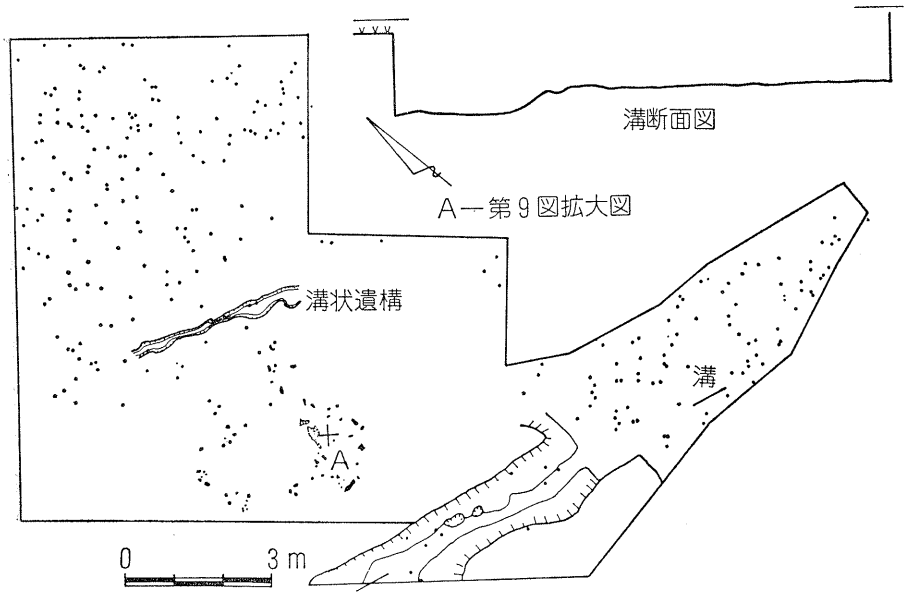
4としては，種々弥生式土器の特徴的なものが確認されていながら，未だ発掘資料として層位的に確認された明確な弥生式土器をみないことに発する，本地域における弥生時代の未知に関する問題であった。さらに，「停滞的」と汎称される本地域の地域相・時代相の追求に関する提起を孕むものであり，森貞次郎氏の提起を受ければ「九州の屋根ともいうべき臼杵―八代構造線の高山地帯の尾根が，山地に住む人たちによる重要な交通路線であった[1]」ことの実態を追求することでもあった。

結果的には，4の問題に属する包含層を確認するのみに，今回の発掘区は限られたが，依然他3点については今後の問題として<保存>されたと考えるべきであろう。

さて今回の本遺跡発掘においては，縄文式土器と思われる細片から須恵器の細片に至るまでの土器類の出土を認めたが，包含層として確認し得たのは中期から後期にかけての弥生式土器であった。甕形土器・壺形土器と数量的多少を示すが，鉢型土器とみなせるのは数点に限られ，高杯形土器にいたってはそれと確証をもってみなせるものは確認出来なかった。また，調



第12図　第Ⅲ地区出土遺物散布図（レベル100まで）



第13図　第Ⅲ地区出土遺物散布図（レベル100～200）

査区の狭小さも手伝い，完形に復元し得たものは壺形土器1点，ほぼそれに近く復元し得たものは甕形・壺形各1点，さらに部分的に既存の形をとどめたものは同様に各1点と限られたものになった。しかし，旧来的な汎称の如く「停滞性」ないしは「非独創性」とだけでは画一することの出来ない様相を示す施文（文様）構成を甕形土器に認めることが出来，またその層位的な観察も一定程度押し進めることが出来たと思う。その意味からも，数量的問題・発掘区の狭小さにもかかわらず，貴重な問題を提起する発掘調査に成り得たと考える。

今回の発掘は，畑地の段差に応じ，最下段を「第Ⅰ地区」，中段を「第Ⅱ地区」，上段を「第Ⅲ地区」とし，さらに第Ⅲ地区の南東部端に検出された「溝」を追求して拡張された区域を「拡張区」とし，以上の4地区に分けて行なわれた。この内，最下段の第Ⅰ地区では，見るべき土器片の出土を認めず，数点の細片に出土が限られた為，この項においては除外するしかない。

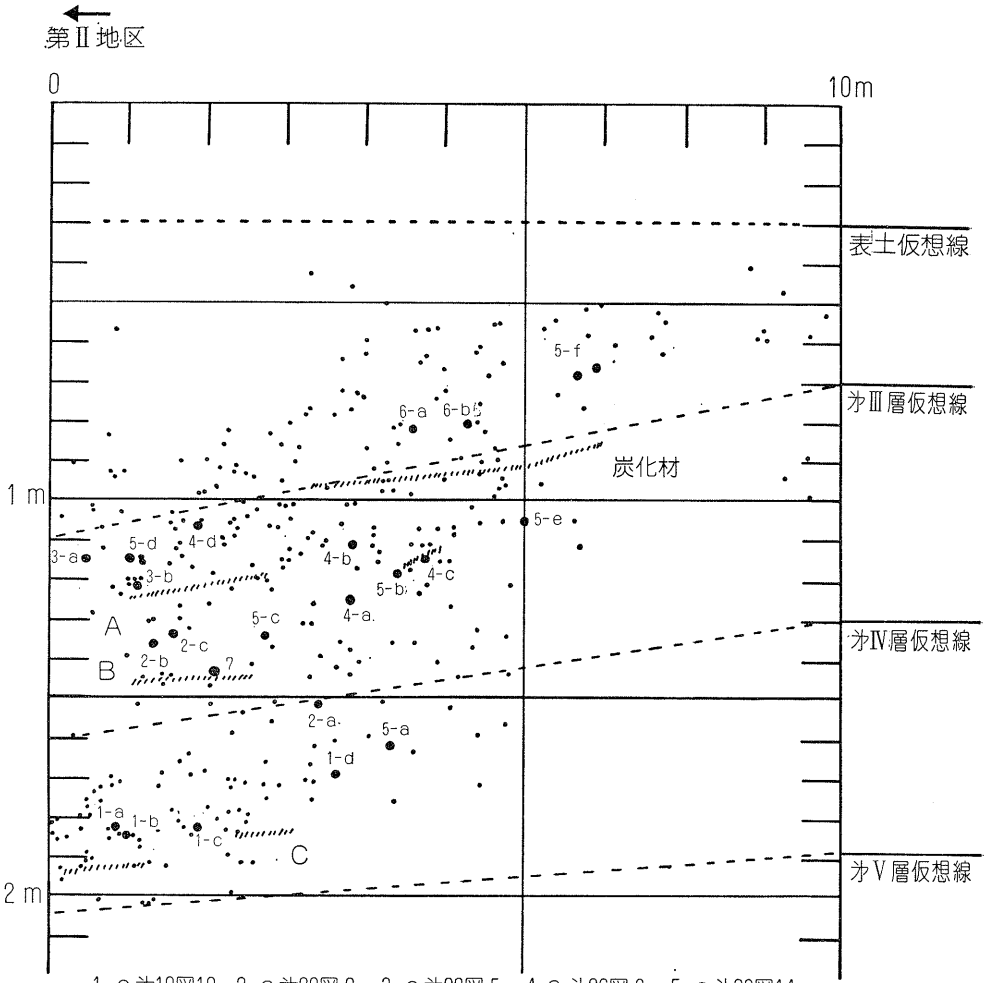
第Ⅱ地区は基盤整備のための削平・客土が著しく，その為かえって比較的単一な包含層ないしは生活面を検出することが出来た。

第Ⅲ地区は最も層位的追求がなされた地区である。第Ⅲ地区における包含層にあたる「第Ⅲ層」及び「第Ⅳ層」からは，ほぼ4期にわたる炭化材散布面・焼土面を検出することが出来た。第Ⅲ層上層には炭化材の散乱と焼土を確認し，同層中層には焼土A，同層下層には同じく焼土Bと第Ⅲ層中に3期，さらに第Ⅳ層下層に焼土Cを検出しており，合計4期がそれである。（第14図参照）

拡張区は，現実的には第Ⅲ地区における生活面としての第Ⅲ層上層・中層をほぼ共有しつつ，第Ⅲ地区の上面にあたる「第Ⅳ地区」とでもいうべき層位を発掘したことになる。

さらに，除外した第Ⅰ地区を除く3地区を平面的に概観すると，一つの共通した生活面ないしは包含層にゆきあたる。それは今回の本遺跡発掘において最も重要なポイントとなる，沈線文を縦横に「工」の字に構成する文様をもつ甕形土器（第22図1・5～7）と，突帯文を同様に構成する甕形土器（第26図1～9）の2様の甕形土器を伴なう面（層）である。すなわち，第Ⅱ地区において比較的単一な包含層（第15図）として検出されたのがそれであり，第Ⅲ地区においては第Ⅲ層中層にあたるのがそれであり，拡張区においては拡張区の下部面がそれである。

以上のことから，この項においては，最も層位的な発掘が行なわれた第Ⅲ地区の土器類を層位的に観察することを＜時間的＞縦軸とし，3地区を通じて共通項として検出された土器類を平面的に共伴関係で観察することを＜空間的＞横軸に配すことによって構成したいと思う。

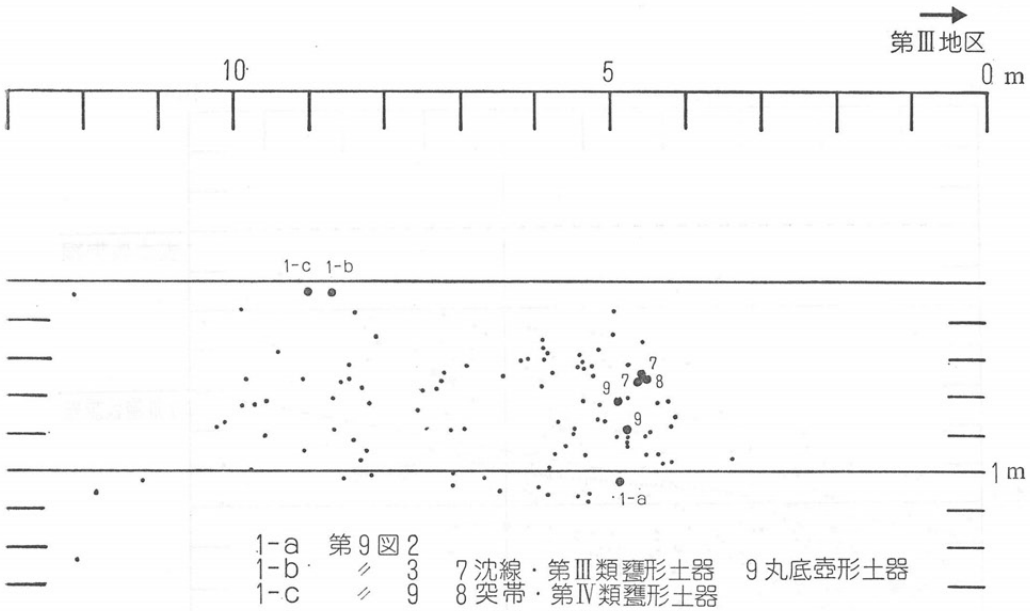


1-a 第19図10　2-a 第20図 2　3-a 第22図 5　4-a 第26図 8　5-a 第28図14
1-b 〃 6　2-b 〃 1　3-b 〃 6　4-b 〃 7　5-b 〃 15
1-c 〃 7　2-c 〃 3　4-c 〃 4　5-c 〃 10
1-d 〃 4　4-d 〃 2　5-d 〃 7
5-e 〃 8
5-f 〃 9

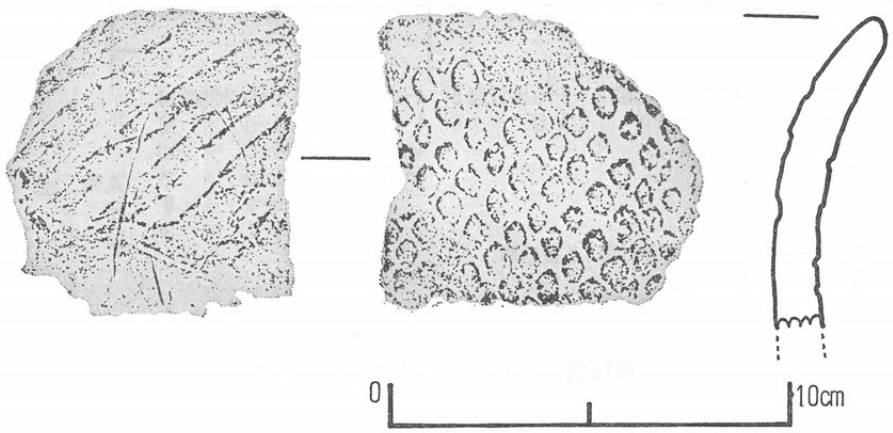
A 焼　土
B 〃
C 〃

6-a 第20図 5　7 第21図 1 二重口縁
6-b 〃 4

第14図　第Ⅲ地区土器散布レベル図



第15図 第Ⅱ地区土器散布レベル図



第16図 薄糸平遺跡表採押型文土器実測図・拓影

（県総合博物館所蔵）

縄文式土器（第17図１～11・第22図14～19）

本遺跡においては，明確な包含層として縄文式土器の検出をみなかった。しかし，今回の発掘区の周辺に縄文式土器の包含地があることは，今回確認されたものがわずかにしろ明示されたと考える。

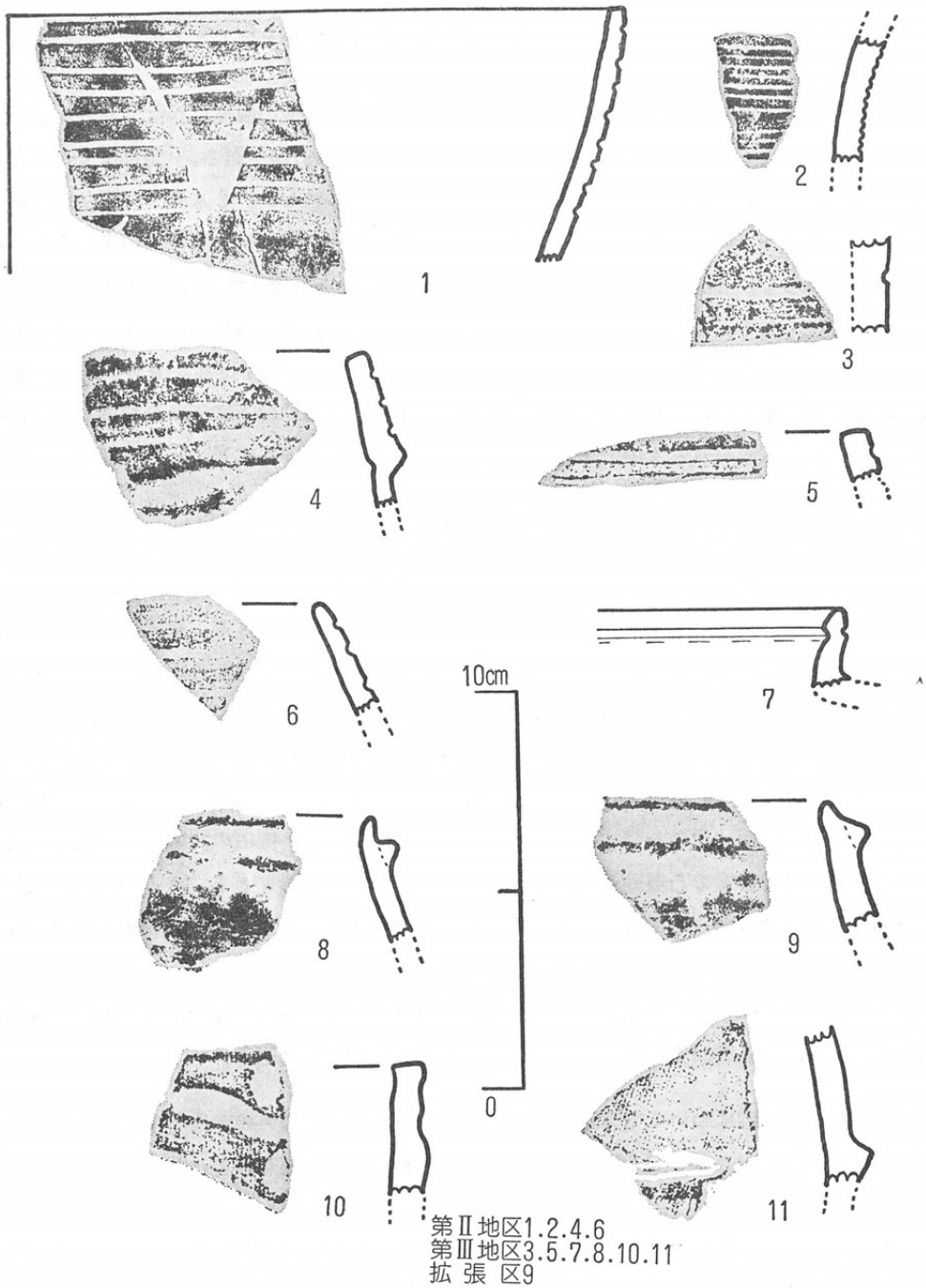
１は黒色磨研の著しい土器である。断面も黒色を呈し，焼成の温度はかなり高いと思われる。口縁下から八条の沈線を施す，精製土器で，推定口径は31㎝を計る。頸部にくびれを持ち，胴部にかけて開き張りをもつ深鉢形を考えて良いかもしれない。２も同じく黒色の磨研土器の細片と考えてよいが，１ほど質は良くない。表面は黒色を呈すが，断面は白黄色を呈し，やや剝離も進んでいる。焼成も余り高い温度で行なわれたとは思えず，沈線も１に比して細く，間隔も狭くなる。３も同じく沈線を付す土器片であるが，弥生前期の口縁下に沈線文を施す型式の細片とも考えられ，確証的ではない。焼成の温度は余り高いとはいえず，裏面は剝離している。褐色を呈し，土器に多量の石英砂を混入する。４は口縁下に三条の沈線を施す，深鉢型土器の破片と思われるものである。黒褐色を呈すが，石英砂を多量に土器に混入し，剝離も進み脆い感じを与える粗製の土器である。

５も４と同様の器形を示すと考えられるが，４に比して焼成も良好であり，灰黒色を呈す。６は内傾した口縁部を持つ土器の細片である。焼成はきわめて良好であり，黄褐色を呈す。胎土に石英砂を交じえる。７は浅鉢形を示すと思われる土器の細片である。灰黒色を呈し，細かい砂粒を胎土に交じえる。焼成の温度もかなり高いと思われ，精製土器の部類に入ろうかと思う。８は深鉢型を示すと思われる土器片である。濃茶褐色を呈し，焼成も良好である。若干の煤付着をみとめ，胎土には石英砂を混入する。突帯は貼り付けである。９も８と同様の施文と器形をみる土器片である。焼成も良く，茶褐色を呈す。胎土に細かい石英砂を交じえる。10は，灰褐色を呈し，断面は黒色を呈す，焼成も良好な土器片である。幅広の沈線と楕円状の凹文を有する。胎土には多量の石英砂を混入する。11は，黒色磨研土器片とも，あるいは三角状突帯の一部ともみなせる細片である。焼成はきわめて良好であり，表裏面・断面共黒色ないしは灰黒色を呈す。胎土には粗い石英砂を交じえる。

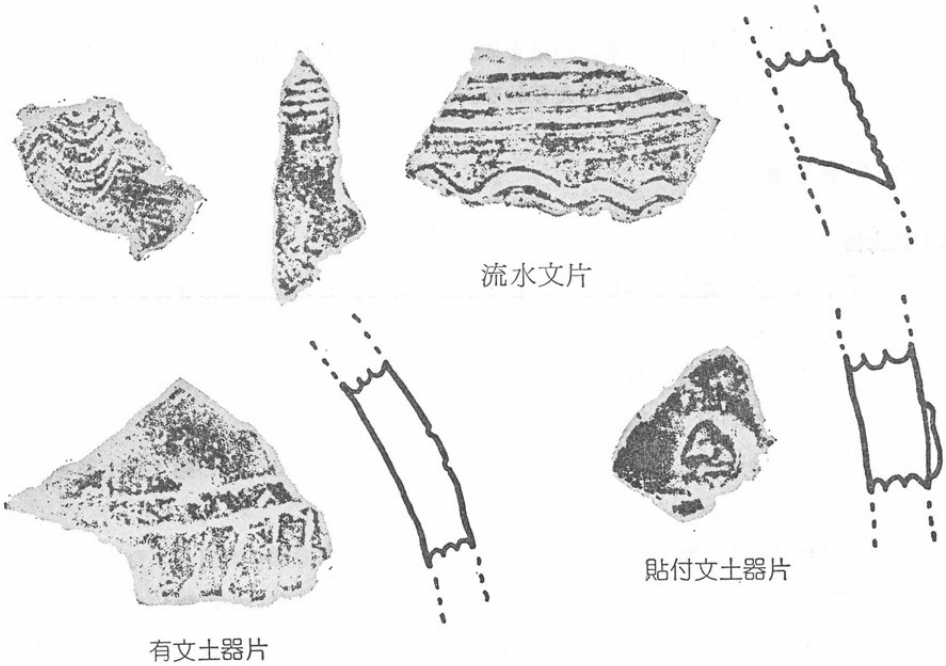
第22図14～19に一括したのは，研磨を施した沈線を付する薄手の細片である。黒色あるいは黒褐色を呈し，一応磨研土器の土器片として取り上げておこうと思う。

以上が縄文式土器についてであるが，明確な特徴をもつもの以外の細片等については，やはり疑問符を付しておこうと思う。また，10・11には櫛目状の調整を認め，なお一考すべきであろう。

ともあれ，今回検出した縄文式土器は，賀川光夫氏の分類[2]によればおおよそ晩期Ⅰ式ないしはⅡ式に比定されよう。さらに，具体的には「陣内式[3]」との関係が想起されようし，またことに８・９については松添貝塚との関連[4]が示唆されようが，限られた点数の中での速断は避けたいと思う。



第17図　縄文式土器実測図・拓影



第18図　出土土器実測図・拓影

弥生式土器（第18図～第35図）

今回の調査区内での弥生式土器の上限と下限を細片の中にも求めるならば，ほぼ弥生時代全期にわたる時期が求められようと思う。その上限としては，第18図にかかげた有文土器片が上げられよう。二条の横位への沈線の下に斜位に同じく沈線を施したもので，「板付Ⅰ式」の中にみるものである[5]。しかし，この手の施文（文様）構成は後の「城ノ越式」にも受けつがれるものであり，あるいは「城ノ越式」に伴うものとみるべきかもしれない。下限としては，第18図の流水文片を上げることが出来よう。本遺跡の今回の発掘区内では，明確な形でこの文様を付す，いわゆる「安国寺式」土器の出土はみなかった。しかし，他に拡張区から後期の特徴的なものとして「免田式」の土器片（第30図１）を検出しており，おおよそこれら「安国寺式」あるいは「免田式」を下限として想定出来よう。

しかし，これらいずれも層位としての確認は出来ず，包含層として確認し得たのは，ほぼ中期から後期にかけてのものであった。したがって，ここでは第Ⅲ地区において４期認められた生活面に伴う土器類の内，甕形土器を各々の生活面における指標として取り上げ分類を行ないたい。

なお，第Ⅱ地区はほぼ80㎝掘り進んだところで包含層を突き抜け，第Ⅲ地区はほぼ180㎝掘り進んだところで同じく包含層を突き抜けた。すなわち第Ⅱ地区は，第Ⅲ地区における第Ⅲ層下層以下の包含層を有さないことになる。これは，たまたま第Ⅱ地区の発掘区が包含地からずれた為によるか，または第Ⅱ地区，第Ⅲ地区間の土層の相異・変化から推量するなら，第Ⅲ

地区における第Ⅲ層下層以下の時期，当第Ⅱ地区に住居ないしは生活の立地条件として適さない地形的な制約が存在したためとも考えられる。

＜第Ⅳ層下層＞

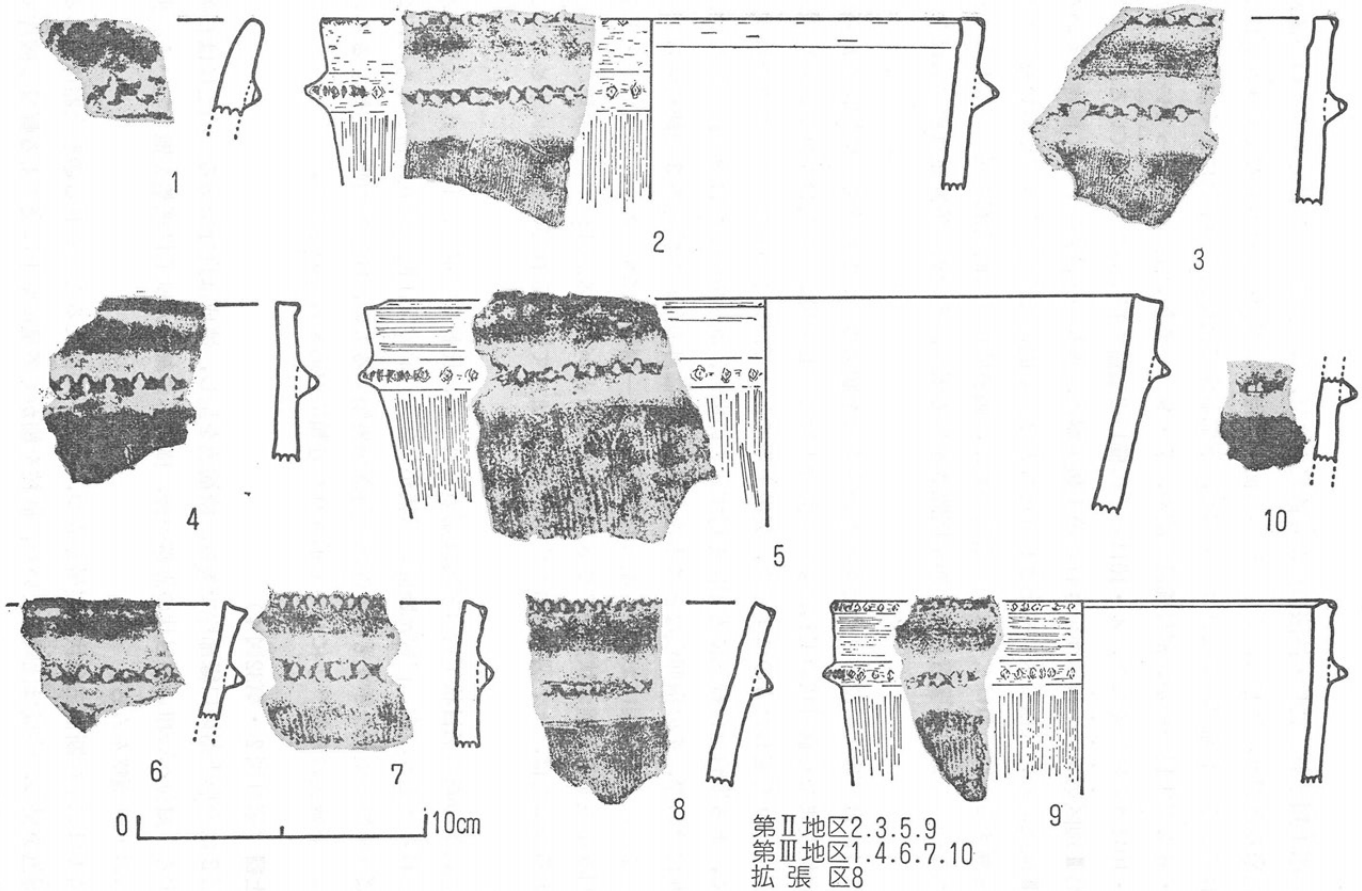
第Ⅰ類土器（第19図1～10）

いわゆる「下城式」の甕形ないしは深鉢形の土器である。この土器類は3地区を通じて検出されたが，第Ⅱ地区より出土した3点の内2点は出土レベルが高すぎ（第15図参照），客土に包含された可能性が強く，層としての包含とは思われない。逆に第Ⅲ地区より出土した6点の内4点が第Ⅳ層下層に集中し，明確な層位としての包含が認められた。

したがって，今回の発掘区における最下層を成す一群の土器類は，この第Ⅰ類土器を指標とする。

1は口縁部が角ばらず，断面が丸みを帯びるものである。口縁部に刻目をもたず，突帯に施された刻目は粗剛である。突帯の貼り付けも粗雑である。焼成は良いが，黒色を呈し，胎土には石英砂を交じえる。突帯から上の器面はヨコナデ調整を施してある。他9点のいわゆる「下城式」とは異質な印象を受けるが，ここでは一応第Ⅰ類土器に分類しておこうと思う。2は口縁上面の断面が角ばり，ほぼ平坦な傾斜を示すものである。口縁部及び突帯に刻目をもつ。焼成の温度はかなり高く，褐色を呈す。胎土に石英砂を交じえる。3は2と全く共通した形状・施文・焼成・色調・胎土を示すものである。若干突帯の位置が下方にずれるが，同一個体とみなしうる。口唇内面に幅1㎝の調整の凹みをみる。平面な先端をもつ工具による調整痕と思える。4も同様に平坦な口縁部の断面をもつが，口縁部に刻目をもたず，突帯のみにそれを有するものである。口唇外部に突帯状の粘土の張り出しを認めるが，意図的ではなく技法的なものによると考えられる。赤褐色を呈し，焼成は良いが，突帯下の調整は粗い。刻目は深く施されている。

5は同様に口縁部断面が角ばるが，口唇外部が外傾するものである。口縁部に刻目をもたず，突帯のみに刻目を施す。黒褐色を呈し，焼成は良く，胎土に石英砂を混入する。6も同じく，口唇外部が外傾するものである。突帯のみに深く刻目を施している。黒褐色を呈し，焼成は良い。7は口唇外部が外傾し，口縁部および突帯に刻目を施すものである。茶褐色を呈し，焼成は良く，胎土に石英砂を交じえる。表面の調整は，突帯上がヨコナデ・突帯下が櫛目によるが，裏面の上部も横位に櫛目状の工具による調整を認める。8も7と同じ形状と施文を成すが，7に比して口縁部及び突帯に施された刻目は小さく浅い。黒褐色を呈し，焼成は良く，胎土に石英砂を混入する。9は逆に口唇内部がやや内傾するものである。茶褐色を呈し，煤付着を認める。石英砂を胎土に交じえる。口縁部の刻目は突帯の刻目に較べて小さく浅くなっている。10は口縁上部を欠くが，表面が黒褐色を呈し，裏面が黄褐色を呈す，突帯部の破片である。他第20図8～10・第33図1～9等も「下城式」の部類に加えられようが，明詳をきわめないため，図示するに留めた。第Ⅰ類に分類したものにこれらを加え，実際の「下城式」として



第19図　第Ⅰ類土器実測図・拓影

の分類が，またなされ得るに違いない。

以上，第Ⅰ類土器を調整・技法の点から観察すれば，ほた安定した手法というものを認めることが出来ると思う。調整は，突帯上部の器面・突帯下の器面それぞれ異なる調整が意図的に撰択されている。上部器面にはヨコナデ調整，下部器面には櫛目状の工具による調整である。2・3・8など木目の細かい密な櫛目を認め，7・9はやや粗い工具と替わっている。また，4・5・10はさらに粗くなり，4・10はことに櫛目の痕跡を粗くのみとどめている。このことから，第Ⅲ地区第Ⅳ層下層に検出される第Ⅰ類土器は，調整の手法からいって粗雑なものを残し，第Ⅲ地区あるいは拡張区に検出されるそれとは技術的にも使用する工具からいってもある隔たりを画するといわねばならない。またそれは，両者間に在る時間的差異とみなしても良いかもしれない。しかし，後者の出土層が明瞭さを欠く限り，その層位的断定は避けねばならない。

技法には，ほぼ忠実に踏襲された順序というものを認めることが出来る。(a)胴部下から口縁部の一定程度までを櫛目状の工具によって撫で上げる。(b)突帯の貼り付けを施す。(c)突帯の貼り付け面をより安定したものにする為，突帯上部にかけて口縁下からヨコナデ調整を施す。(d)突帯部に，ある場合は口縁部にも刻目を付す。この場合，(a)と(b)の順序は確証的ではないが，突帯貼り付けの際，その指押痕などによると思われる櫛目の乱れた状態を3で観察することが出来た。また，(c)の工程において，貼り付け面をより一層強固にする為か，突帯の上・下部の器面に凹みを生ずる調整の状態が7や8で確認することが出来る。(d)の工程が最終の工程に属するであろうことは，ナデ調整された痕跡が刻目によって歪められている状態に求めることが出来る。

以上，調整の際の櫛目状工具の差異は認められるが，比較的安定した「下城式」土器の手法が認められると思う。次に口縁部断面の形状から認められた，(1)断面が丸み帯びるもの，(2)断面が角ばり平坦な傾斜を示すもの，(3)口唇外部が外傾するもの，(4)口唇内部が内傾するもの等は，既に「下城式の分類[6]」において示された分類に対応するものである。

壺型土器（第21図2・第32図4）

第21図2は壺形土器の口縁部片である。淡褐色を呈し，焼成は良好である。胎土には石英砂を混入する。縦位への粗い櫛目状の調整の後，横位への細かい刷毛目調整を施している。裏面は横位へのナデ調整をみる。

第32図4は二条の断面三角状の突帯をもつ，肩部下に当たると思われる壺形土器片である。淡い赤褐色を呈し，焼成は比較的よいが，砂粒を細かく多量に胎土に交じえる軽量な破片である。突帯部の貼り付けはわりに粗雑である。

おおよそ，本第Ⅳ層下層に伴なう壺形土器は，これら破片の特徴を有するものと考えてよかろうと思う。すなわち，外に大きく開口した口縁部をもち，頸部・肩部・胴部等に数条の突帯を付す，突帯文の著しい器形である。本遺跡の周辺からでは，岩戸において2種の突帯文の著

しい壺形土器の出土をみている。一つは，断面カマボコ状の突帯を，頸部・肩部・胴部に各々三条施した，大きく開口する口縁をもつものであり，今一つは口縁上面に円形浮文を施し，口縁に単線による鋸歯状文をもつ，頸部から胴部にかけて13条の突帯文をみるものである。前者は第Ⅱ様式・後者は第Ⅲ様式に分類される[7]。

ここでは一応，前者に当たるものとして「大津式[8]」を上げておこうと思う。第32図4と同様の突帯をもつ土器片として他に，第32図5と第34図13を上げられる。しかし，いずれも客土からの出土である。第32図5は，黒褐色を呈し，焼成も良好である。裏面に粗い刷毛目調整をみとめる。第34図13は，茶褐色を呈し，焼成は良い。突帯の貼り付けは二者とも第32図4と同様に粗雑である。これらを，ここでは一応「大津式」の特徴をもつものとしてみておきたい。

第35図18は，第Ⅲ地区の最下層から出土した上げ底の底部である。白褐色を呈し，焼成は良好である。表面には明瞭な櫛目状の調整をみとめる。底に煤付着をみとめる。胎土に石砂粒を混入する。直接的に，第Ⅰ類土器として上げたものの底部になるとは考えられない。

以上が第Ⅳ層下層にみとめられた特徴的な土器類である。

第Ⅰ類土器—「下城式」については，現在まで，そのものの編年的位置付けの問題と共に，共伴関係の問題も多く残されてきた[9]。また，本遺跡における第Ⅰ類土器も共伴資料の確証的なものにとぼしい。第14図の層序土器散布図にみるように，第Ⅳ層下層での散布状態が第Ⅱ地区よりにかたよりを示すのは，発掘作業上の都合により，下層に至るにしたがって，その区域を現実的な第Ⅲ地区の四分の一程に狭ばめた為である。その為，下層の平面的追求が極めて制約されたものになったことも，共伴資料の明瞭さにとぼしい要因の一つであると思う。

ともあれ，本第Ⅳ層下層の時期的問題は，中期「大津式」に相当する時期を想定してもよかろうと思う。

＜第Ⅲ層下層＞

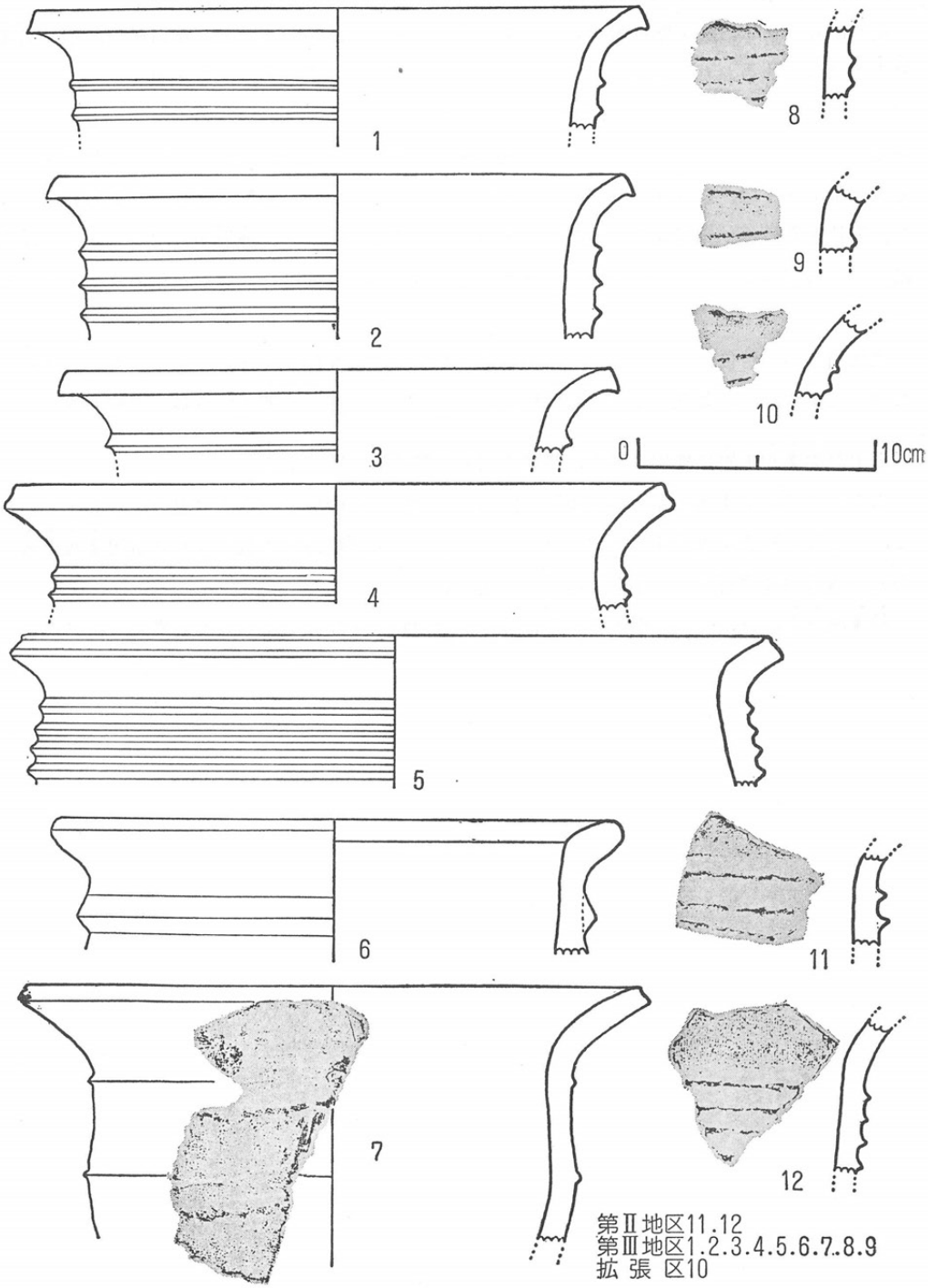
第Ⅱ類土器（第20図１～３）

本遺跡において，第Ⅰ類土器「下城式」についで出現するのは，口縁下に数条の突帯をもつ甕形土器である。同様に口縁下に数条の突帯をもつものとして，第20図３～５が上げられるが，この内５を除く二点は突帯の形状からみる限り，全く第Ⅱ類土器に共通しているといえる。しかし，器形上の変化がみとめられ，また出土レベルもかなり高いことから，ここでは第Ⅱ類土器の後続型式として第Ⅵ類に分類している。

１は濃茶褐色を呈し，煤付着をみる。石英砂を胎土に交じえ，焼成も良好である。２は表面に煤を付着し黒色を呈し，裏面は赤褐色を呈す。同じく石英砂を混入する。３は黒褐色である。

１・２・３共，口唇外部に向けて粘土の張り出しを認める。同じくすべて調整はヨコナデ調整である。突帯には細い粘土紐を用い，貼り付けている。これら三点は形状からも全く共通していることから，同一個体とも考えられるが，ここでは別個体として判別しておく。

器形としては，口縁部が「く」の字に外反し，胴部にふくらみを持たないものが考えられる。これは，三田井出土の甕形土器にみられる器形にほぼ共通している。三田井出土の甕形土器は，刻目突帯を縦横に「工」の字に構成したものであり，第Ⅱ様式に分類される。しかし，本遺跡出土のものは，刻目突帯をもたず，突帯の形状からみて突帯の持ち方としても後続するものとみうけられる。



第20図　甕形土器実測図

壺形土器（第21図１・第32図１）

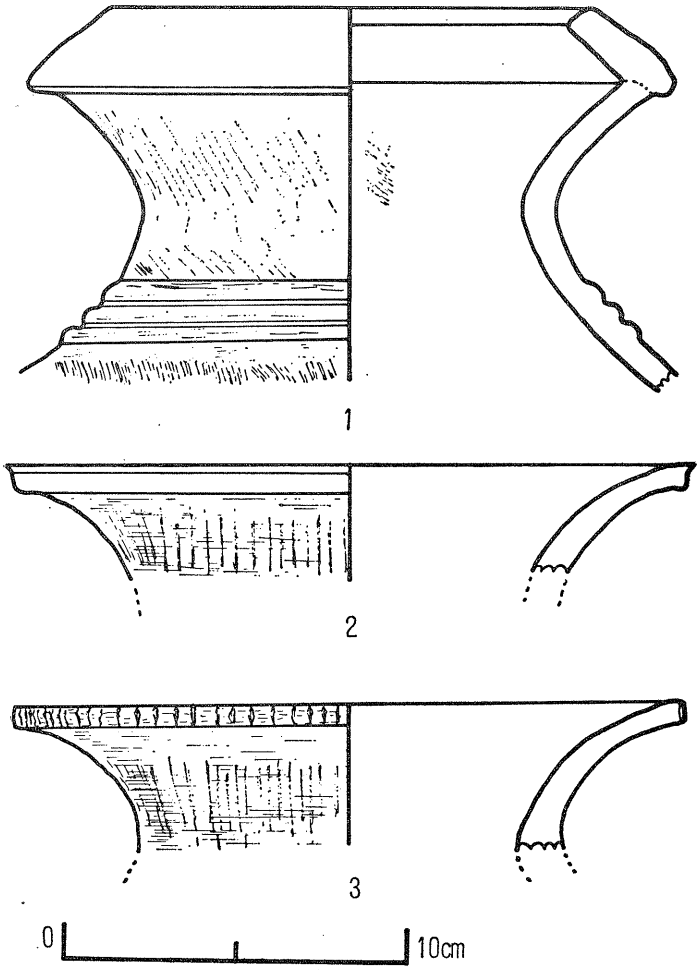
削り出しによる三条の断面カマボコ状を示す突帯をもつ，壺形土器の二重口縁である。第Ⅲ層下層にみとめられた焼土面の直上から出土をみており，最も信頼出来る出土資料である。焼成はきわめて高い温度で行なわれたと思え，赤褐色の色調を呈す。口縁の内反する上部部分は横位へのナデ調整，二重口縁頸部は粗い櫛目状工具による調整である。胎土には石英砂を交じえる。第32図１は，削り出し突帯文部の拓影である。二重口縁としては初期的なものと考えられ，形状からは袋状口縁からの過渡的要素をみとめることが出来，成形からは外開する口縁上に二重目の口縁部を厚く内傾させて積み上げるものである。明瞭な繋ぎ目を認めることが出来る。

北九州系の「伊佐座式」に類似を求めることが出来，第Ⅳ様式に比定出来よう[10]。大ざっぱないい方をすれば，北九州地方あるいは中九州地方からの搬入土器という見方も成り立とう。

以上が第Ⅲ層下層に検出された，甕形土器および壺形土器である。

ここに上げた第Ⅰ類土器と壺形土器の間には，甕形・壺形の基本的な違いはともかくとして，大きな隔絶感を感じずにはいられない。また，その隔絶感は本遺跡における第Ⅲ層下層期の社会構造の性格付けの暗示にもなろうと思う。

第Ⅲ層下層には，一応中期末ないしは後期前半の時期を比定しておこうと考える。



第21図　第Ⅲ地区出土壺形土器実測図

＜第Ⅲ層中層＞

第Ⅲ層中層はまた，第Ⅱ地区に検出された包含層に共通するものと思われ，さらに拡張区の最下面にも共通すると思われる。そこでここでは第Ⅲ類土器及び第Ⅳ類土器を，各々の地区に分けて概観することにしたい。

A．第Ⅱ地区（第15図）

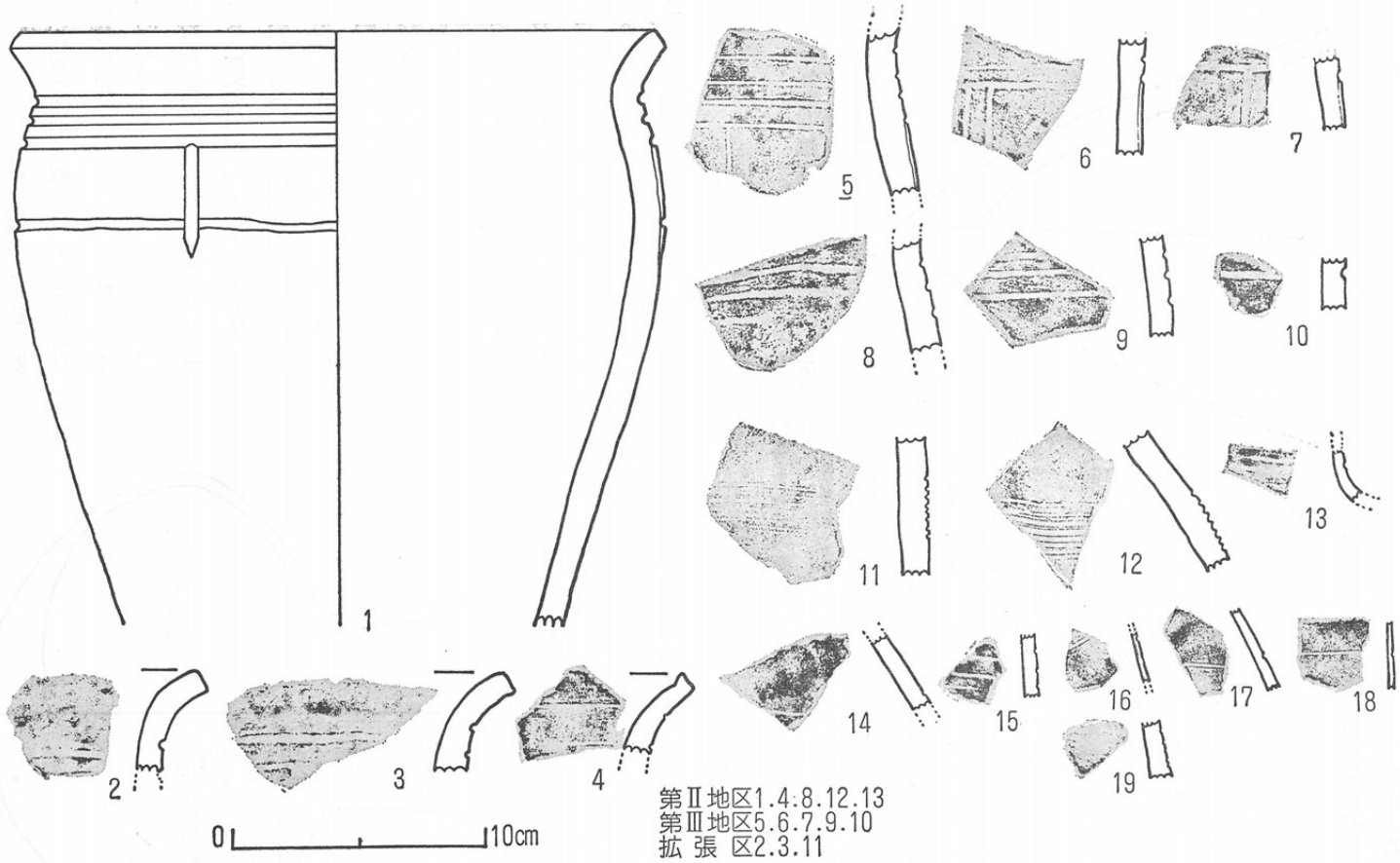
第Ⅲ類土器（第22図１）

底部を欠くが，ほぼ器形の全体を確認する程には復元し得た甕形土器である。口縁下に沈線を三条，さらに下方に一条施し，その間を縦位に沈線で連結する，施文（文様）構成をみとめる。焼成は良好であるが，石英砂を多量に胎土に混入し，やや脆い感じを与える。表面は暗褐色を呈し，煤付着をみ，裏面は濃茶褐色を呈す。口縁下は表裏共ヨコナデ調整，胴部から下方にかけては縦位への細かい刷毛目調整である。沈線の上部三条はほぼ直線的であるが，下部一条は粗雑で直線的ではない。上・下段の沈線を施した後，縦位へ上から下へと沈線を付す。縦位への沈線はほぼ器面を六等分する形で施されている。 また， 器面の裏側には，現存部分で四条の粘土帯の積み上げをみとめることが出来る。一つの粘土帯の単位はほぼ５㎝～６㎝である。器形は，第Ⅱ類の甕形土器に比して胴部がふくらみをもち，口縁部口径と胴部最大径がほぼ等しい形状を示す。底部は明らかでないが，ほぼ平底，ないしは若干の上げ底をなすと考えられる。

第Ⅳ類土器（第26図１・６・９）

１はミミズバレ状の突帯を，第Ⅲ類土器と同様に構成すると思われるものである。ほぼ破片の全面にわたり厚く煤付着をみとめ，暗褐色を呈し，裏面は褐色を呈す。刷毛目調整をみとめることが出来る。構成は良好で，胎土に石英砂を多く混入する。ミミズバレ状の突帯が横位に施されたちょうどその裏面に，ほぼ２㎝間隔の左から右への斜位の篦押さえの跡を認めることが出来る。６は横位の突帯と縦位の突帯をわずかに残すものであり，表は赤褐色を呈し，裏は黒褐色を呈す。また９は，縦位への突帯を剝離し，二条の横位への突帯をしか認めぬものである。表裏共褐色を呈す。

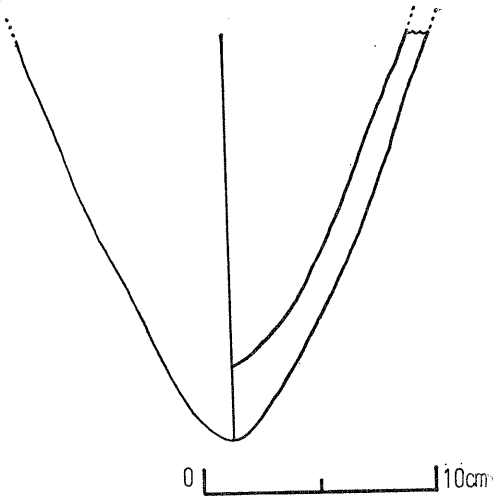
第Ⅲ類・第Ⅳ類土器の共伴して尖底土器・壺形土器を第Ⅱ地区では上げることが出来，これらを一つのセットとみなすことが出来よう。



第22図　第Ⅲ類土器実測図・拓影

尖底土器（第23図）

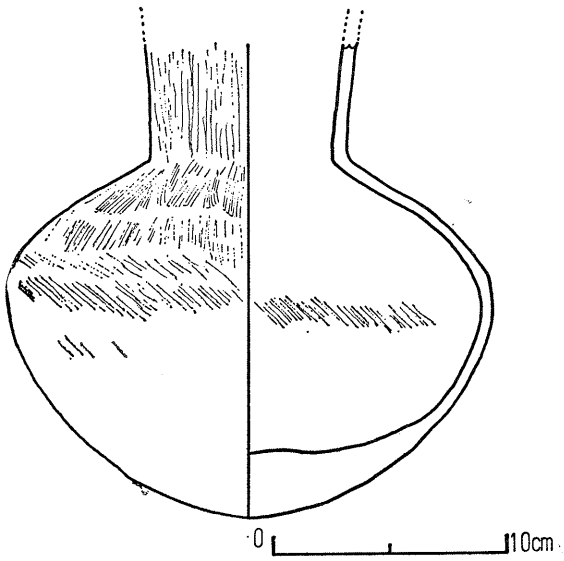
表面は茶褐色を呈し，断面は赤褐色は呈す。石英砂を多量に胎土に交じえ，脆い感じを与える。煤付着をみとめ，内部の剝離がやや進んでいる。底部から器面の周囲に縦位へ延びるかすかな八面の平坦面をみとめることから，幅2㎝以上の平面的な工具によって調整されたとみなすことが出来る。また，現存部分では二条の粘土帯の積み上げを確認出来る。底部先端から上位へほぼ5㎝程が，研磨された如く磨きをもつことから，その使用法が想像される。「高千穂地方出土関連土器c」に掲げた尖底をもつ壺形土器と共通すると思われ，高千穂地方における特有な器形とみなせると思う。それはまた本地域の文化を担う人々の生活相のある反映とも思われる。



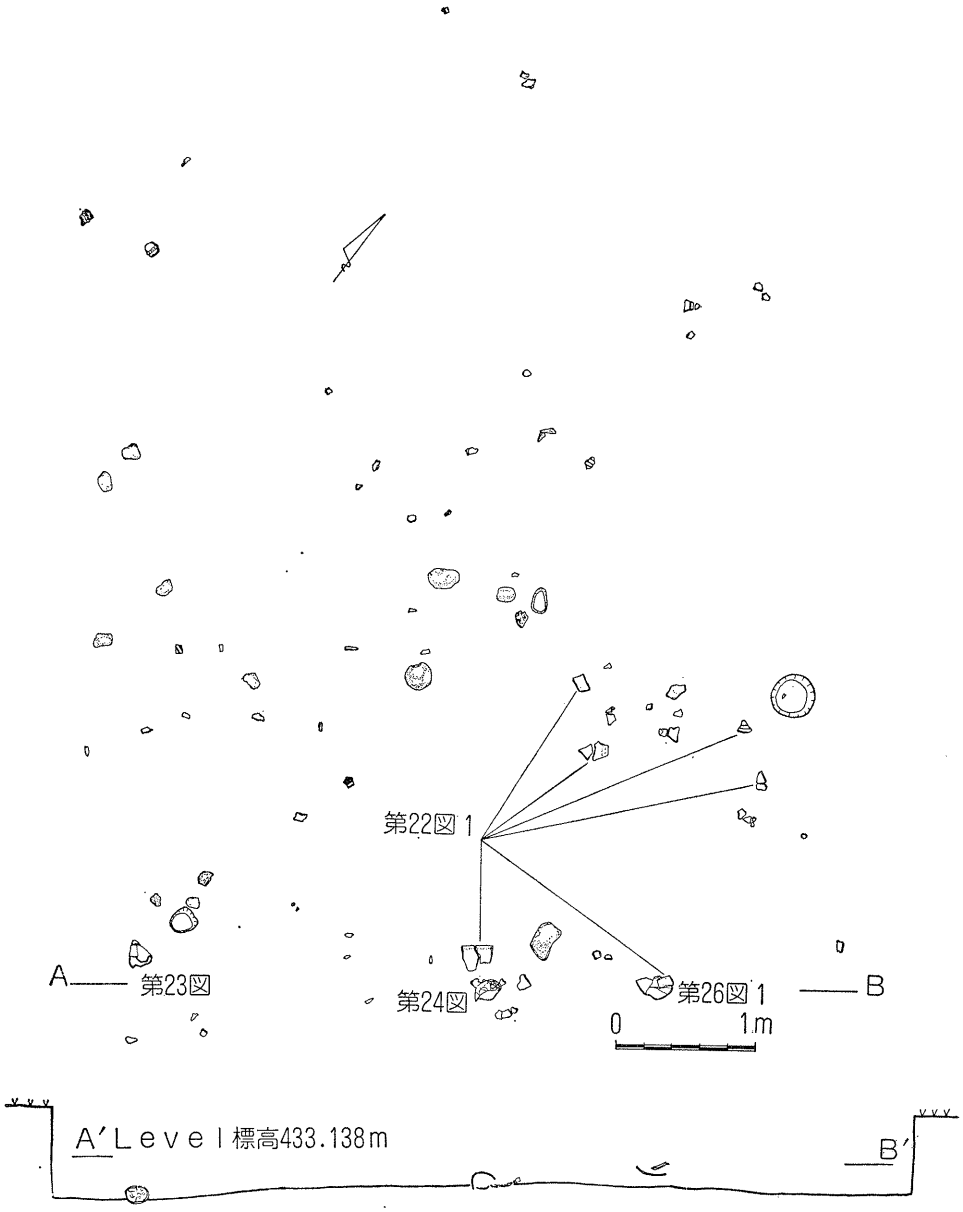
第23図　第Ⅱ地区出土尖底土器実測図

壺形土器（第24図）

第Ⅲ類甕形土器（第22図1）に隣合う状態で出土をみている。石砂粒を多く胎土に混入し，底部から胴部の張りにかけて剝離が著しく，口縁部を欠くもののほぼ完形に近いものである。また，胴部の張りの周囲全般にわたり煤付着をみとめる。細かく粗い櫛目状の工具で，肩部から頸部にかけてはほぼ縦位に調整し，胴部から底部にかけては斜位に調整を施す。頸部はほぼ垂直に調整する。また胴部の張りの裏面にのみ櫛目状の調整をみる。器壁はわりに薄手に仕上げられ，やや底部にかけての器形が間延びし肥厚化して丸底に終わる。口縁部がどの程度まで延びるのか不明であるが，いわゆる長頸は成さないであろうと思う。中位程までは延びる同タイプの壺形土器を県下では，若干の器形上の大小はあるが，大萩遺跡[11]より出土しており，これもそれにほぼ近くなろうと思う。ここでは，「安国寺式」にみる同タイプの壺形土器を想定し，第Ⅴ様式に比定する。



第24図　第Ⅱ地区出土壺形土器実測図



第25図　第Ⅱ地区A—24，25区遺物散布図

B．第Ⅲ地区

第Ⅲ類土器（第22図５～７）

５は黒褐色を呈し，胎土には石英砂を交じえる。焼成は比較的良好である。器形は第22図Ⅰに共通するが，沈線が細くなり，また上位に四条の沈線を施す。６・７は同一個体とみておく。石英砂を胎土に交じえ，赤褐色を呈す。また煤付着をみる。施文（文様）構成が１・５と異なり，横位へ二条・縦位へ二条の構成である。

第Ⅳ類土器（第26図２・４・５・７・８）

２は石英砂を胎土に交じえ，焼成は比較的高い。茶褐色を呈し，煤付着をみる。４は同じく石英砂を交じえ，煤付着をみとめる。赤褐色を呈す。５は黒色を呈し，断面及び裏面は灰褐色を呈す。７は煤付着をみとめ，褐色を呈す。焼成は良い。８は黒褐色を呈し，石英砂を胎土に交じえる堅牢な破片である。横位への刷毛目調整である。

施文（文様）構成は，８が縦横というより袈裟懸け状に配すと思われる他は，すべて縦横に構成する。拡張区からは第26図３を一点だけ出土しているが，これは第Ⅲ地区出土の２と同一個体と考えられる。

第Ⅲ類・第Ⅳ類土器の共伴として壺形土器の口縁部・肩部・胴部・底部等各々の破片を上げることが出来る。

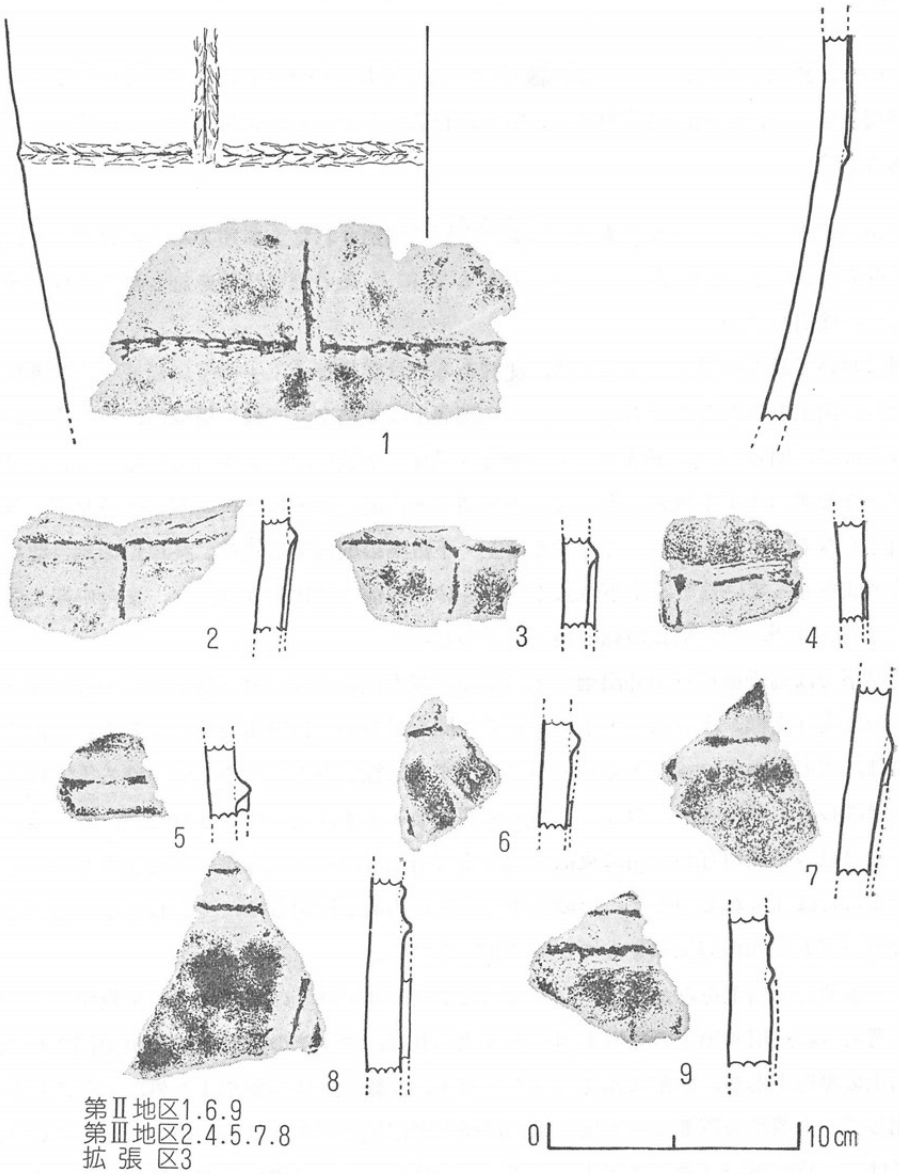
壺形土器（第35図11・第21図３・第32図２・第34図１～６）

第35図11は，一塊に押し潰された状態で出土をみた壺形土器であるが，口縁部等を欠きまた剝離も著しく復元が不可能であったものである。石砂粒を多量に胎土に交じえ，灰褐色あるいは褐色を呈す。底部底から煤付着をみとめる。表面は横位への刷毛目，裏面は粗い櫛目状の工具で調整されている。器形はあまり頸部がすぼまらない甕形に近いものであろう。底部の形状としては，余りはっきりとしないルーズなもので，やはり後期に比定されるであろう。

第21図３は，壺形土器の口縁部片である。黒褐色を呈し，焼成は良好である。縦位への櫛目状の工具で調整した後，横位へのナデ調整を重ねる。口縁部には刻目を施してあるが，浅く鮮明ではない。

第32図２は，壺形土器の肩部片である。赤褐色を呈し，胎土には細かい石砂粒を混入する。焼成は良好である。細い断面三角状突帯を三条施している。

第34図１～６は，壺形土器の胴部片と思えるものである。出土レベルの明らかなものは２・３・５の三点で，他は攪乱ないしは客土からの出土である。刻目をもつものともたないものの二種が確認出来る。２・３は全く共通した刻目と調整をもつ。前者が赤褐色を呈し，後者は灰黒色を呈すが，刻目上部は縦位へ，下部は斜位への粗い櫛目状の調整を共にみる。刻目は上から下へ箆で削りおとす施し方である。色調は異なるが同一個体とみなせる。１も同様に刻目をもつが，櫛目状の調整はやや密になる。暗黒褐色を呈し，焼成はあまり良いとは思えない。６



第26図　第Ⅳ類土器実測図・拓影

は同様に刻目をもつが，赤褐色を呈し，焼成も良好である。胎土には石英砂を交じえる。刻目は粗く粗大である。4・5は刻目をもたず，調整の櫛目もより密になるものである。二点共，胎土に石英砂を混入し，茶褐色ないしは黄褐色を呈す。「高千穂地方出土関連土器b」に共通するものと思える。

いま一つ，甕形土器とみなしうる口縁部片（第35図b）を一点本層において検出している。淡い赤褐色を呈し，焼成は比較的良い。胎土に石英砂を交じえ，煤付着をみとめる。刷毛目調整である。

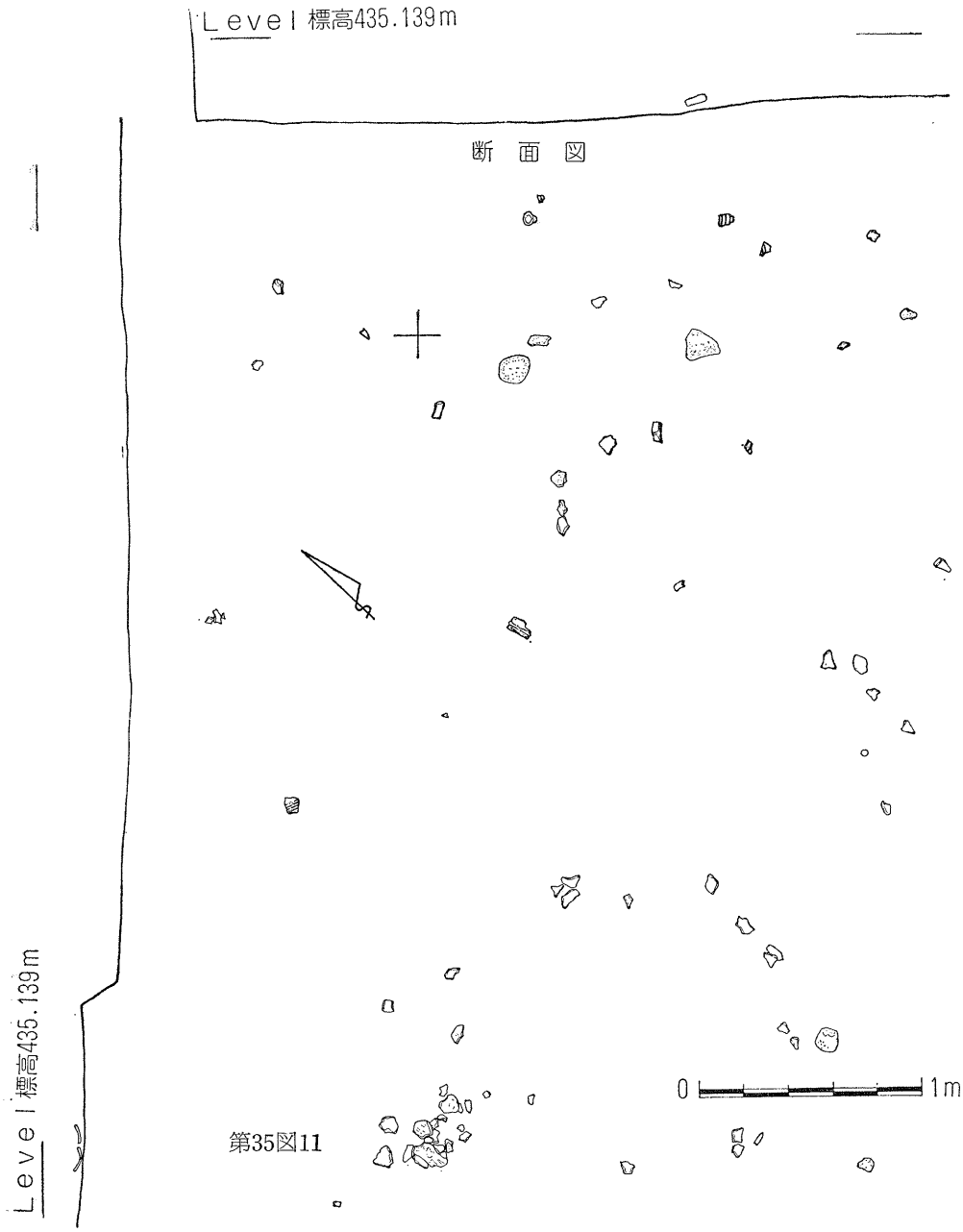
以上が，第Ⅱ地区あるいは第Ⅲ地区第Ⅲ層中層に検出された土器類である。いま一つ，両地区から近畿ないしは東瀬戸内系のものと思える共に八条の細い沈線を施した土器片（第22図11・12）を検出している。

本層において最も注目すべきことは，沈線あるいは突帯を「工」の字に構成する第Ⅲ類・第Ⅳ類土器の出土をみたことである。これらの甕形土器の施文（文様）構成は，その構成のしかたからいって，明らかに「下城式」系の施文（文様）構成に起源をもっていってよい。構成上の祖型とみなすべき「下城式」土器は，下城遺跡・白潟遺跡・長良貝塚等の大分県下の各遺跡から出土をみている。しかし，その多くは上・下数条の刻目突帯間を二条単位の刻目突帯で連結する構成をもっていた[13]。「下城式」そのものは，前期に比定されたが，また中期土器との共伴も報告され[13]②，その型式の息の長さを示した。

宮崎県下では高千穂町三田井出土の甕形土器が最も代表的なものとして古くから知られてきた。その施文（文様）構成は上・下の刻目突帯間を単線の刻目突帯で連結するものである。この土器は，器形上からいって「く」の字に外反する口縁部をもち，ややいわゆる「下城式」とは趣を異にし，「下城式」系のものとして中期前半―第Ⅱ様式に比定された[14]③。この系統の土器が，大分県の宇佐地方から西に及ばず南には宮崎県下から鹿児島県，また熊本県の一部にも分布することは知られている[15]。その意味からも，当高千穂地方は，そうした中期前半を前後する時期の重要な地理的位置をもつと解されてきた[16]。

今回，本遺跡で出土をみたのは，いうなれば「三田井以降」の問題に一石を投ずるものであったと考える。三田井出土の甕形土器とひき比べれば，まずその器形の相異が指摘される。三田井出土の甕形土器が，胴部にふくらみをもたず，口縁部口径が胴部より外に大きく張り出すのに比して，本遺跡の第Ⅲ類土器は口縁部口径と胴部最大径をほぼ等しいものとしている。器形的には，宮崎県下では後期に属する赤江あるいは川南出土の甕形土器に類似する。また施文方法の問題からすれば，刻目突帯と突帯あるいは沈線という相異をもつ。とりわけ沈線で施文を施す手法は，九州地方・ことに東九州地方において認められぬことはないが，やはり特異といわなければならない。旧来，沈線での施文方法は北九州系・近畿・瀬戸内系のものの中に認めてきた[17]。

ともあれ，三田井出土の甕形土器を加え，本遺跡において四種の施文要素に分類することの



第27図　第Ⅲ地区A・B—31，32区主要部実測図

出来る同一の施文（文様）構成を確認することが出来た。一つは刻目突帯によるそれで，二つはミミズバレ状の突帯によるそれで，三つは突帯によるそれで，四つめが沈線によるそれである。後三種は本遺跡で共伴する関係にあることが知られた。沈線の甕形土器の破片の一部は，ミミズバレ状の突帯の甕形土器片に重なって出土をみている。現在の所，類例をもたぬので，刻目突帯から沈線へのこの施文（文様）構成の変遷は速断し得ないが，ミミズバレ状の突帯あるいは単なる突帯を介在させながら，施文（文様）構成を失わずに継続してきた本遺跡特有の文化性というものが，その変遷の裏に暗示されているように思う。

共伴する土器の特徴からみて，第Ⅲ類・第Ⅳ類土器及び第Ⅱ地区包含層・第Ⅲ地区第Ⅲ層中層は後期に比定出来よう。

＜第Ⅲ層上層＞

第Ⅲ層上層に検出された炭化材散布面・焼土面は攪乱・客土に近く，該当面に伴う土器の判別・検出は困難である。したがって次に上げる，客土層からの出土土器あるいは不完全な包含状態で出土した土器類から推量する他ない。

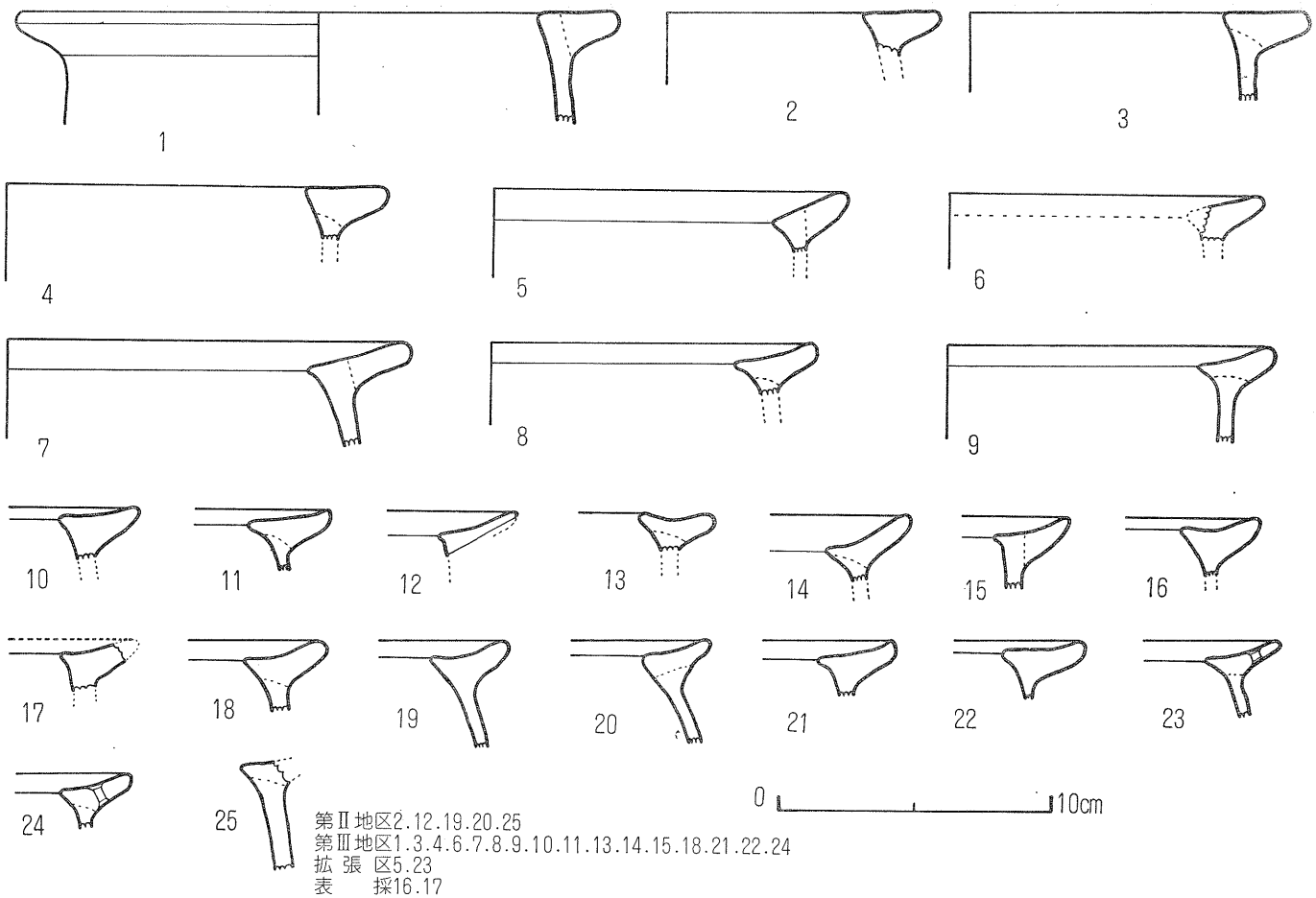
また，拡張区からの出土土器も，「溝」との関係等により，焼土面など生活面の検出は行なわれたが，その出土状態の確認が不完全であった為次に一括したい。

＜その他の出土土器＞

第Ⅴ類土器（第28図）

いわゆる「須玖式」系の口縁部片である。第Ⅱ地区・第Ⅲ地区・拡張区・表採と各々から検出されるが，圧倒的に第Ⅲ地区からの出土をみる。しかし，出土レベルが明確なのは数点に限られ，多くは攪乱ないしは客土層から出土したものである。出土レベルの確かなものは，第Ⅲ層下層ないしは中層にかけて散乱している。従来の層序論からすれば，第Ⅲ層下層に比定するのが妥当であろうし，また事実数点の出土をみとめるが，それでも確証的ではないので，本遺跡での層位的問題の断定はさけた。出土レベルの値に頼れば，下層からよりむしろ中層においての出土が多い。

いわゆる「T」字・逆「L」字口縁を成すものであり，形状上からいうならば，(1)口縁上面が平面を示し，ほぼ平坦になるものと，(2)口縁内部が内傾するものの二種に大別出来，いわゆる口唇外部が外傾するものはみうけられなかった。(1)はいわゆる逆「L」字というべきものである。(2)はさらに幾つかの形状に分類することが出来る。すなわち，口縁断面の形状が(a)平面を成すもの，(b)上面の断面のほぼ中程に湾曲の中心をもつもの，(c)口唇の内部よりに中心をもつもの，(d)逆に外部にそれをもつもの等である。さらに，口唇内・外部の部分的特徴においては，口唇内部に鋭角な張りをもつものと丸みを帯びるものとに分けられ，口唇外部に角ばりをもつものと丸みをもつものとに分けることが出来る。(2)はいわゆる「T」字口縁である。全体的な器形としては胴張りの器形をもつと思われる。器壁はやや厚手のものと薄手のものが考えられる。



第28図　第Ⅴ類土器実測図

胎土・色調は7と9が黄褐色を呈し，胎土は石英砂を細かく多量に交じえ軽量であるのを除き，他は黒褐色ないしは淡褐色を呈し堅牢な作りである。23・24は用途は不明であるが，焼成の後口唇外部を穿孔している。すべてヨコナデ調整である。このタイプの土器で口縁下に突帯をもつものがあるが，残念ながら口縁下の形状をうかがわせる土器片は本遺跡では確認出来なかった。

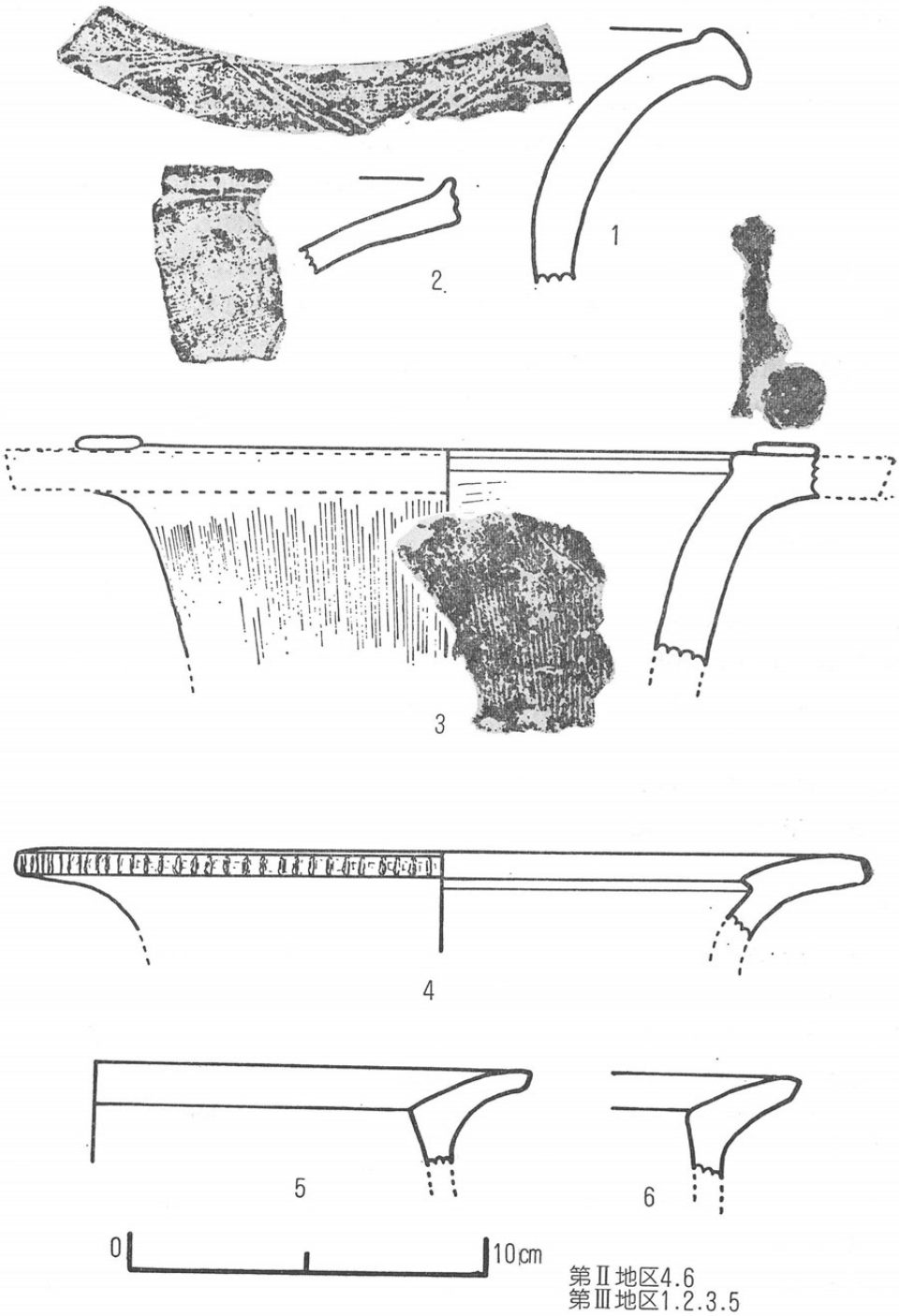
(1)に属するのは，1～4で，（2a）に属するのは，5～7で，（2b）に属するのは，8～13・18で，（2c）属するのは，14～17・19・20で，（2d）に属するのは，21～24である。

口縁部成作の技法の面にそくしていえば，口縁部までを形作りその外側に粘土帯を巻き付け成作する場合（1・5・7・15）と，口縁上部に粘土帯を輪積みして成作する場合（3・4・8・9・11・13・14・18・20・23～25）との二様が観察される。「T」字・逆「L」字口縁の出現は積み上げた粘土器壁の外に開く力を支えることに発する[16]といわれるが，ここに見る口縁部成作の技法は一般的な輪積みの方法の変形とみなせる。すなわち，積み上げた粘土の内側・あるいは外側にさらに積み上げる場合と，直接上面に積み上げてゆく場合の二様である。外側に粘土帯を巻く場合が前者のものであり，上部に積む場合が後者のものである。本遺跡で確認されたものは後者の場合が多い。

口縁外径は24cm前後のものが多い。

第Ⅵ類土器（第20図4・5）

第Ⅱ類土器に同様に口縁下に数条の突帯をもつものである。器形は，第Ⅱ類土器が直線的な胴部を示したのに対し，この土器は胴部に張りをもつ。器形としては，第Ⅲ類の甕形土器との共通がみられ，第Ⅱ類の後続タイプとみる。出土層は攪乱・客土層にあたるが，第Ⅲ層上層に包含された可能性が強い。また，あるいは第Ⅲ類・第Ⅳ類土器と同タイプとみるべきかもしれない。4は，胎土に石英砂を多量に交じえ，赤褐色を呈す。表裏面共ナデ調整が施されているが，突帯の磨滅が著しくなっている。細い粘土紐を貼り付け，つまみ上げ状に突帯を成形する。口縁部が調整の関係により，やや凹みを示す。5は，4と同様に石英砂を胎土に交じえ，焼成も良好であるが，暗赤褐色を呈している。若干の煤付着がみとめられる。突帯の成形は4に共通し，最上段の突帯上には成形の際残されたと思える爪の跡をみる。また，口縁部の凹みは，4に比してより明瞭となり，断面の形状からみれば口唇内側に断面半円状のつき出しをみる。ここにみる口縁部の凹みはやや意図的と思える。



第29図　出土土器実測図

甕形土器（第20図６・７）

第Ⅰ類～第Ⅵ類までの分類の中に含め得なかったものである。いずれも客土から出土している。６は，胎土に石英砂を多量に混入し，焼成も比較的高い，黒褐色を呈すものである。現存部分では一条の突帯のみ認め得るが二条以上の突帯をもつ可能性がある。突帯の形状はこれまでの分類のいずれにも属さず，幅広のやや肥厚したものである。また口縁部等全体に肥厚した形状をもつ。７は，胎土に石英砂を混入した，焼成のあまり良好でないものである。口縁部が外に大きく張り出し，胴部はゆるやかな丸みを帯びる。器面の調整は，表面がヨコナデ調整であり，裏面は粗雑な作りである。突帯はつまみ上げによると思われ，突帯間は間延びしている。このタイプの甕形土器は，「山ノ口式」の中に求められようと思う。

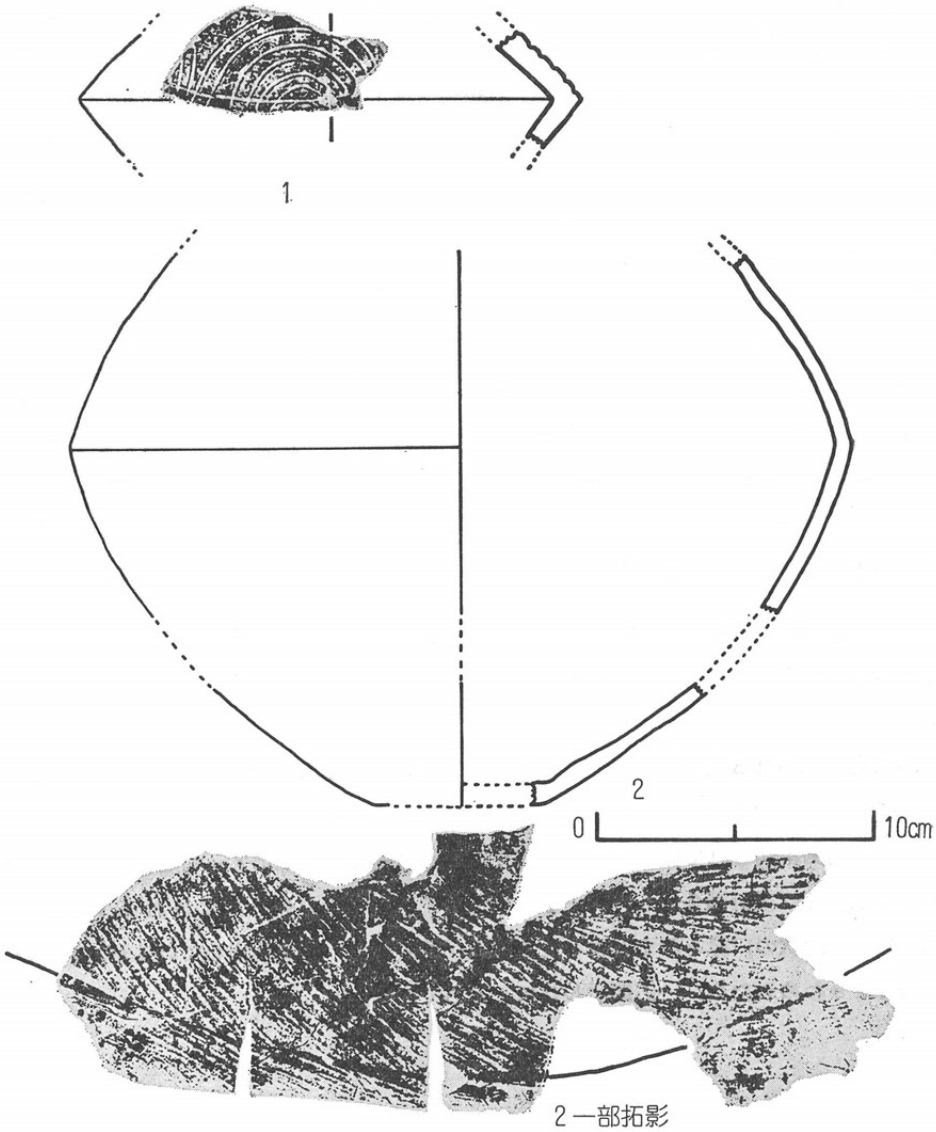
壺形土器（第29図１～４，第30図１・２，第31図１，第32図６）

第29図１～４は壺形土器と思われる口縁部片である。１は肥厚化した口縁外面に箆描きによる複線山形文を施したものである。褐色を呈し，胎土に多量の細かい石英砂を混入し，焼成はきわめて良好である。２は肥厚化した口縁外面に二条の沈線を施すものである。灰褐色を呈し，石英砂を胎土に交じえ，焼成は良好である。３は口縁部上面に円形浮文を付すものである。口唇外部を欠くが，口唇内部にやや張り出しをもつ。淡褐色を呈し，焼成は良いが，やや剝離が進んでいる。表面は縦位への櫛目状工具による調整が施され，裏面は横位へのそれをみる。４は，きわめて焼成の良好な，刻目を口縁にもついわゆる鋤形口縁である。全体には淡褐色を呈すが，口縁外面はやや黒色味を帯びる。横位へのナデ調整である。細かい石英砂を胎土に交じえ，刻目は全体に浅い。

第32図６は胴部片であり，断面「コ」の字形の刻目突帯をもつ。焼成は良好であり，黄褐色を呈し，若干の煤付着をみる。裏面は横位への刷毛目調整が施され，表面の刻目突帯下は横位への，そして底部に向けては縦位への刷毛目調整をみる。

第30図１・２は拡張区より出土している。１は七重の重孤文をもつ胴部片である。七重の重孤文の上に一条の横位への沈線をかさねる。いずれも箆描きによる。黒褐色を呈し，焼成はかなり高い温度で行なわれており，内部まで炭化している。胎土には細かい石英砂を交じえ，内面はヨコナデ調整が施されている。焼土面近くから出土したためか，器面には若干の煤と焼土を付着する。２は散逸した破片を復元したものであるが，口縁部及び胴部から底部にかけての部位を欠く。明瞭な稜線をもつ壺形土器である。薄手に仕上げられた焼成の良いものである。器面の表裏面に煤を付着し，濃い黒褐色を呈し，底部付近は褐色を呈す。裏面は細かい櫛目状の調整をみるが，表面は櫛目の単位の幅広のもので調整されている。その調整は，稜線上でのみ明瞭であり，稜線下におり底部にかけては雑で不明瞭なものとなる。口縁部がどのようなものになるかは不明であるが，長頸の頸部をもつものと短かく低い広口の口縁をもつものとがあり，そのいずれとも解しかねる。

第31図１は，丹塗のある細片で，丹塗細頸の袋状口縁を成すと思われるものである。拡張区より出土している。内面は淡褐色を呈し，ヨコナデ調整をみとめる。袋状の側壁下方は半円状の



第30図　拡張区出土壺形土器実測図・拓影

突帯をみる。篦先によって撫で上げて袋状の下部までを調整し，袋状の側壁は横位への調整である。

第29図１～４・第31図１は中期土器の特徴的なものであり，第32図６・第30図１・２は後期ないしは終末期の特徴的なものである。第29図１は近畿，瀬戸内の系統を受け「大津式」等に顕著にみることの出来るもので，同２は東瀬戸内系のものとみなすことが出来る。同３・４は北九州の「須玖式」に顕著なものである。第30図１は「免田式」の最も特徴的なものであり，同２は胴部に稜線をもつものでやはり同式に伴うものと考えられる。第32図６は弥生終末期のものとみなせる。

底　部（第35図12～20）

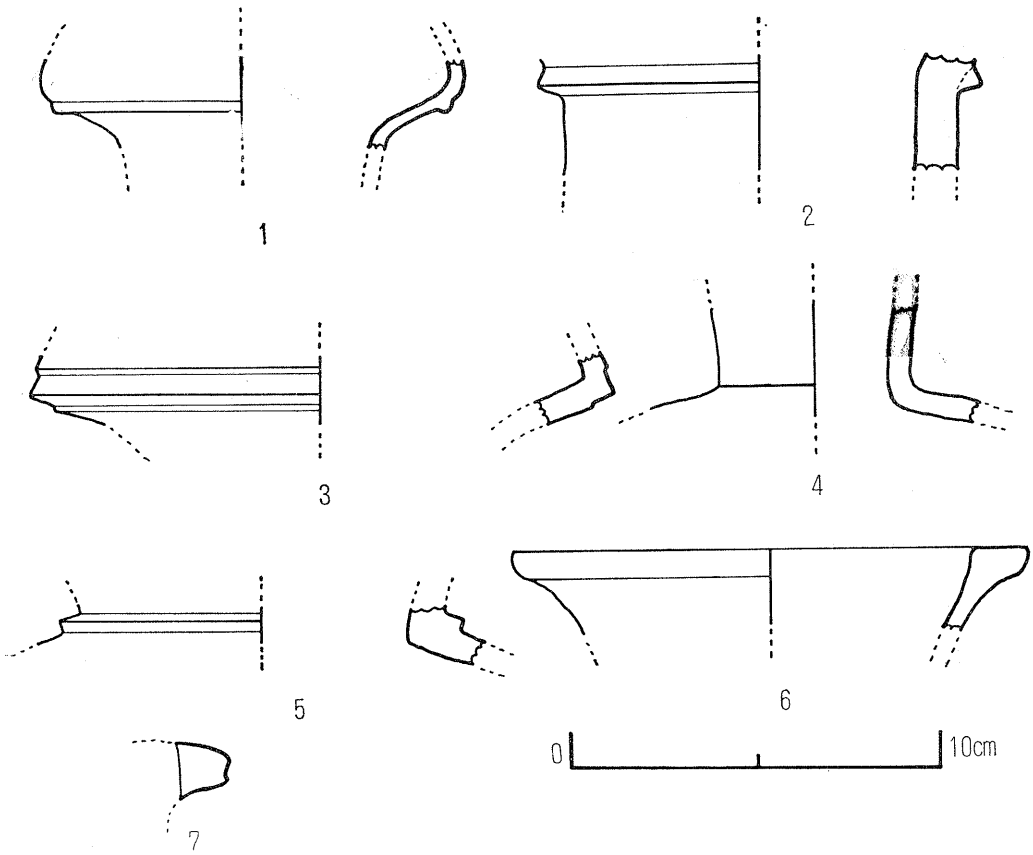
比較的に上げ底のいわゆる脚をもつものが多くみとめられたが，不明瞭なものが多かった。底部底の小さなもの（15）も，数点認められたが，これも多くは明瞭さを欠いた。

12は，粗い櫛目状の調整を残し，赤褐色を呈すもので，「大津式」あたりの中期の壺形土器につくものと考えられる。13は，やや密な櫛目状の調整を恣意的にはしらせるもので，「下城式」系の甕形土器の底部が考えられる。内面に煤を付着する。14は，粗く刷毛目の調整をみるもので，石砂粒を混入した胎土をもちい，淡褐色を呈す。内面に煤付着をみる。「城ノ越式」「須玖式」あたりの底部であろうか。

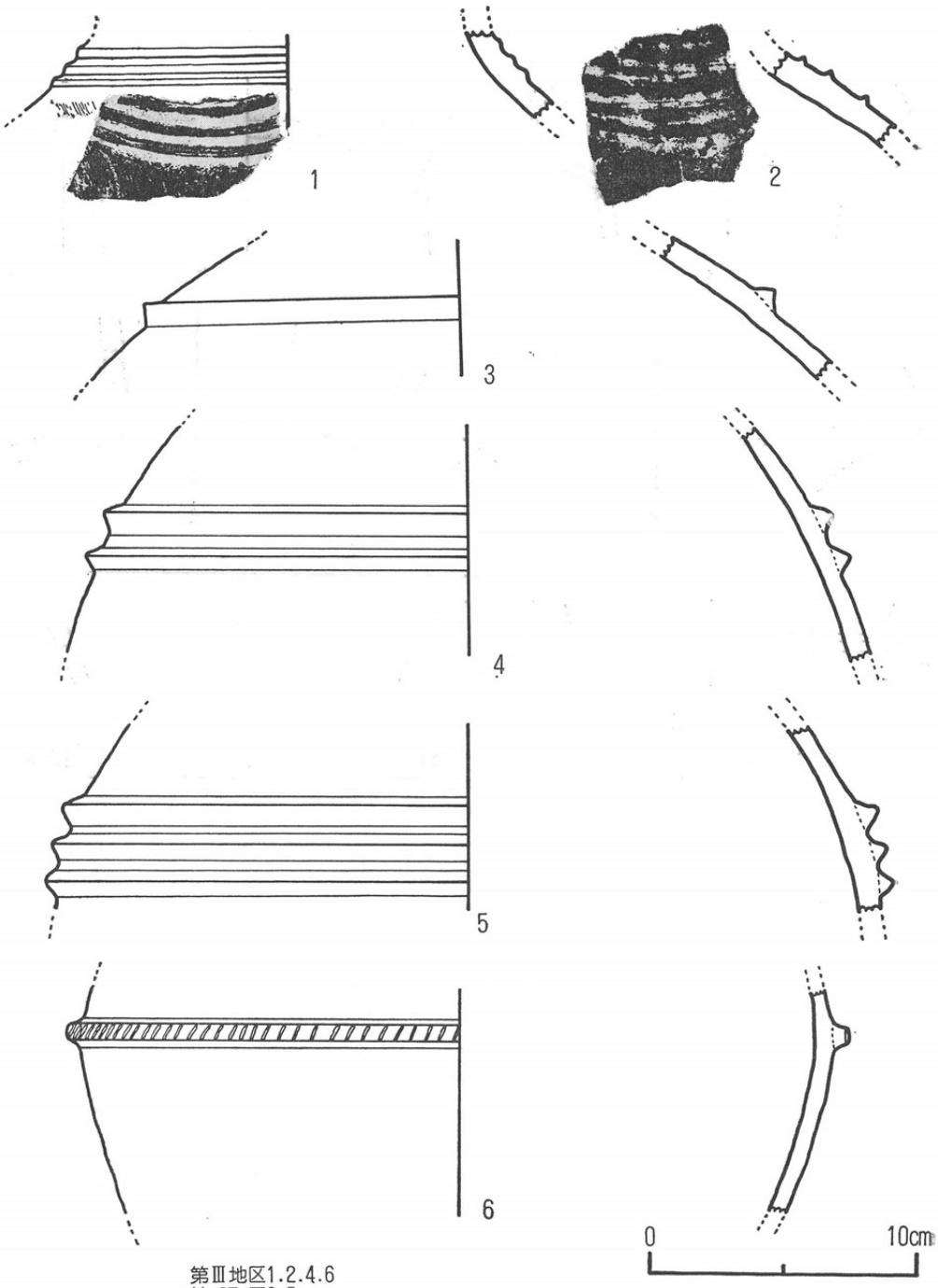
以上，出土土器を概観してきたが，他に「須玖式」の影響下に後期に成立する，口縁部が「く」の字に曲折し，口縁上面の断面が平面的な甕形土器の口縁部片（第29図５・６）を検出している。

鉢形土器と思われる土器片（第35図２・３）は二点で，２は黒褐色・３は灰褐色を呈し，３は胎土に多量の砂粒を交じえている。また，２には煤の付着をみとめる。

さらに，両側が切られて面取りされた高杯形土器の透しを両側にもったと思われるもの，突帯をもつ頸部片（第31図２・５），「Ｔ」字をなす壺形土器のものと思われる口縁部片（第31図６），鍔形状の口縁をなすと思われる細片（第31図７）等を検出しているが，いずれも細片で明詳をきわめぬため，一応図示したにとどめておく。

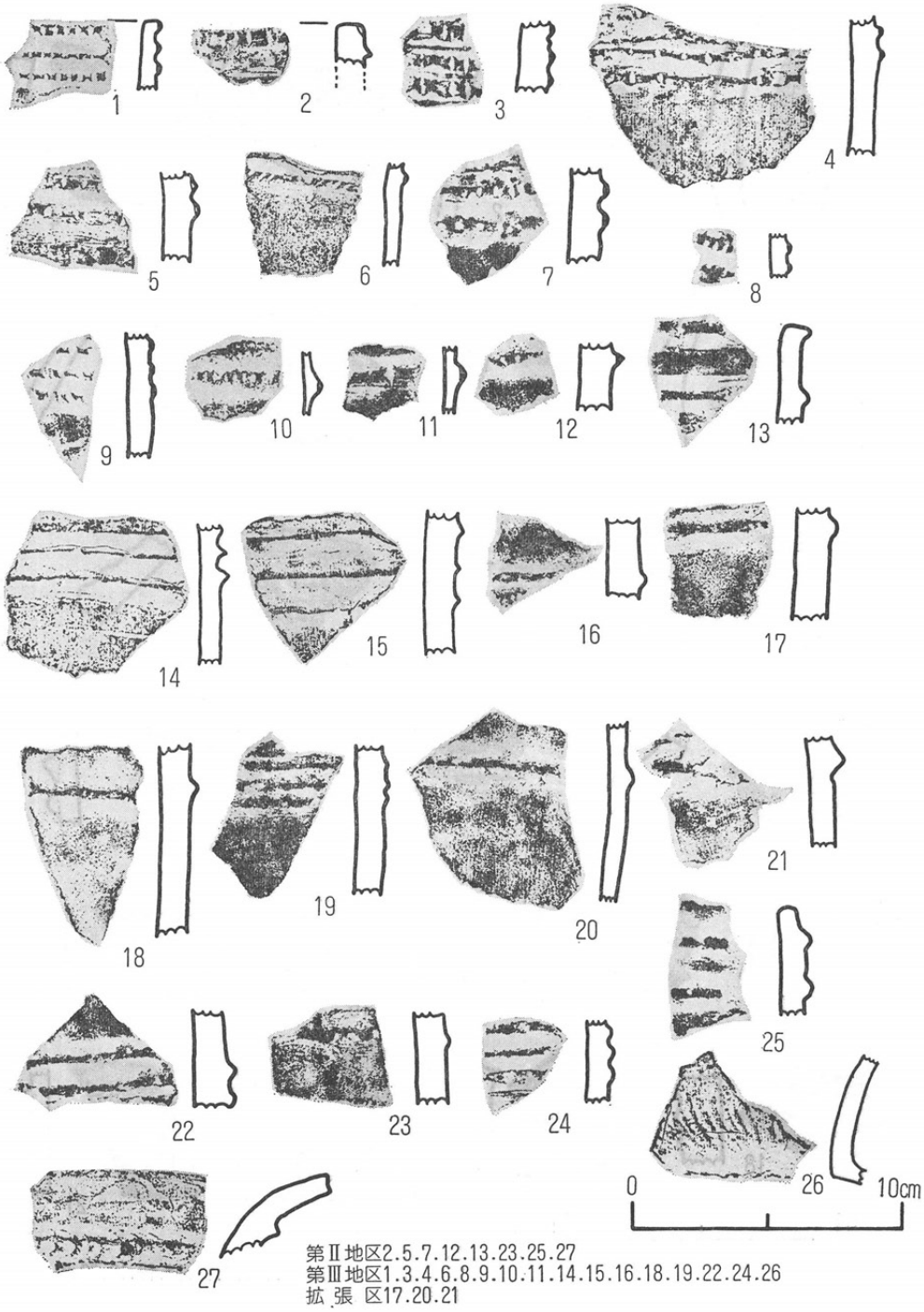


第31図　出土土器実測図

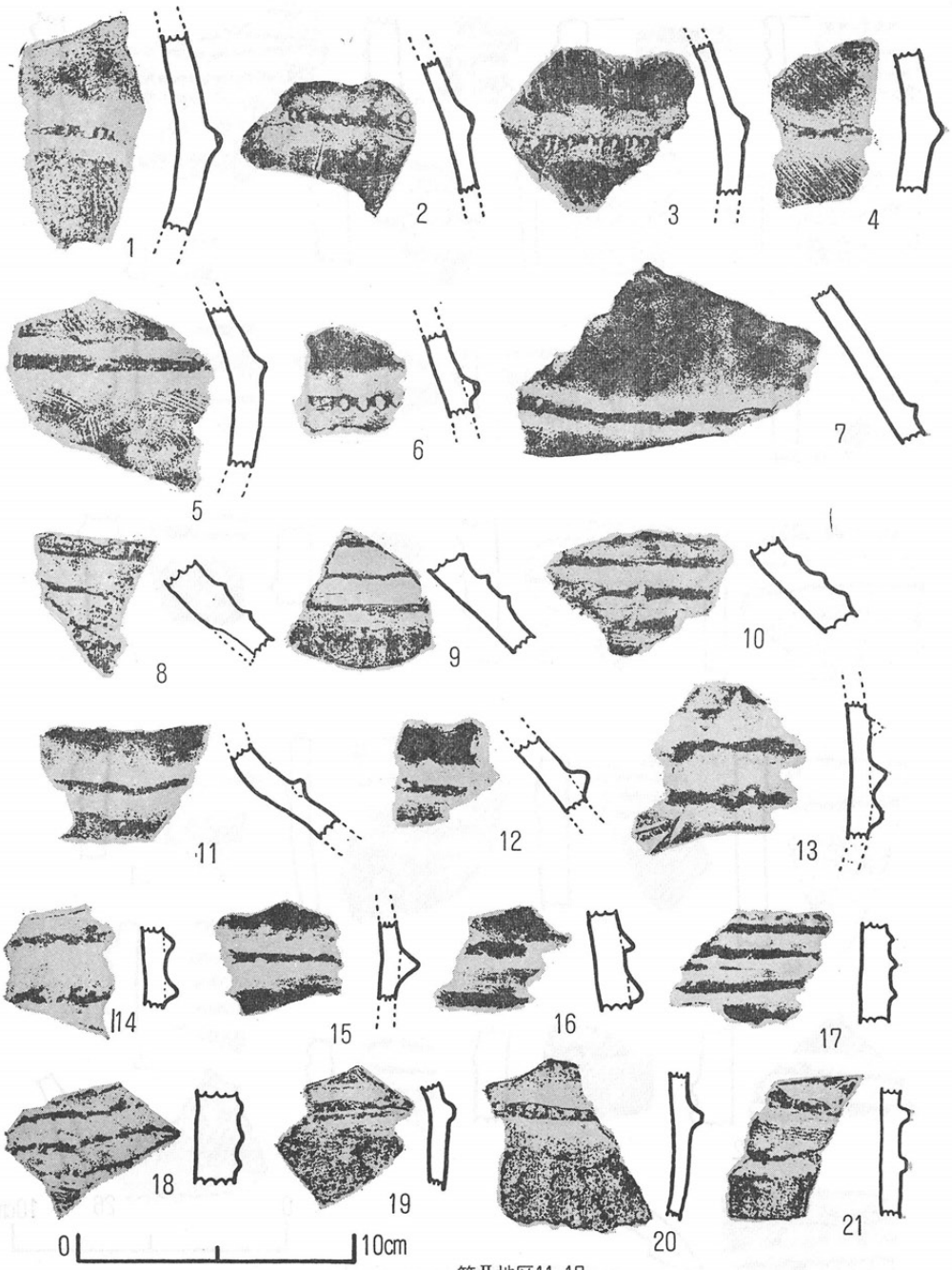


第Ⅲ地区1.2.4.6
拡 張 区3.5

第32図　壺形土器実測図

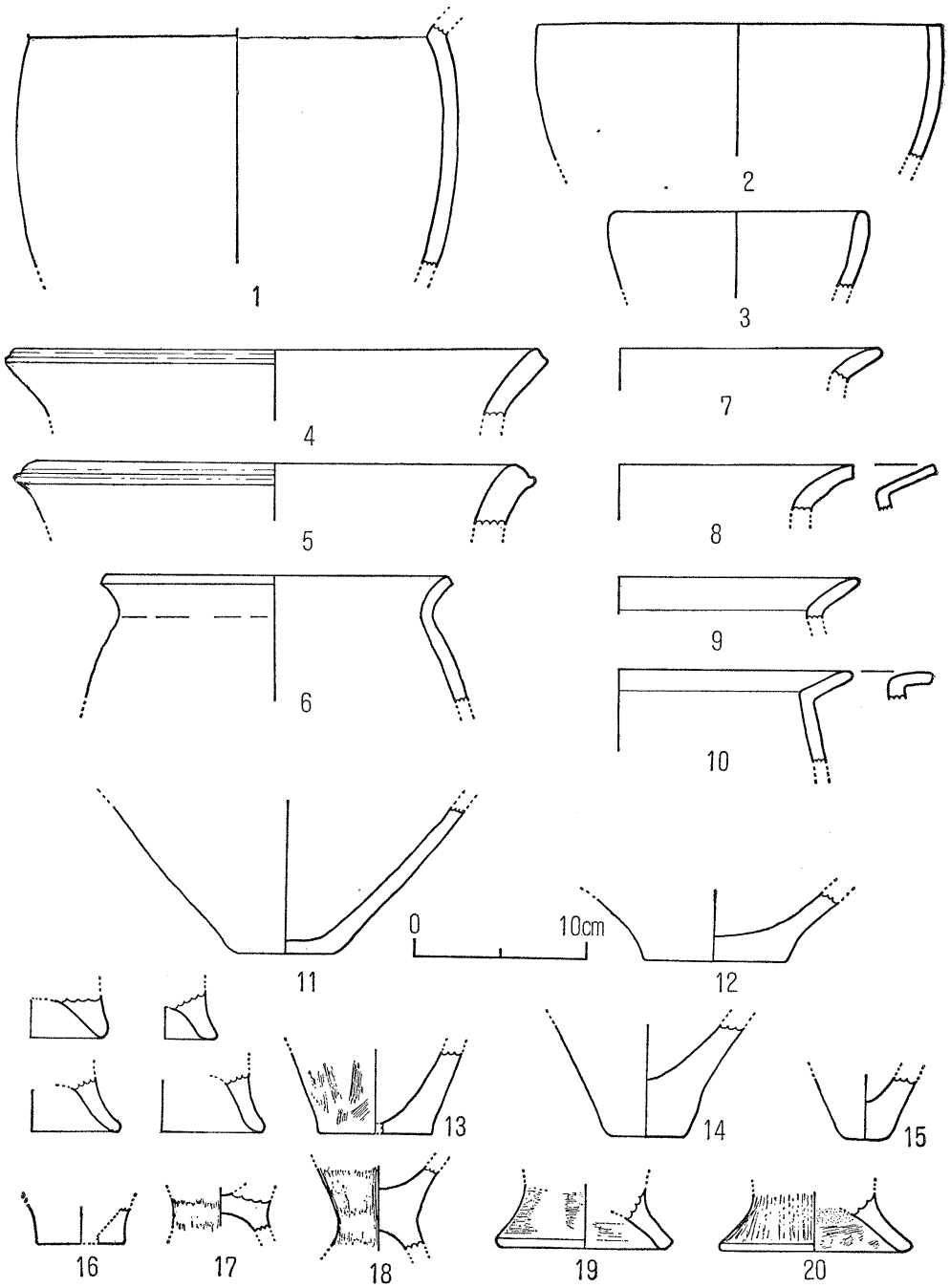


第33図　出土土器実測図・拓影



第Ⅱ地区11.17
第Ⅲ地区1.3.5.6.8.9.10.12.13.14.15.19.20.21
拡 張 区2.4.7.16.18

第34図　出土土器実測図・拓影



第Ⅱ地区4.7.13.16
第Ⅲ地区1.2.3.5.6.8.9.11.12.15.17.18.19.20
拡 張 区10.14

第35図　出土土器実測図

		第Ⅱ地区	第Ⅲ地区	拡張区
第Ⅲ層	(上層)		(第Ⅳ類土器・第Ⅱ類の後続型式)?	免田式?
	(中層)	第Ⅲ類・第Ⅳ類土器(沈線文・突帯文を「工」の字に構成する甕形土器) ◦丸底壺形土器(安国寺式?) ◦尖底土器		
		(第Ⅴ類土器・須玖式)?		
	(下層)		第Ⅱ類土器(突帯文甕形土器+第Ⅳ類土器?) ◦二重口縁壺形土器(伊佐座式系?)	
第Ⅳ層	(下層)		第Ⅰ類土器(下城式)	

本遺跡出土土器について若干の整理を加えると共に，幾つかの問題点を抜き出しておこうと考える。

<縄文式土器>については，点数も限られ，「陣内式」以降の当山岳地域における縄文晩期から弥生前期にいたる展開は，今後の問題として，ともあれ検出し得た土器片を掲げるにとどめるしかない。

<弥生式土器>については，攪乱・客土層中に包含されたものの中に，本遺跡の地理的位置付けを暗示し興味あるものをみたが，層位的な確認は出来なかった。それ故，この項では出来得る限り細片に至るまでの図示・記載につとめ，今後の資料とした。その為，かえって不明瞭なものを多く混じざるを得なかった。ともあれ，北九州系のものでは「城ノ越式」ないしは「須玖式」という中期の特徴的なものを出土し，南九州系のものでは「山ノ口式」に相当すると思われる甕形土器を出土し，また中九州系のものでは後期の「免田式」に顕著な壺形土器を加えることが出来た。こうした変化にとんだ当高千穂地方の様相は，既に『高千穂・阿蘇』の中で指摘されてきたことであった。だが，とりわけ他地域における中期弥生式土器の層位的な問題がほとんど不明なままで終ったことと共に，当高千穂地方の<地域性>の問題はさらに一考すべき問題を数多く孕んでいるといえる。また，第Ⅴ類に分類した「T」字・逆「L」字口縁の「須玖式」土器は，東九州地方においては後期に至りその分布をみていることなどから，第Ⅲ層下層あるいは第Ⅲ層中層にみられる包含を一応妥当し得るものと考えてよいと思うが，問題となるのはその第Ⅲ層中層に当たると思われる第Ⅱ地区からの明確な出土をみないことであった。そのことは逆に，第Ⅲ層中層と第Ⅱ地区との間に若干の時間差を求めるか否かの問題でもある。ともあれ，今回確認した出土状態をそのまま取り上げれば，第Ⅲ層下層期から第Ⅲ層上層期に至る時期に，「須玖式」の影響を受ける甕形土器が盛行した，といいうる。

<第Ⅳ層下層>は，「下城式」に代表される東九州特有のもので構成された時期とみなすことが出来る。共伴土器にとぼしいことは否めないが，東九州地方に特有の展開をもつといわれる広義の意味での「大津式文化圏」との内包関係が想起されるであろう。

＜第Ⅲ層下層＞は，中期前半に比定される三田井出土の甕形土器との器形上の関連が想起される甕形土器（第Ⅱ類）と共に，「伊佐座（高三潴）式」系と思われる二重口縁の壺形土器をみている。この両者間にある隔絶感を，前者の＜土着性＞・後者の＜搬入＞とみなす時，本下層期における当高千穂地方の＜地域性＞が想起される。また第Ⅴ類土器（「須玖式」系）は，この時期に本地域に受けとられたと想定される。

＜第Ⅲ層中層＞は，特異な施文（文様）構成をもった甕形土器（第Ⅲ類・第Ⅳ類土器）に最も象徴されるが，共伴土器に第Ⅲ地区では明瞭さを今一つ欠き，第Ⅱ地区では尖底土器の類例的な位置付けに問題を残した。第Ⅲ類・第Ⅳ類土器について今一度概括すれば，施文（文様）構成からみて「下城式」の中に見出すことの出来る構成をすべてもっているといえる。単線で上・下間を連結するもの，二条の複線をもって連結するもの，袈裟懸け状に連結するもの等である。構成上「下城式」を踏襲するものの，その施文要素は別系統の北九州「板付式」等の沈線文の系統をもつものと考えられる。いうなれば「下城式」にその出現をみた施文（文様）構成が後期に至ってゆきつくことの出来た最終形態ととみなすことが出来，「薄糸平式」とでも仮称しうる要素をもつものと思える。しかし，現時点では類例にとぼしく，また編年論の再考が必要とされていると考える現段階では，あくまで今後の問題としたい。

＜第Ⅲ層上層＞は，これに伴う土器に問題を残したが，おそらくは「安国寺式」の影響をより明確に受けるものあるいは拡張区に出土をみた「免田式」等が，この層に伴うであろう。

「―前略―こうして考えると先史時代における高千穂文化の特色は，常に隣接地域に育った文化の流入と考えるほかはないのであって，或場合には東から，或場合には西や南からそれぞれの時代色々な文化が波及していることがうかがわれる。しかも導入された文化は独創的なものを造り出すまでには成長しなかったとみえる[19]」とされた「先史時代における高千穂文化」の全容は未だ明らかでない。しかし，「非独創性」または「亜流」に終始したとは考えない。その現われの端初として第Ⅲ類・第Ⅳ類土器の，類例を求めた上での編年的な位置付けの確定をまたねばならないと考える。もとより，「非独創性」あるいは「亜流」とみるか否かは，＜歴史観＞の問題であり，また各地域それぞれの個有性というものをどのように評価し，原始・古代史像の中に位置付けるかの問題であるが……。　（北　郷　泰　道）

註

(1) 森貞次郎「弥生文化の発展と地域性」『日本の考古学』Ⅲ弥生時代

(2) 賀川光夫「九州・晩期の様相と研究史」『新版考古学講座』3先史文化

(3) 日向遺跡綜合調査報告（第二輯）『陣内遺跡』宮崎県教育委員会（1962）

(4) 宮崎市文化財調査報告書第2集『松添貝塚』宮崎市教育委員会（1974）
この報告書内では取り上げられていないが，第17図8・9に対応する縄文式土器の出土を聞いている。

(5) 森貞次郎・岡崎敬「福岡県板付遺跡」『日本農耕文化の生成』第一冊・本文篇，日本考古学協会（1972）
杉原荘介『遠賀川』筑前立屋敷遺跡調査報告（1943）

(6) 賀川光夫・佐藤暁「東九州弥生式中期土器の一形式――主として大津式について――」『別府女子大学紀要』第4～5輯（1958）

(7) 小林行雄・杉原荘介編『弥生式土器集成』本文篇Ⅰ（1964）

(8) (6)に同じ。

(9) (6)に同じ。

(10) (7)に同じ。北九州地方第Ⅳ様式の中の「伊佐座式」系，あるいは中九州地方の市房隠遺跡出土のものに類似を求められるであろう。

(11) 『大萩遺跡(1)』宮崎県教育委員会（1974）

(12) 賀川光夫『白潟遺跡』佐伯市教育委員会（1958）
賀川光夫「東九州に於ける押型文と弥生式土器」『考古学雑誌』第37巻1号（1951）

(13) (6)に同じ。

(14) 乙益重隆「高千穂の先史文化」『高千穂・阿蘇』神道文化会（1960）

(15) (7)に同じ。

(16) (1)に同じ。

(17) 小田富士雄「弥生土器――九州――」『考古学ジャーナル』No.76～No.84（1972・1973）
北九州地方では「板付Ⅰ式」にみられ，近畿地方では「唐古Ⅰ様式」の中に，瀬戸内地方では「阿方式」等の中にみられ，弥生前期から沈線施文の手法は認められる。しかし，沈線施文の手法は系統論的には語られても，それ自体の変遷の段階的位置付けは未だ詳細をきわめていないと思われる。

(18) 高島忠平「土器の製作と技術」『古代史発掘』4（1975）

(19) (14)に同じ。

＜追　記＞

本稿脱稿後，出土土器の再検証の過程で，第Ⅱ類土器の第20図1に掲げたものと第Ⅳ類土器の中の第26図2との各土器片が，同一個体として復元されることが確認された。これによって，本文中に掲げた諸問題点の一端が，鮮明なものとなった。それは，器形上の類似，相異の問題点が一つで，本文中で第Ⅱ類土器と三田井出土の甕形土器の類似にふれると共に，第Ⅲ類土器との間にある相異にふれた点である。また問題点の二としては，第Ⅲ類土器の器形上の指標とした甕形土器の出土地点である第Ⅱ地区と，第Ⅲ地区第Ⅲ層中層との間に若干の時期的差異と認めるか否かについてである。問題点の三は，第Ⅲ層下層及び中層期の基本的な位置付け，再検証についてである。

ともあれ，時間的制約の関係もあり，「高千穂地方出土関連土器」に掲げた本遺跡同辺高千穂地方出土土器との関係も含め，第Ⅲ類・第Ⅲ類・第Ⅳ類・第Ⅵ類の各甕形土器については，後日詳細な再論の機会を得たいと考えている。

高千穂地方出土関連土器解説

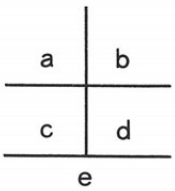
a　大字三田井神殿出土。高千穂高校所蔵。三田井出土の甕形土器は，古くから知られており，『弥生式土器集成，本編１』『新版考古学講座，４<原史文化>』等に弥生中期前半（第Ⅱ様式）の代表的なものとして実測図が掲げられてきた。しかし，それらに掲げられたのは刻目突帯をもつものである。本図版に掲げたものは，つまみ上げ状のミミズバレ状突帯を施したもので，前述の甕形土器とは器形上共通している。また施文（文様）の構成も全く共通しており，本遺跡出土のものでは第26図１に共通するが，本遺跡のものは若干突帯が低く粗いものである。本図版のものも，時期的問題についてはあらためて検討さるべきと考える。

b　大字三田井神殿出土，高千穂高校所蔵。ａと同じく『弥生式土器集成』に実測図が掲げられているもので，第Ⅳ様式に比定されている。本遺跡出土のものでは，第34図１～６に共通するものと思える。刻目突帯を胴部に一条施し，頸部に突帯を施している。

c　大字岩戸永ノ内出土。天岩戸神社所蔵。尖底の壺形土器で，大正七年に浜田耕作，梅原末治共著で書かれた『宮崎県史蹟調査報告』（第十集）の中に実測図が掲げられているものである。本遺跡出土のものでは第23図に共通する。現在のところ類例を求め得ないが，高千穂地方に居住した人々の性格を暗示する，本地域特有のものと考えられる。

d　大字岩戸永ノ内出土。天岩戸神社所蔵。広口の頸部に突帯をもつ壺形土器である。ｃと同じく『宮崎県史蹟調査報告』に実測図が掲げられている。本遺跡の出土のものの中には明確な類例を求め得ない。

e　大字上野柚木野出土。高千穂町教育委員会所蔵。「高千穂の先史文化」（乙益重隆，『高千穂・阿蘇』）に掲げられたものと同一であろうか。典型的な免田式の壺形土器である。本遺跡出土のもの（第30図１）とは重弧文の弧の数に若干の相違が認められる。
図版写真は高千穂町教育委員会田尻隆介の撮影したものである。



高千穂地方出土関連土器

2. 石　　器

石器は，第Ⅰ地区を除き，第Ⅱ地区，第Ⅲ地区，それに第Ⅲ地区の拡張区からまんべんなく出土した。本遺跡の大きな特徴として，石鏃，特に磨製石鏃の出土が多いことがあげられる。ほぼ，形状のたどれるものが19点，破片を加えると28点にも達している。また，磨製石鏃の未製品と思われる石器が20点近く出土している。その他の出土石器には，石斧，砥石，扁平石斧状石器，打製石鏃，磨石，敲石，スクレイパー，管玉等がある。

磨製石鏃一覧表

(単位は*cm*)

番号	石質	層位	全長	厚	最大幅	基部幅	基部抉入
Ⅱ ①	粘板岩	3層上	5.0	0.3	1.3	1.0	0.2
②	緑泥片岩	3層下	2.4	0.3	1.95	1.4	0.2
③	〃	3層下	2.5	0.3	1.9	1.9	0.1
④	〃		2.5	0.2	1.1	1.1	0.1
Ⅲ ①	粘板岩		(1.6)	0.2	(1.5)	1.1	0.3
②	?		(3.2)	0.3	1.1	(1.0)	0.3
③	粘板岩	3層上	(2.6)	0.3	2.0	1.9	0.2
④	?	3層上	(2.7)	0.2	(1.8)	1.8	0.1
⑤	粘板岩	3層上	2.7	0.3	2.0	1.7	—
⑥	?	3層上	(1.5)	0.5	(1.5)	—	
⑦	粘板岩		4.2	0.3	1.3	0.9	0.1
⑧	緑泥片岩	3層上	(2.2)	0.2	(1.5)	0.9	0.1
⑨	〃	3層中	3.8	0.3	1.6	1.1	0.2
⑩	〃	3層下	(2.2)	0.2	(1.4)	—	—
⑪	粘板岩	3層中	(1.4)	0.2	(1.0)	(0.8)	(0.1)
⑫	〃	3層中	(1.6)	0.2	(1.1)	0.9	0.1
⑬	緑泥片岩	3層中	(3.2)	0.2	(1.6)	—	—
⑭	粘板岩	3層中	3.6	0.3	1.2	1.0	0.1
⑮	〃	3層下	(2.5)	0.3	1.5	1.3	0.2
⑯	〃	4層上	(3.6)	0.2	1.1	1.0	—
⑰	〃	4層上	2.7	0.2	1.7	1.7	0.3
⑱	緑泥片岩	4層下	2.1	0.2	(1.2)	(1.2)	0.2
⑲	粘板岩		(2.0)	0.3	(1.6)	1.4	—
⑳	粘板岩?		(3.9)	0.3	(1.6)	—	—
Ⅲ拡 ①	粘板岩		(4.2)	0.2	1.3	—	0.2
②	緑泥片岩		(3.8)	0.3	—	—	—
③	〃		2.7	0.2	1.5	1.5	0.1
⑯	粘板岩		(1.4)	0.25	1.2	1.0	0.15

磨製石鏃（一覧表参照）

個々の特徴については一覧表に示したので，ここでは全体的な傾向を代表例をあげながら記してゆきたい。

地区別では，第Ⅲ地区が20個と圧倒的に多い。これは，遺物包含層が第Ⅱ地区よりも層かったことが影響している。その第Ⅲ地区の中では，土器の項で示した第Ⅲ層中からほとんど出土している。しかしながら，層の上下では格別の特異性は見い出せないようである。

次に石質をみると，大きく粘板岩と緑泥片岩とに分けられる。わずかに粘板岩が多いが，未製品では緑泥片岩が多いので，ほぼ半々に併用されたとみてよい。比較的，軟らかい石質のために，ほとんど全部がどこかを欠損している。特に緑泥片岩製の場合は，調整面に剝離を生じているものもあった。なお，石質の相違による形状の差異はみられない。

形状を分類すると，全体的な形状からは長二等辺三角形（柳葉状），短二等辺三角形，両者の中間形態，及びきわめて小型のものに分けられる。まず，第一はⅡ—1，Ⅲ—7，Ⅲ—14などで，この中の，Ⅲ—7とほぼ同様の形状になると思われるのが，破片の中にいくつかみられる。Ⅲ—14は基部近くが一度内側にはいり込むカーブを持っており，特異な形といえる。この第一のタイプの中で，基部の抉入をみると，なだらかな曲線で1㎜ほどはいるものと，少し深くはいりこむもの，直線が交わった格好で鋭角に切り込むものの3種が見受けられる。次に短三角形のものはⅢ—5，Ⅲ—17がその代表的なものであるが，Ⅲ—5がごくわすかな抉入しかないのに比べ，Ⅲ—17は鋭角的な切り込みを持つ。また，Ⅲ—15はその中間形態といえよう。長三角形と短三角形の中間のものとして，Ⅲ—9があげられるが，これは鋭角的な切り込みを有する石鏃である。

以上のように，形状はいくつかに分類できるが，その差異は時期的なことまで言々するには十分でなく，むしろ，これらが併用されたと考えるのが妥当である。これらの石鏃が，弥生中期とみられる宮崎市石神遺跡[1]出土のものと類似していることも，ひとつの示唆といえるだろう。

さて，前述したように，本遺跡からは磨製石鏃の未製品がかなり多く出土した。その数は約20点で，はっきり断定できないものを含めると，もう少し多くなる。本遺跡の場合，石材として，粘板岩と緑泥片岩を用いていることは先に述べたが，未製品もこの二種の石材に限られている。図に掲げた中で，第43図の4，5のみが粘板岩で残りは全て緑泥片岩であった。

石鏃の製作過程として，まず原石材からの粗割が考えられる。Ⅱ—8の如きは原石材の自然面を一部に残しており，この工程を示す資料である。次に大ざっぱに石鏃としての形を整える工程がある。Ⅲ—22，23などがこれにはいる。両側面にかなり細かい剝離がみえ，加工の跡をうかがわせる。そして，仕上げは砥石による研磨である。後述するように，本遺跡からは砥石，又は砥石様の石器も幾つか出土しており，研磨の際にはこれらの石器が使用されたことは十分推測できる。

砥　　石

第47図15に示す砥石は各面が滑らかに磨り減って，その使用度合を示している。石質は砂岩で8㎝×5㎝×3.5㎝ほどの大きさである。

石皿状石器

第47図17に示す石器である。大きさは22㎝×12.5㎝の扇形に近い形をしている。厚さは薄く，厚いところで3㎝たらず，薄いところでは1.5㎝程度しかない。形状からみて石皿と思うが，或いは砥石の役目も果したかも知れない。

扁平石斧状石器（第38図15，第42図28，第47図18参照）

この石器は破片が第Ⅱ地区と第Ⅲ地区のかなり離れた地点から出土したので，はじめ別々に扱ったものである。現長13㎝，最大幅4.8㎝で，厚さは最大値でも1㎝足らずである。一面は全面に研磨がみられ，一方の側面もよく研磨されているが，もう一方の面と，側面は所々に研磨がみられる程度である。かなりもろい粘板岩系の石材を使っているので，石斧として使用は少し無理であろう。現に二つに折れこおり，剝離も方々にみられる。もうひとつ，石庖丁の未製品という見方もできるが，かなり研磨されているのに，刃をつけた跡が全くみられない。これとよく似た石器がかって西諸県郡野尻町大萩遺跡5号住居跡から出土している[8]。この場合は緑泥片岩のようであるが，田中茂氏は扁平石斧と石庖丁未製品の二つの見方をしておられるようだ。本遺跡の石鏃の研磨状態からみるとこの石器を砥石としてみるのも成り立つのではないだろうか。そうすれば，この程度の大きさが研磨用具として格好だと考える。

石　　斧

第37図14は片刃の打製石斧であるが，上部を欠いているようである。現長8㎝，幅5.5㎝，厚さ1.7㎝を計る。石材は薄緑色を呈しているが凝灰岩の一種と思われる。

第38図13は剝片を打ち欠いて製作した打製石斧である。一次剝離のあと，かなり入念な調整剝離を行なっている。周縁ではかなり薄くなっているので，石斧というより土掘り具としての機能を持つと思われる。

第39図19は一撃で剝離した剝片の端に細かい剝離を重ねて刃部を作り出したもので，石斧としての機能は十分持っている。石材は片岩である。

大型磨製石鏃（石槍？）

第36図5に磨製石鏃未製品とともに並べたが，他のものと違って研磨面を両面に持っている。従って，これは製品で周囲の剝離は，石材の軟弱さのために生じたものとみたい。大型磨製石鏃というより，むしろ石槍とすべきかも知れない。

小凹み石

第37図11はどうにも不思議な石器で，小石の底面を丸く磨き，上面には凹みをつけている石器である。何らかの意図を持って製作されていることは確かだが，どういう用途を持つのだろうか。長径3.3㎝，短径2.6㎝，厚さ0.8㎝で，凹み部は2.2㎝×1.7㎝，深さ0.2㎝程度である。

管　　玉（第43図７）

第Ⅲ地区拡張区の焼土面から出土した。半割の状態であり，長さ2.4㎝，径0.6㎝，孔の径0.2㎝である。

石庖丁？片

第42図27の石器で上縁は面取りしてある。一方は自然面を残し，剝面をも調整の痕跡はみられないから，剝片のまま使用したものであろう。砂岩系の石質である。

打製石鏃

第41図24，25，26に示すように３点の打製石鏃が出土した。３点とも精巧な製作とはいえない。特に25はぶ厚い断面をもち，これで機能が果せるのかどうか，疑問が残る。24はチャート，25は安山岩系，26は黒曜石を素材としている。

鉄　　鏃（第43図８）

ただ一点のみ，拡張区から出土した。茎のみしか存在していないが，平根系統の鏃であろう。

その他の石器

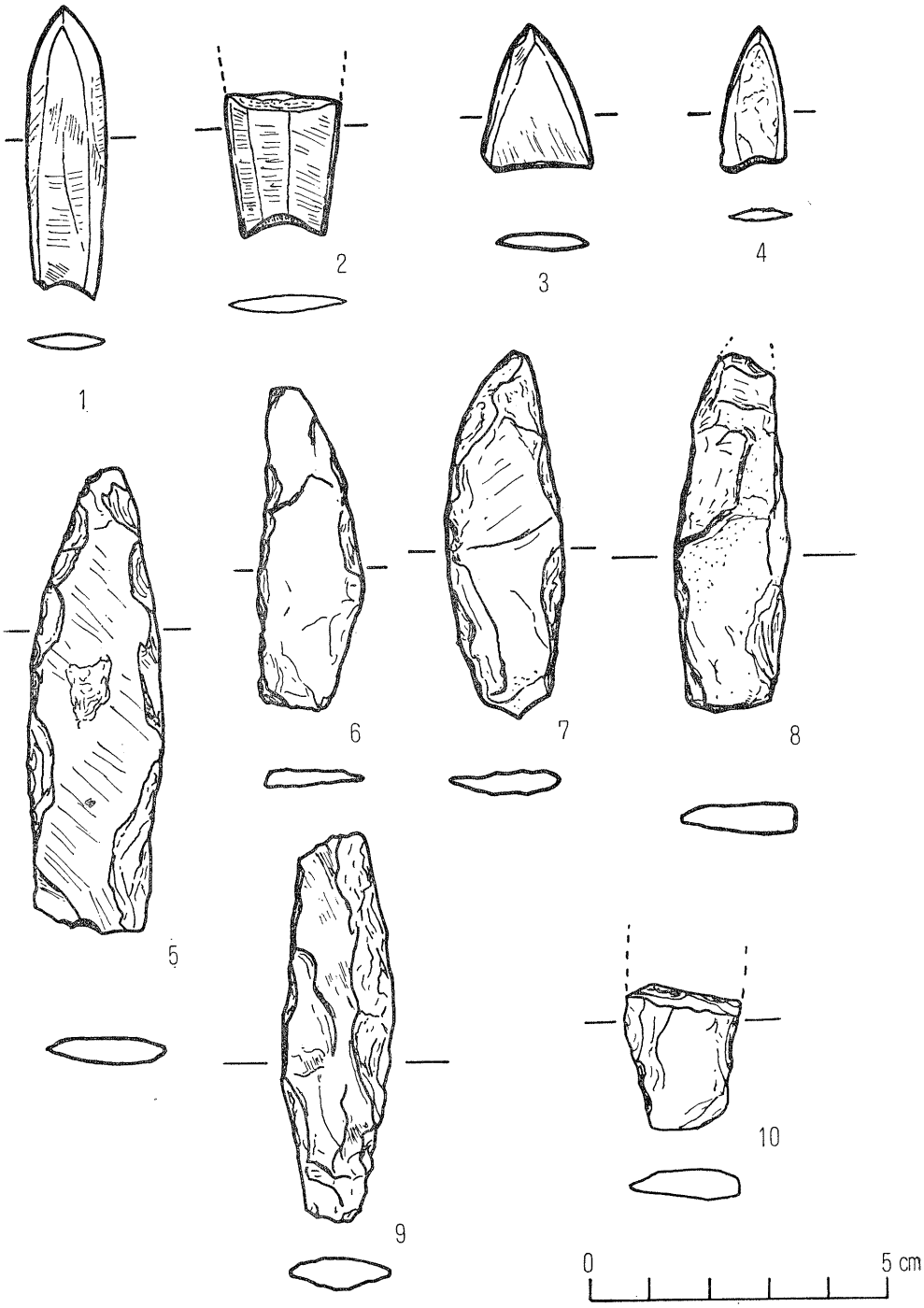
第44図13，第37図12は磨り石としての機能を持つ。また第42図29は敲き石としての機能を持っており，突端部は無数の使用痕を残している。第38図16，第43図10，第44図11，第46図32はともにスクレイパーとしての機能を持つ石器であり，石質は緑色チャートである。第一次剝離後，何回かの剝離を重ねて刃部をつくり出している。これらは本遺跡の近辺に存在する縄文時代遺跡に伴なうものと思われ，出土はほとんど客土か溝からである。

以上，本遺跡の出土石器について述べてきた。まとめてみると，石鏃特に磨製石鏃が多いこと，磨製石鏃の未製品がみられ，加工の跡がたどれること，農耕具と思われるものの出土が少ないことが本遺跡の特徴としてあげられよう。従って，石器の面からみた限りでは，本遺跡を残した人々には，農耕はいまだ浸透しておらず，狩猟経済がその生活基盤となっていたことをうかがわせる。

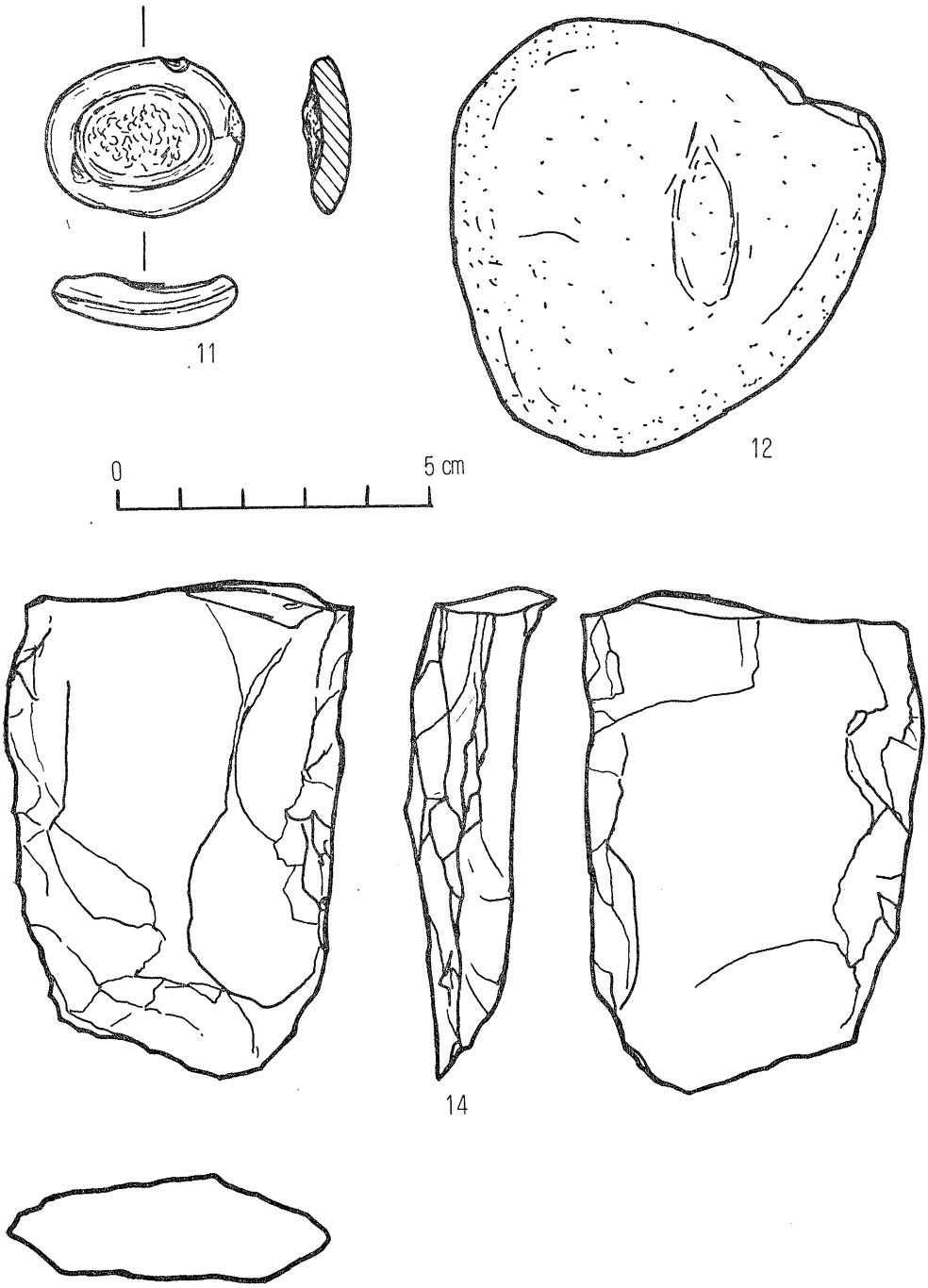
（田ノ上　　哲）

註

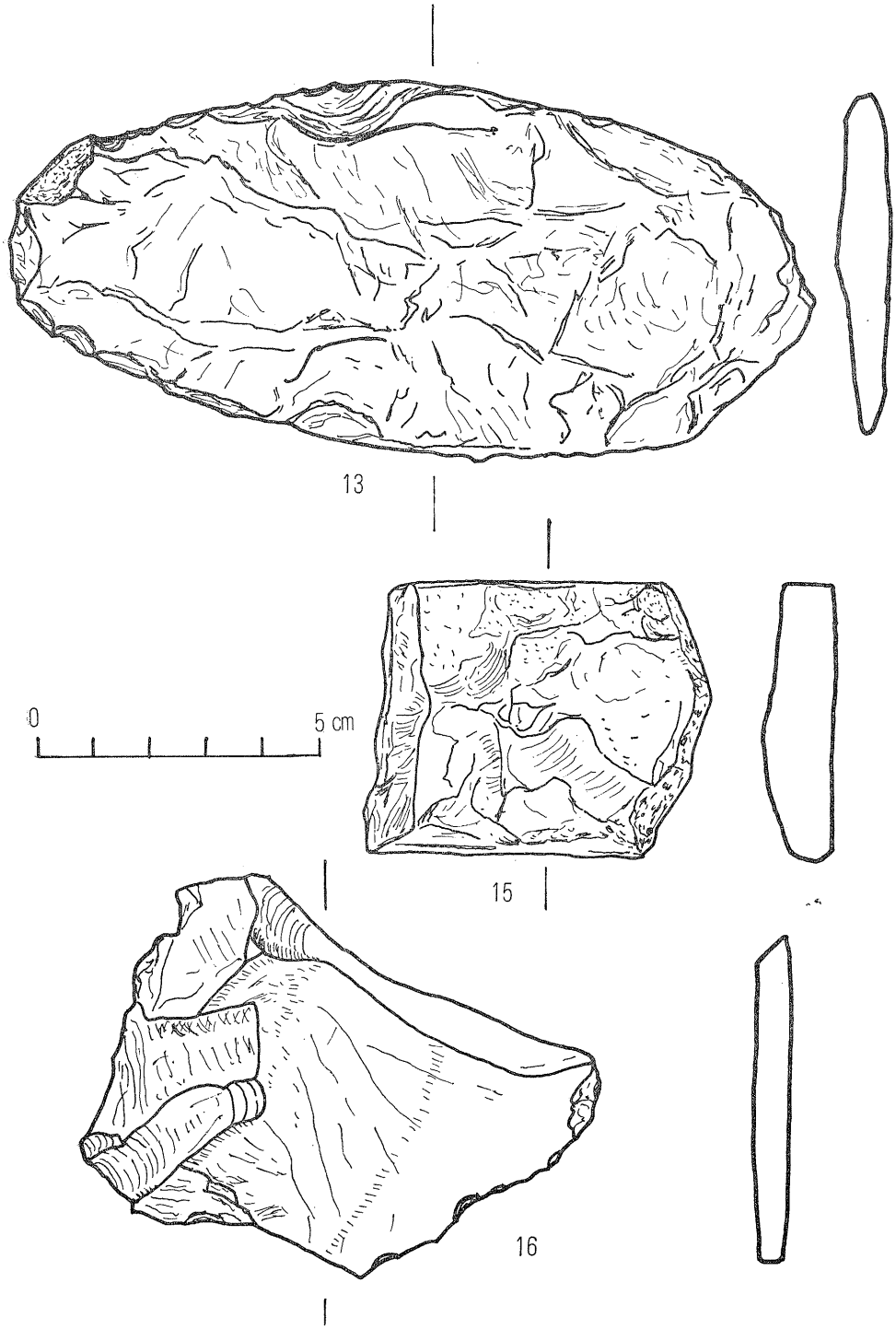
(1) 1973年宮崎市教育委員会『石神遺跡』　(2) 1975年宮崎県教育委員会『大萩遺跡』



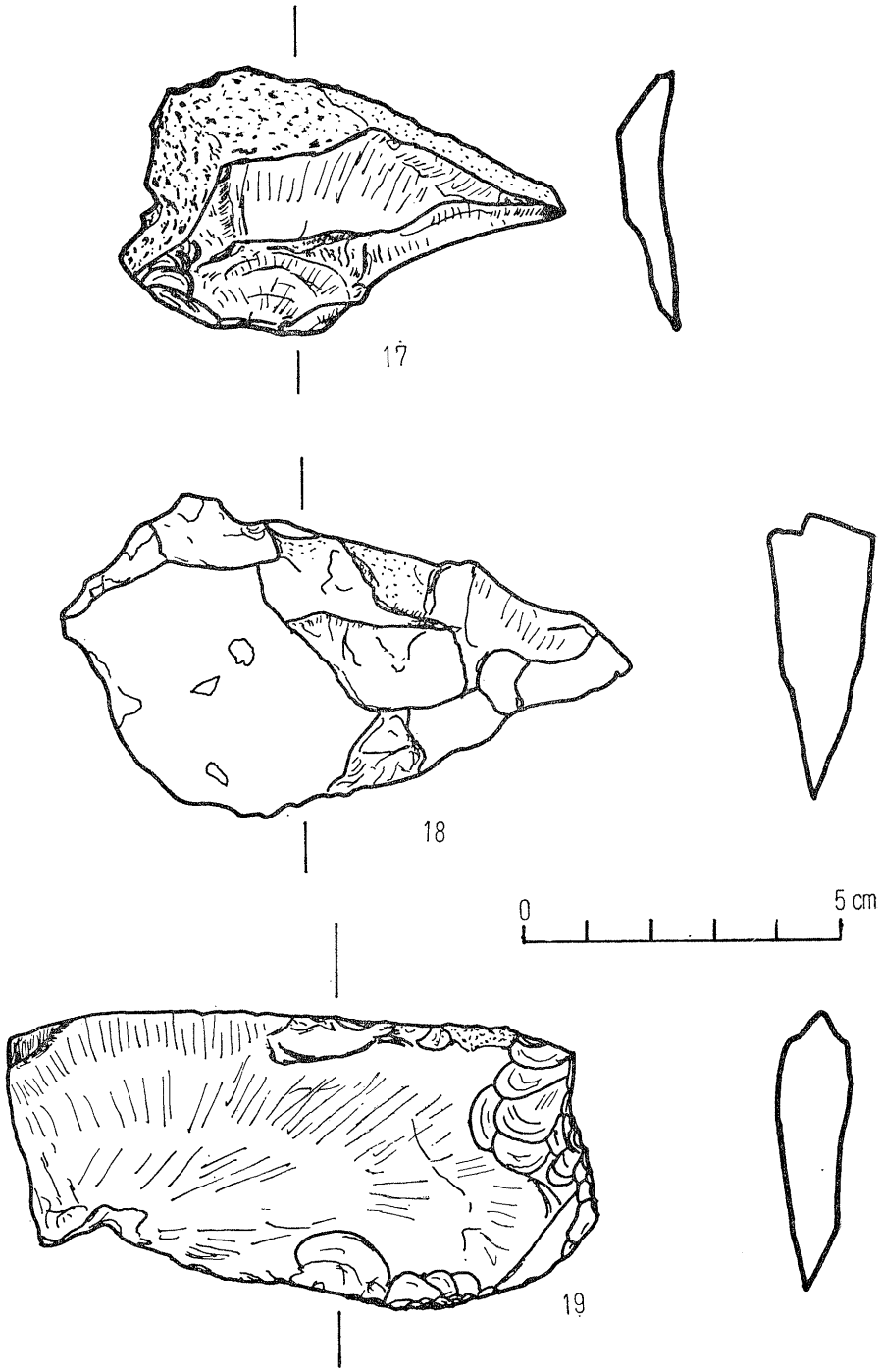
第36図　第Ⅱ地区出土の石器(1)



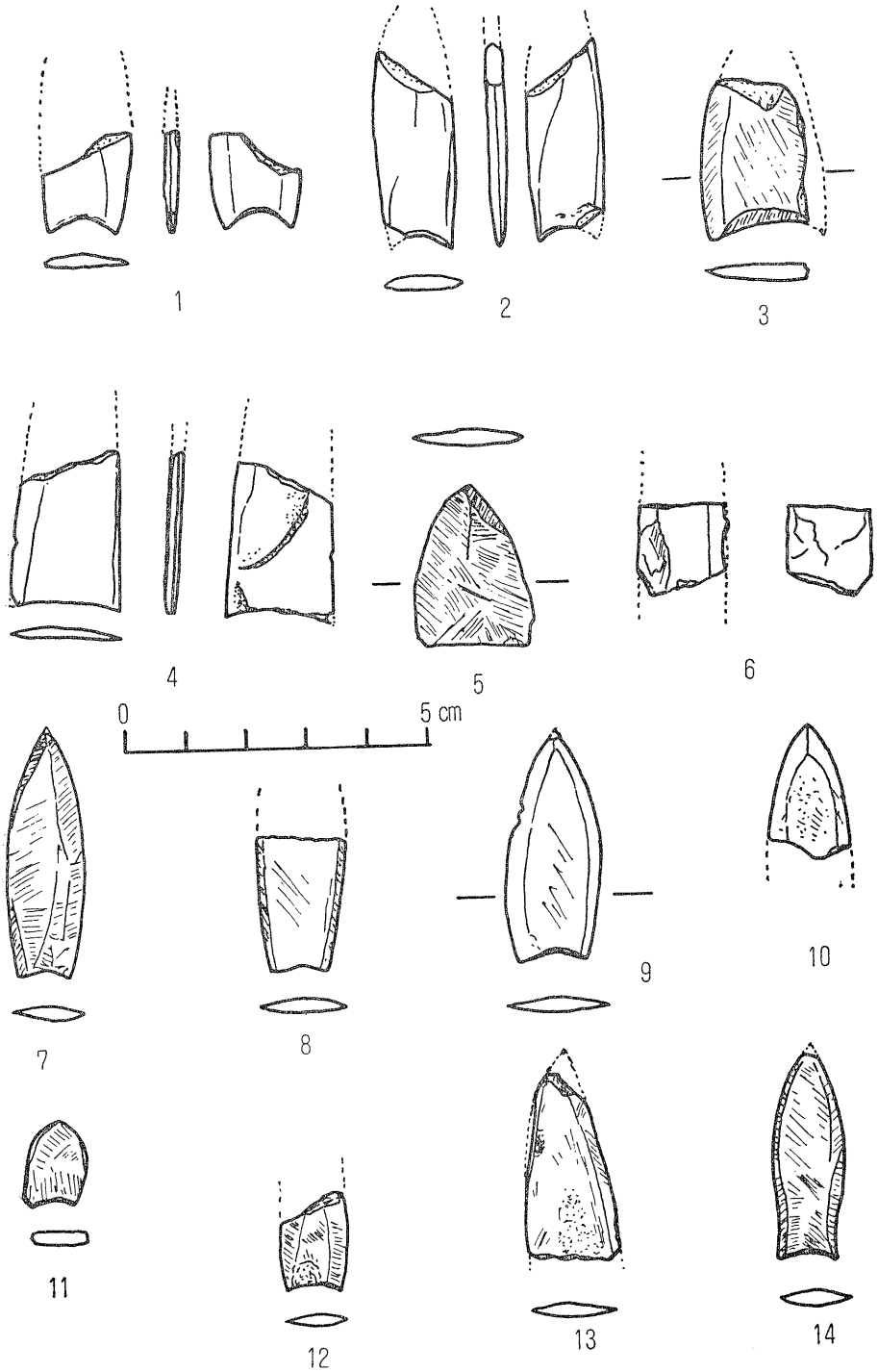
第37図　第Ⅱ地区出土の石器(2)



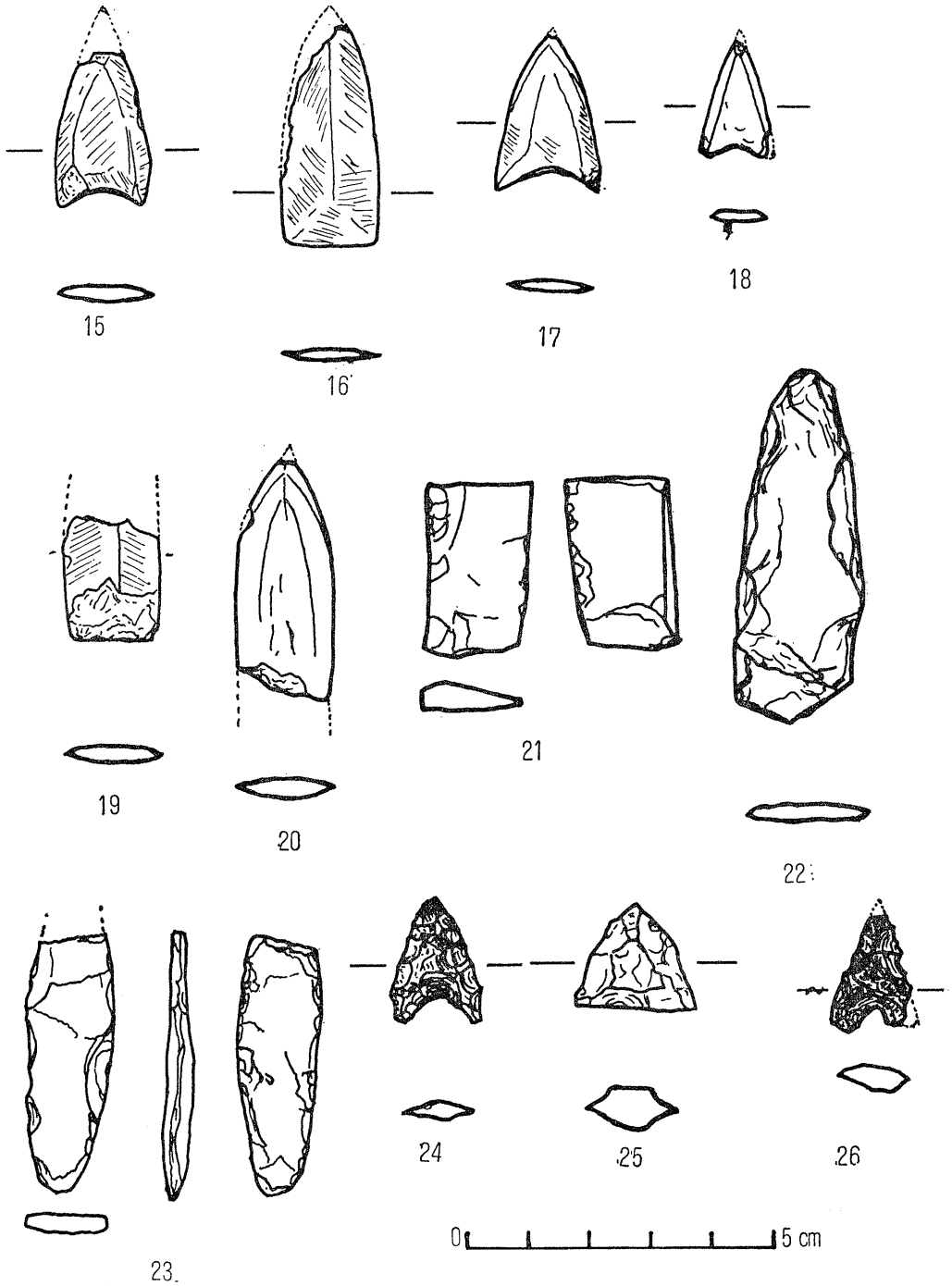
第38図　第Ⅱ地区出土の石器(3)



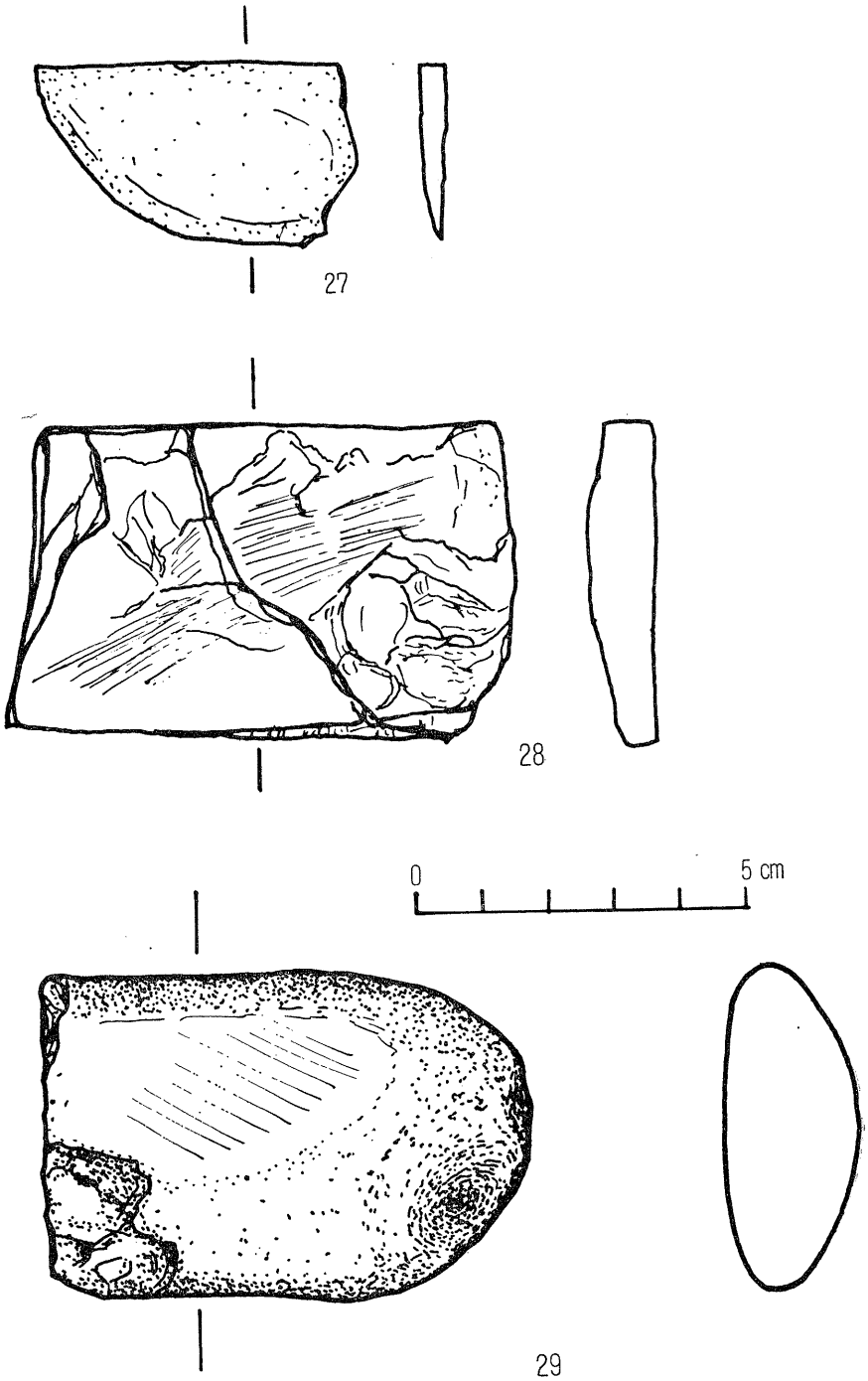
第39図　第Ⅱ地区出土の石器(4)



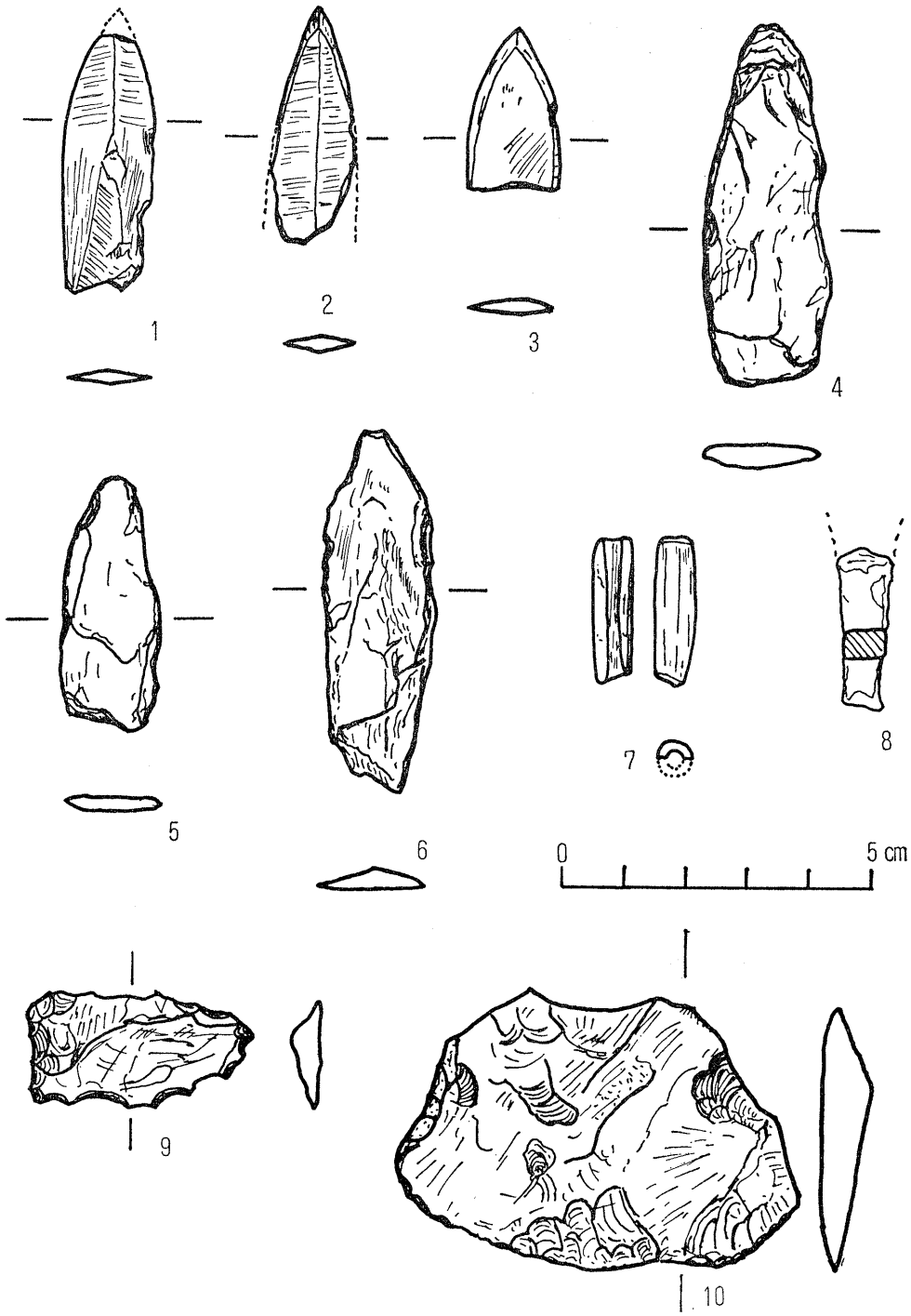
第40図　第Ⅲ地区出土の石器(1)



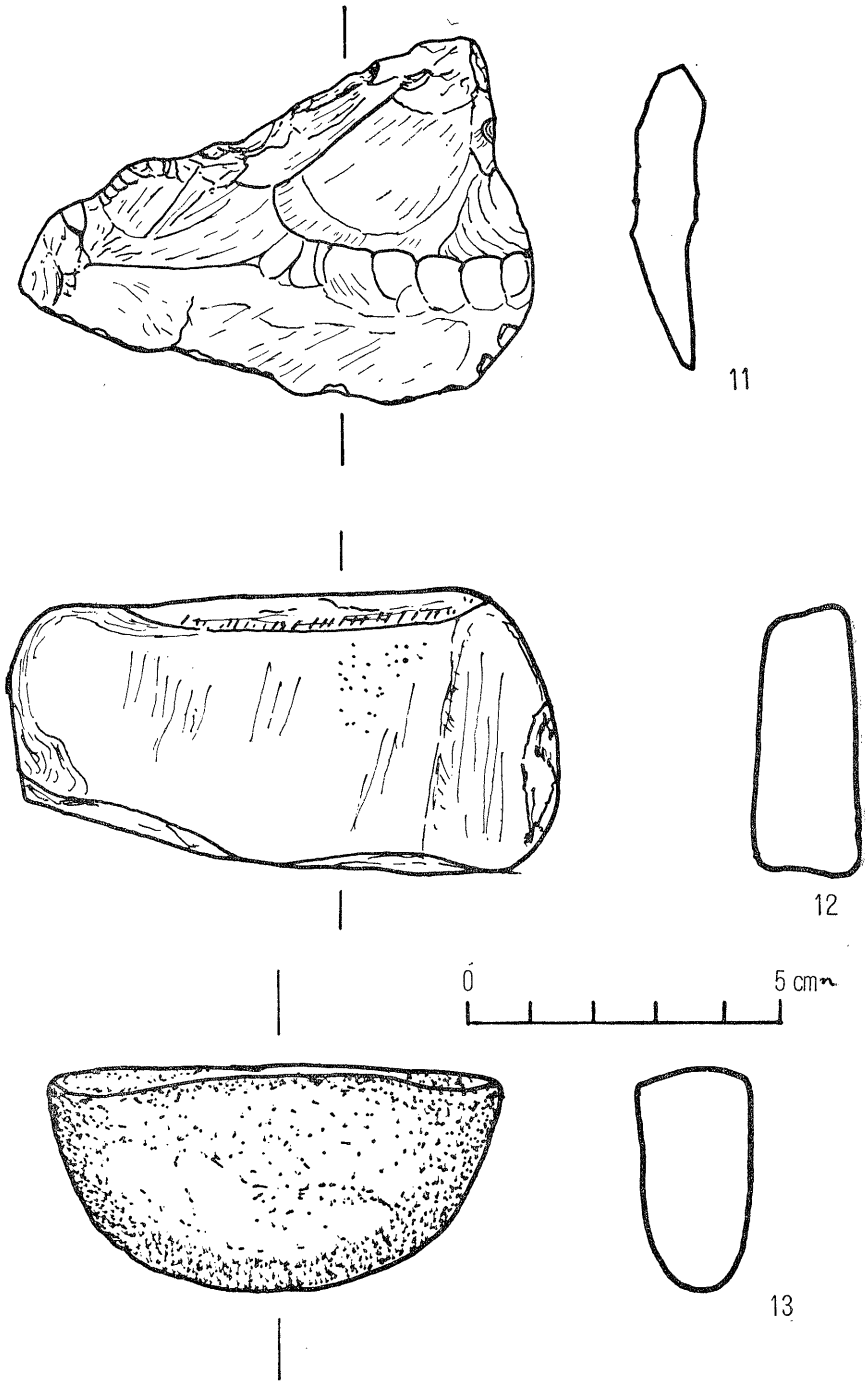
第41図　第Ⅲ地区出土の石器(2)



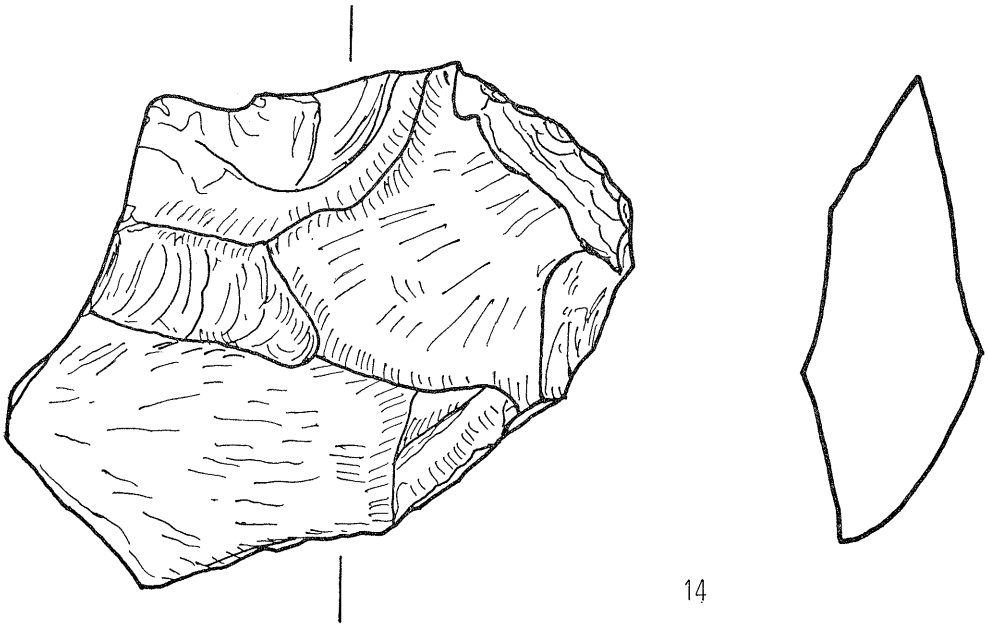
第42図　第Ⅲ地区出土の石器(3)

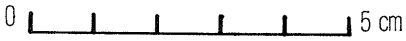


第43図　第Ⅲ地区拡張区出土の石器(1)

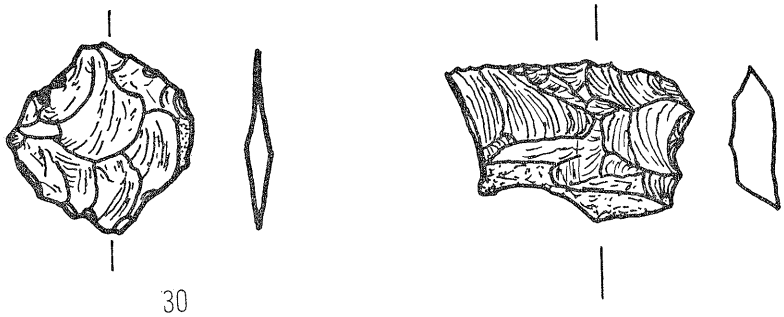


第44図　第Ⅲ地区拡張区出土の石器(2)



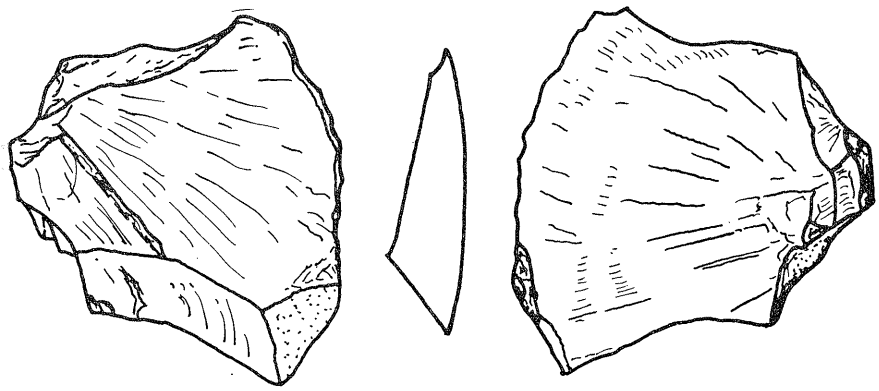


第45図　第Ⅲ地区拡張区出土の石器(3)

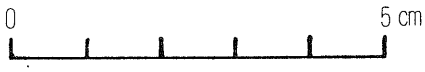


30

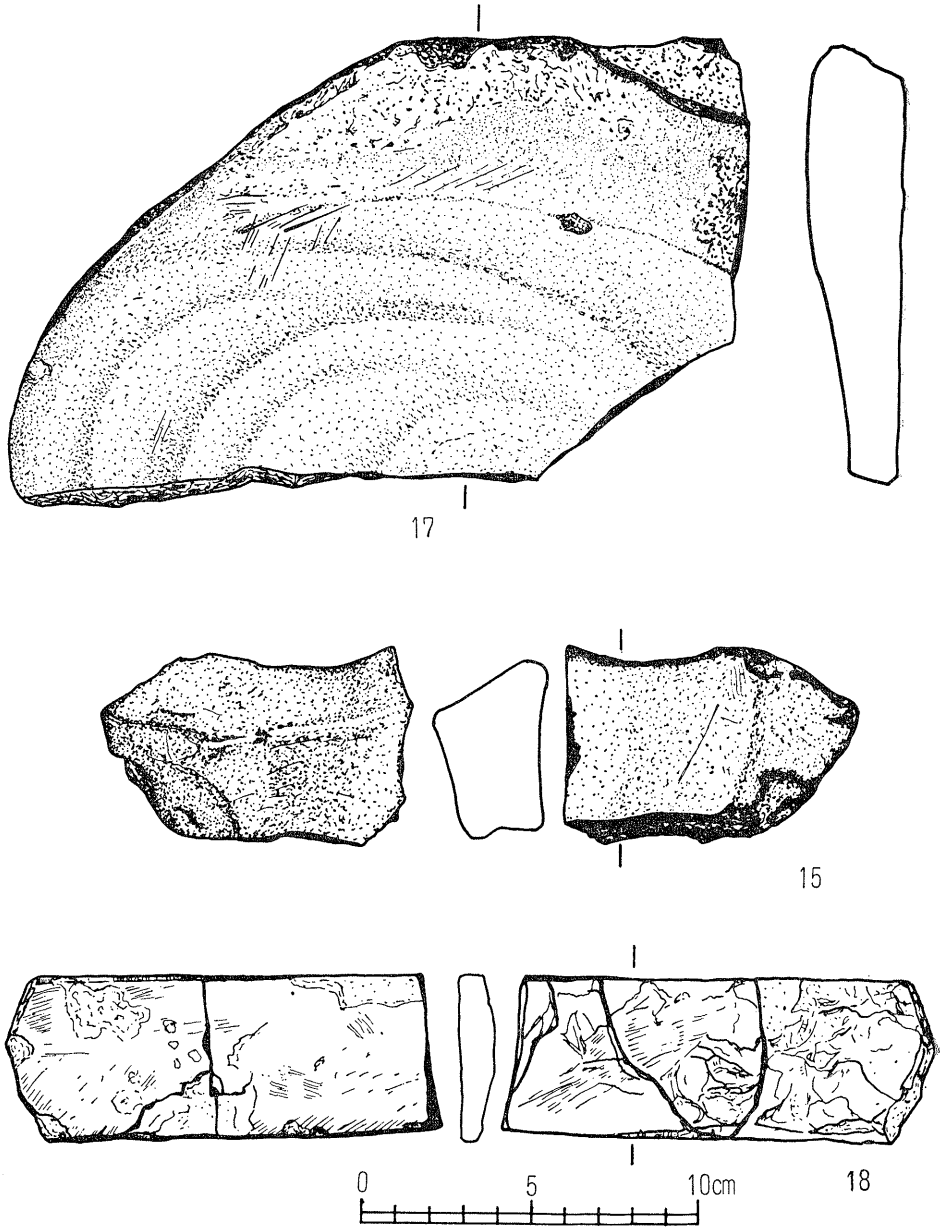
31



32



第46図　第Ⅲ地区拡張区出土の石器(4)



第47図　第Ⅲ地区拡張区出土の石器(5)

3. 住居跡木材炭化物の樹種

住居跡のほぼ中央部に，完全に炭化した木材が，散在していた。この散在状態から柱，梁，棰その他屋根組等を推察することは不可能であるが，住居小屋組等を推察することは不可能であるが，住居小屋組に使用された木材の遺物と考えられる。木材炭化物が散在していた15個所から資料を採集し，樹種の識別を行った結果，次の7樹種を認めた。

カエデ類（Acer L.）—種名は不明—6個体，ヤマボウシ（Cornus Benthamidia japonica Hara）5個体，ヤブニッケイ（Cinnamomum japonicum Sieb）1個体，シデ類（Carpinus L.）—種名は不明—1個体，ケヤキ（Zelkowa Serrata Makino）1個体，樹種不明の広葉樹1個体。

以上の通り，出土した木材炭化物は全べて広葉樹であって，現在の一般用材として使用されているスギ，ヒノキ，などの針葉樹が含まれないことは大萩遺跡（宮崎県教育委員会，1975）での調査結果と同様であった。

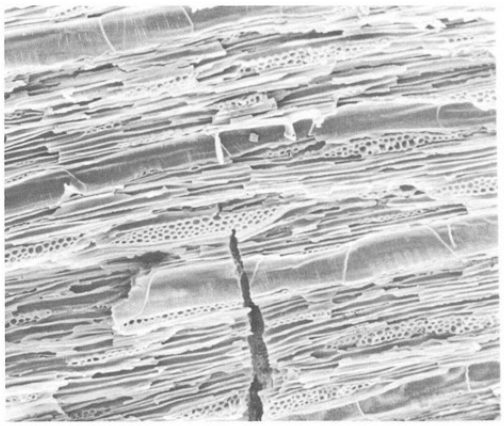
今回の出土木材炭化物で樹種が判明した5樹種のうち4樹種は落葉広葉樹であり，常緑広葉樹はヤブニッケイただ1種であった。これら落葉広葉樹の出現は暖帯上位の植生であって，大萩遺跡，延岡市の住居跡，松山市の住居跡などの調査例（全て常緑広葉樹で暖帯下位の植生）とは異なっている。

当時の高千穂地方が海抜高も高く，気温も多少低い気候であったと推察される。

（大　塚　　誠）

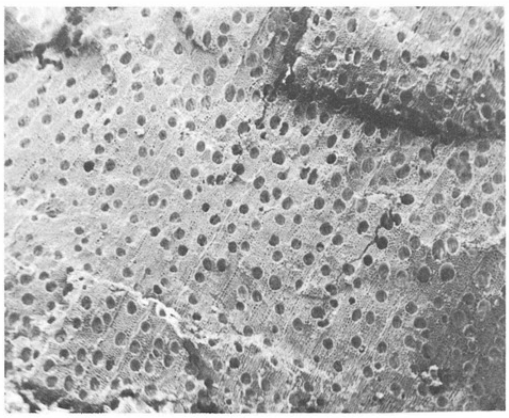
カエデ類

横断面（木口面）　×50

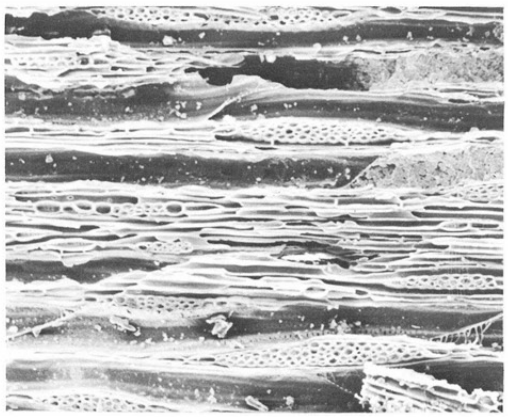


接線断面（板目面）　×200

ヤマボウシ

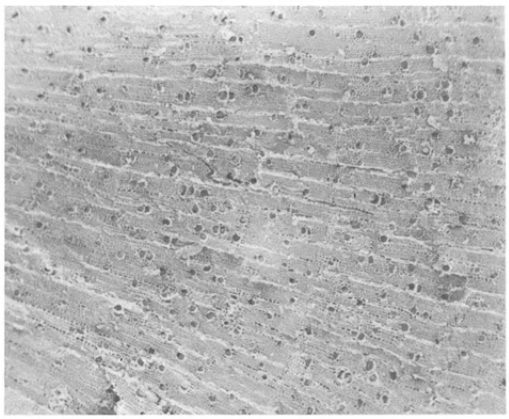


横断面　×50

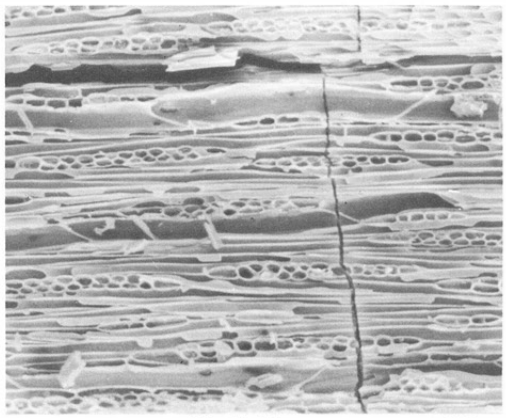


接線断面　×200

ヤブニッケイ

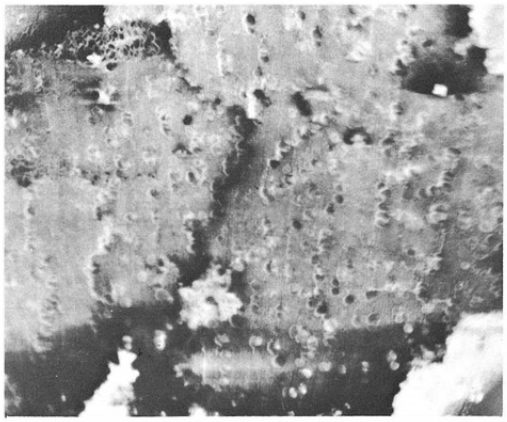


横断面　×50

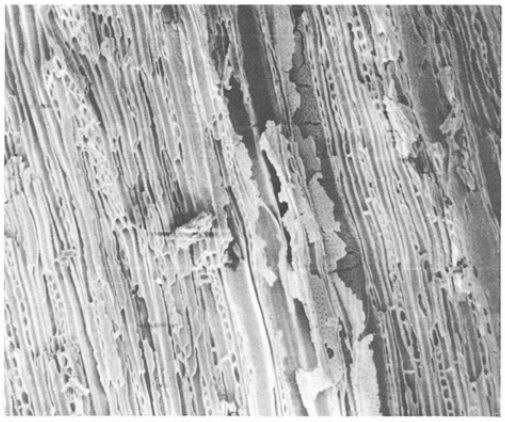


接線断面　×200

シ デ 類

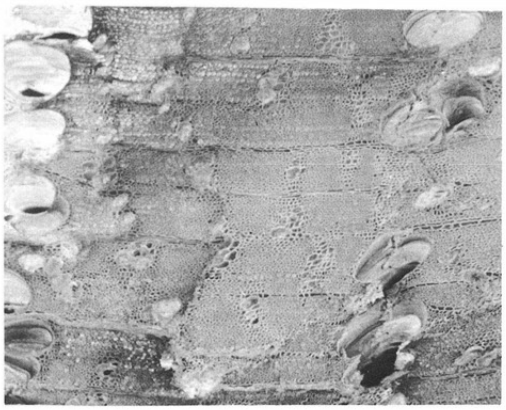


横 断 面 （木 口 面） ×50

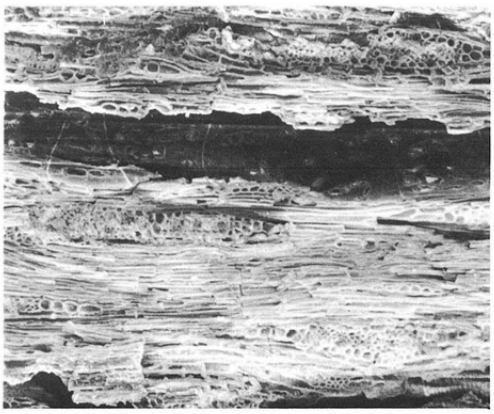


接 線 断 面 （板 目 面） ×200

ケ ヤ キ

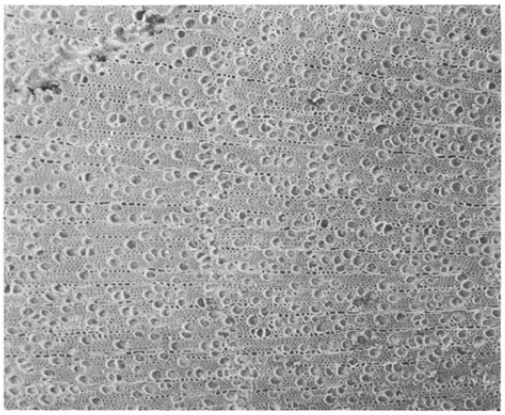


横 断 面 ×100



接 線 断 面 ×200

樹種不明



横 断 面 ×100

接 線 断 面 ×200

第5章　結　　語

宮崎県の中央高地においては，従来，弥生式遺跡の正式調査というものは実施されたことがなく，その意味でもこの薄糸平遺跡の発掘調査には期待がかけられたのである。幸い遺物包含層から多量の土器類が出土し，それらを検討することによって，この遺跡の性格というものを大略，把握することができた。まず，出土の土器類から考察してみる。遺物包含層は第Ⅲ層と第Ⅳ層の約1 m幅の層位中に認められた。この包含層の最下層である第Ⅳ層の下層部から数ケの縄文晩期系統の黒色系土器片が発見され，さらに，そのレベルに石庖丁様石器も確認された。また，そのすぐ上部には一条ないし二条の刻み目突帯文を有する下城式土器群が発見されたが，この下城式土器は縄文晩期終末系統の土器であり，大分県白潟遺跡[1]などでは弥生式前期の壺形土器などと共通するのである。この前期の板付式土器などが主に東九州の海岸平野部地域に分布していることから考えて，高千穂地域のような山地において甕形土器としての下城式土器は，一応，弥生式文化の始源として考えられるのではなかろうか，そして，その時期を弥生式前期末頃に想定してみた。さらに，この時期に続く形式としては甕形土器の胴部に刻み目突帯文が横だけでなく縦にも施されるようになるもので佐伯市の長良貝塚[2]でも発見されている。この土器様式が高千穂地方で散見できることは注目されるところである。また，この時期に並行するか，あるいは，少し年代的に下るかもしれないが外反りの甕形土器の頸部に数条の凹線文を刻し，さらに胴部の凹線と縦状に結ぶ形式，すなわち，前者の突帯文と後者の凹線文とでは同一形式とみなすことができる。この両形式の弥生式土器は高千穂地帯において発達した地域性の強い土器形式であり，時期的にも弥生式中期に相当するようである。

以上述べてきたように，縄文系土器様式の流れをくむ下城式土器群に対し，他方，北九州系統とみられる，須玖式の甕形土器も発見されている。また，大形の壺形土器の胴部に断面三角形の突帯文を数条施している土器も出土しているが，この形式も須玖式系統のものであろう。このように，高千穂地方に須玖式系統の土器文化が流入していることは興味あるところである。なお，肥後の黒髪式系土器群も発見されているが，これらは，いずれも北九州の弥生式中期文化の影響によるものである。ここで，留意しなければならないのは第Ⅲ層の下部より「く」の字型二重口縁の土器が出土したことである。口縁部から下は欠損しているので胴部は不明であるが二重口縁の立ちあがり部分には必ずともなう櫛描文は刻されていない。だいたい，櫛描文の施されている二重口縁の土器は弥生式の後期に比定されるが，この土器の場合は中期の弥生式土器群の発見された層位から出土したこと，また，胴部の形式が胴張りに両方に尖がるように想定されることなどから，この二重口縁土器の編年を弥生式中期末頃に推定したい。そのことは，この土器の出土した層位よりも上層に弥生式中期の土器が認められており，この遺跡出土の全遺物をみても弥生式後期に入ると考えられるような遺物はみあたらないのである。

つぎに，この遺跡出土の遺物で特筆すべきことは磨製石鏃が20数点も発見されていることである。未製品も加えればまだ数は多くなる。形式は無茎の三角形状磨製石鏃が約10点，柳葉状

のものが10数点検出された。この磨製石鏃は弥生式中期の遺跡に伴出するものであり，特に無茎の磨製石鏃は日本でも東九州に多く発見されているのであるが，この高千穂の薄糸平遺跡においても，この地域性にみられるとおり，多数の磨製石鏃が確認された。また，宮崎県でははじめての発見例であるが，この遺跡からV字型の溝が発見されたことである。この溝の内部から遺物も発見されているので，この弥生式遺跡に付随した遺構であると思う。溝の長さを5mだけしか確認することができなかったが，さらに発掘すれば長い遺構が発見できたのではないかと思われる。溝に多少の勾配が認められたことは排水溝の役割を果していたのではないかと推察される。このV字型溝は福岡県の板付遺跡[3]で発見されているが，その場合は内部から板付1式土器と夜臼式土器が共伴して出土しているので弥生式前期の遺構とみなされる。しかし，この遺跡では出土遺物の関係から中期に比定されそうである。

北九州の弥生式文化の中心地帯に認められるV字溝の遺構が年代的に少し下るけれども，九州中央高地に発見されたことは弥生式文化の中部九州への伝播ということを考える場合注目すべき事項といわなければならない。また，最近，宮崎市山崎町石神[4]において弥生式中期の遺跡発掘調査が実施され，薄糸平遺跡にも関連のある遺物が出土したが，石神遺跡に比較すると高千穂地帯の地域的特性と，より北九州的な要素の流入というようなことなどに差異がみられるようである。なお，第Ⅲ地区の拡張区から沈線の同心円文土器片が1ケ発見されているが，この資料については拡張区を一応，第Ⅲ地区の遺跡とは別に区分した方がよいと考えられるので，この薄糸平遺跡の編年的考察の際には資料として取り扱わなかった。いずれにしても，薄糸平遺跡は宮崎県の山地における弥生式文化を究明する場合には，一応，取り組まなければならない遺跡として高く評価したい。

（日　高　正　晴）

註

(1) 『白潟遺跡』佐伯市教育委員会昭和33年5月

(2) 同　上

(3) 『日本農耕文化の生成』本文篇「板付遺跡」日本考古学協会篇

(4) 『石神遺跡』宮崎市文化財調査報告書第1集，昭和48年3月

図　版

図版 1

薄糸平遺跡遠景

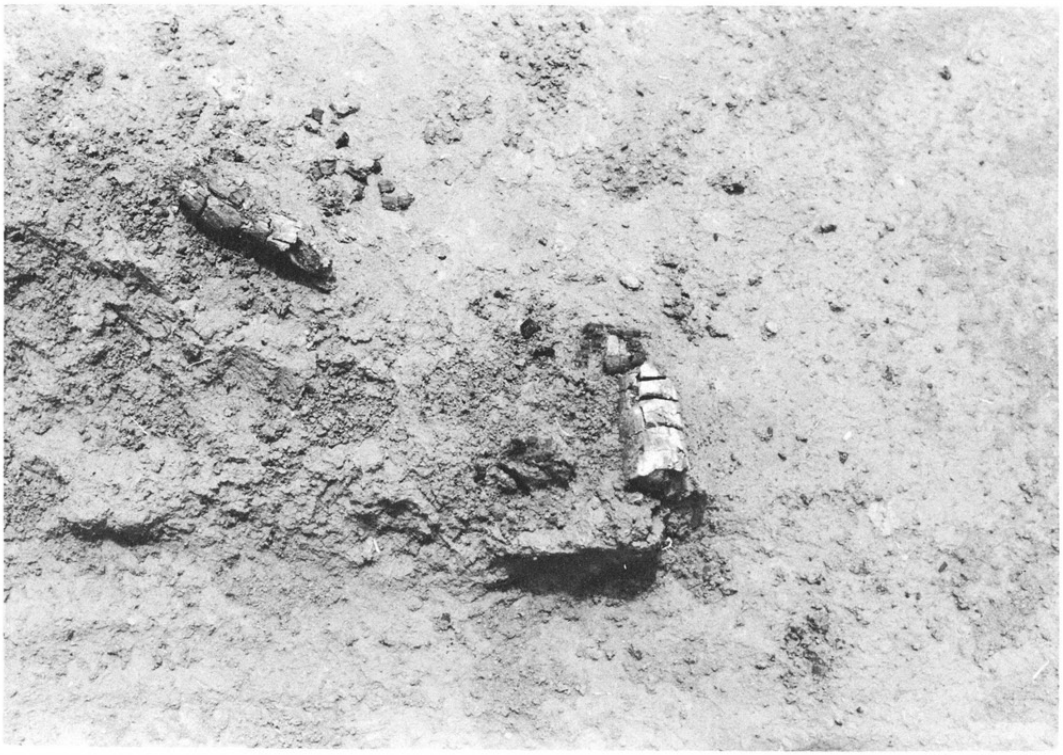
薄糸平遺跡近景

図版 2

発掘調査状況

ピット検出状況

炭化材検出状況



炭化材

図版 4

第II地区壺形土器（第24図）甕形土器（第22図１）出土状況

第II地区甕形土器（第22図１・第26図１）出土状況

第Ⅲ地区壺形土器（第35図11）出土状況

第Ⅲ地区二重口縁（第21図 1）出土状況

図版 6

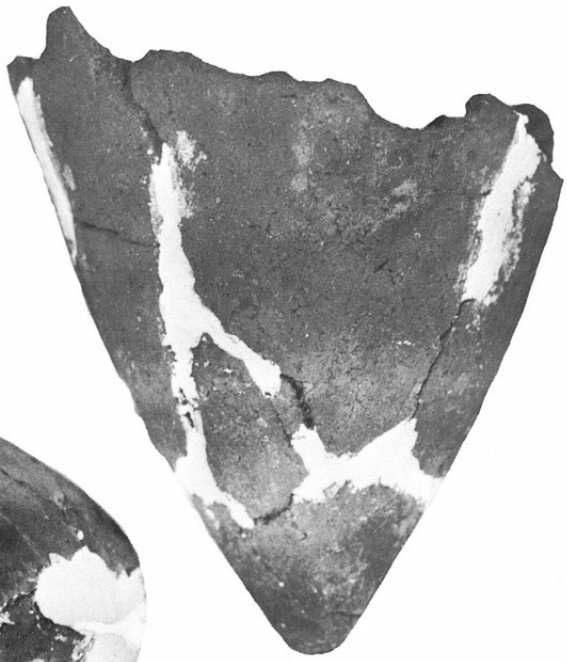
第II地区北東壁土層

第III地区北東壁土層

図版 7

拡張区の溝（左）と溝横断面土層（上）

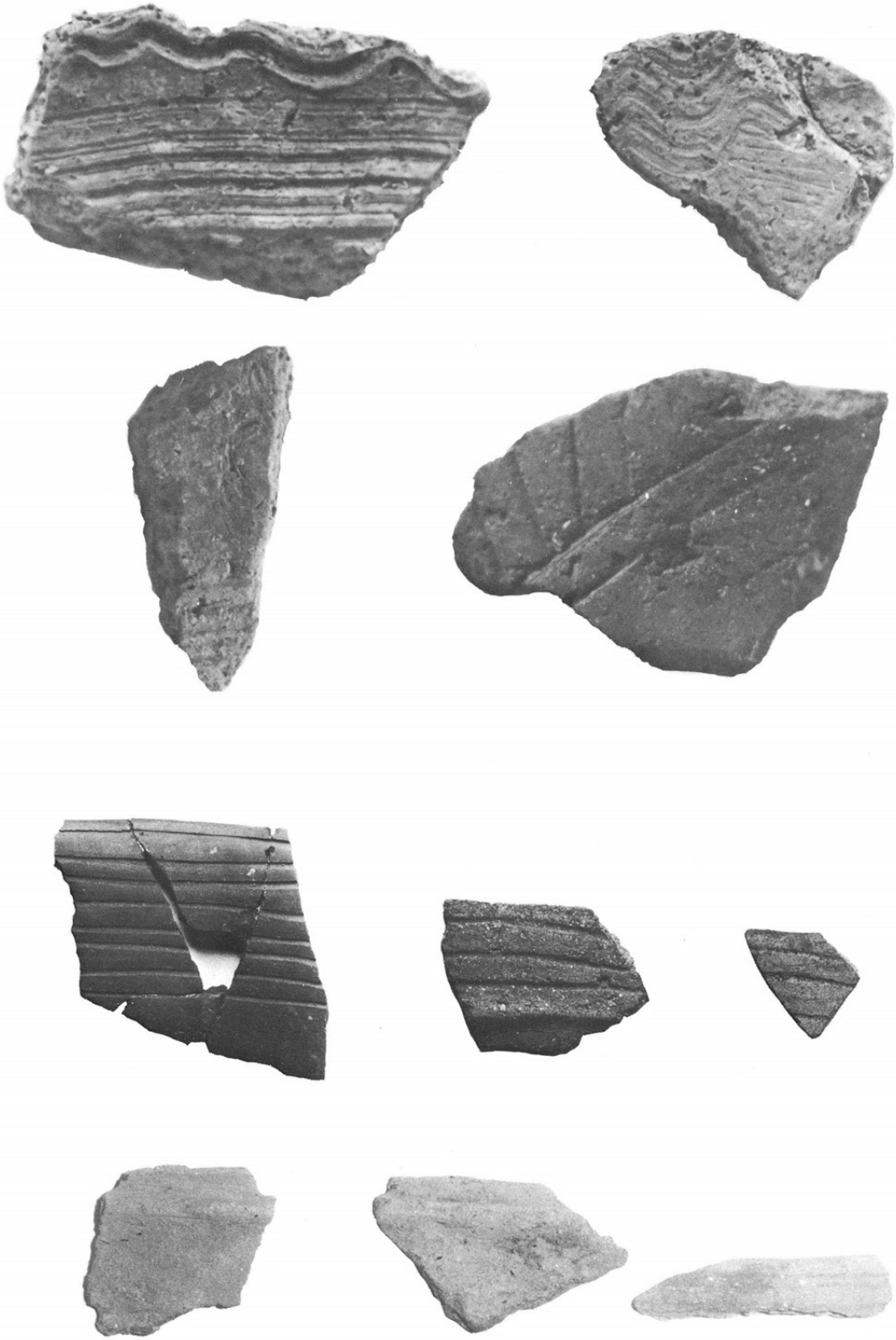
図版 8



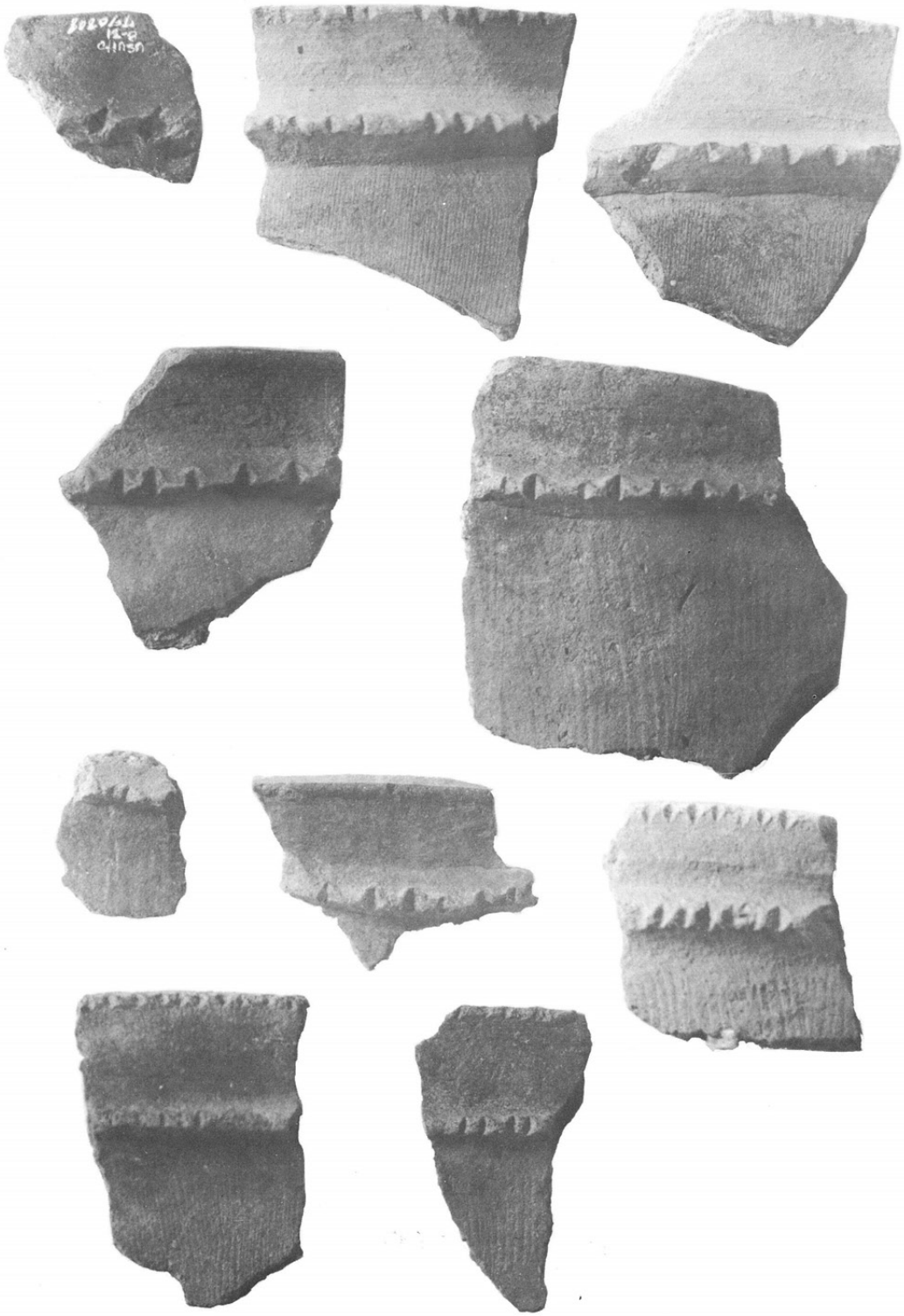
第II地区出土甕形土器・尖底土器・壺形土器

第Ⅲ地区・拡張区出土壺形土器

図版10

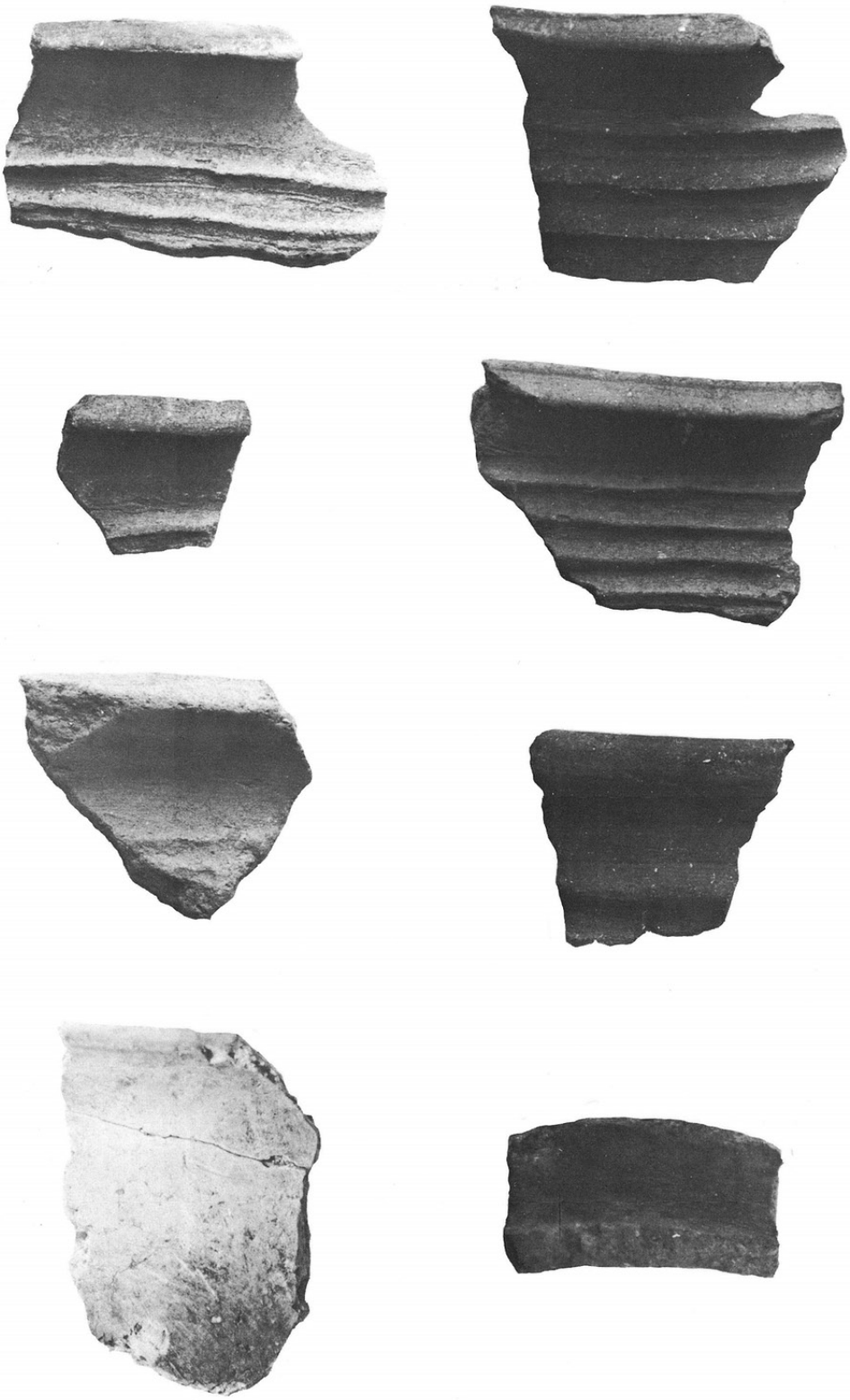


流水文・有文土器片・縄文式土器

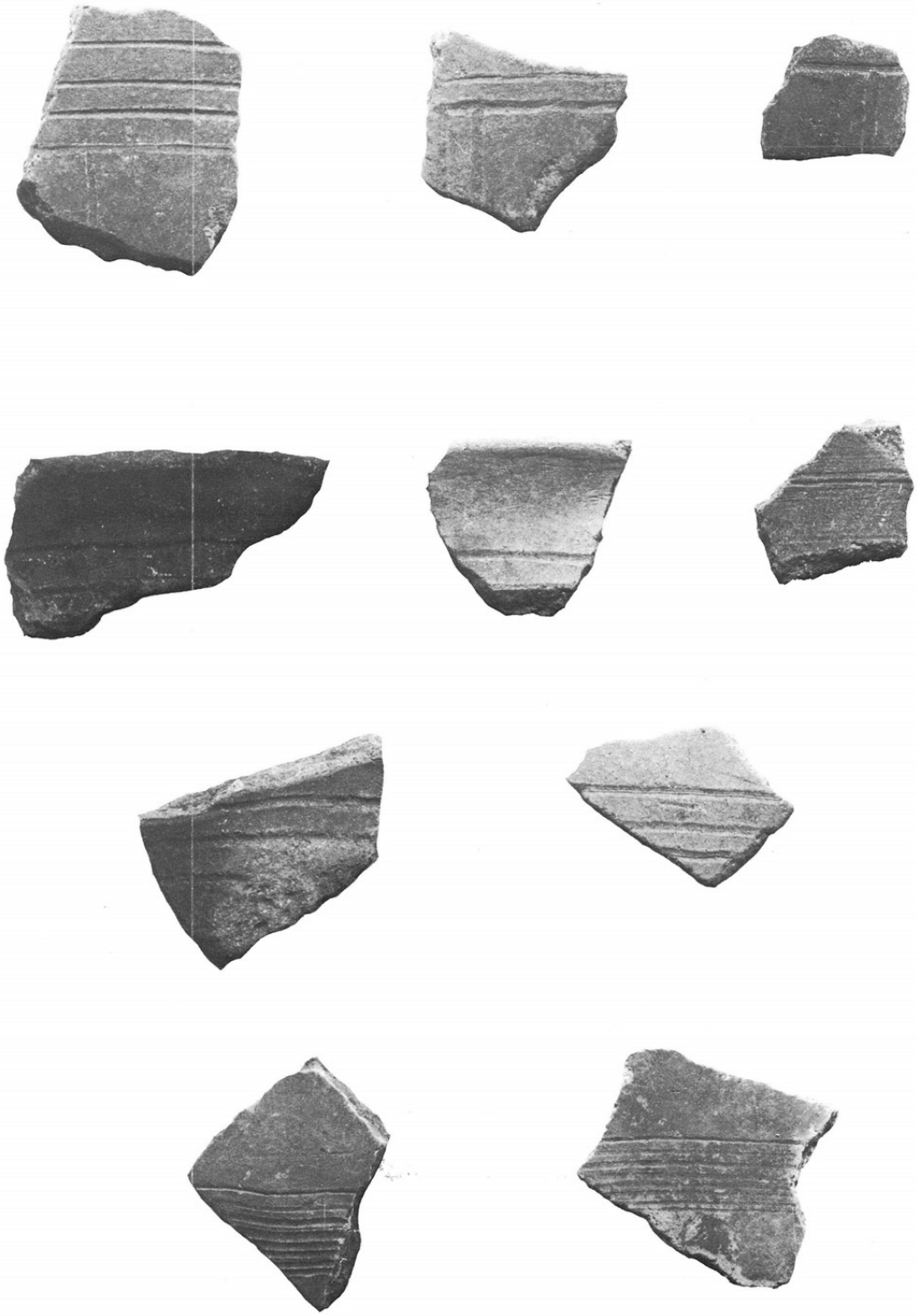


第 I 類 土 器

図版12

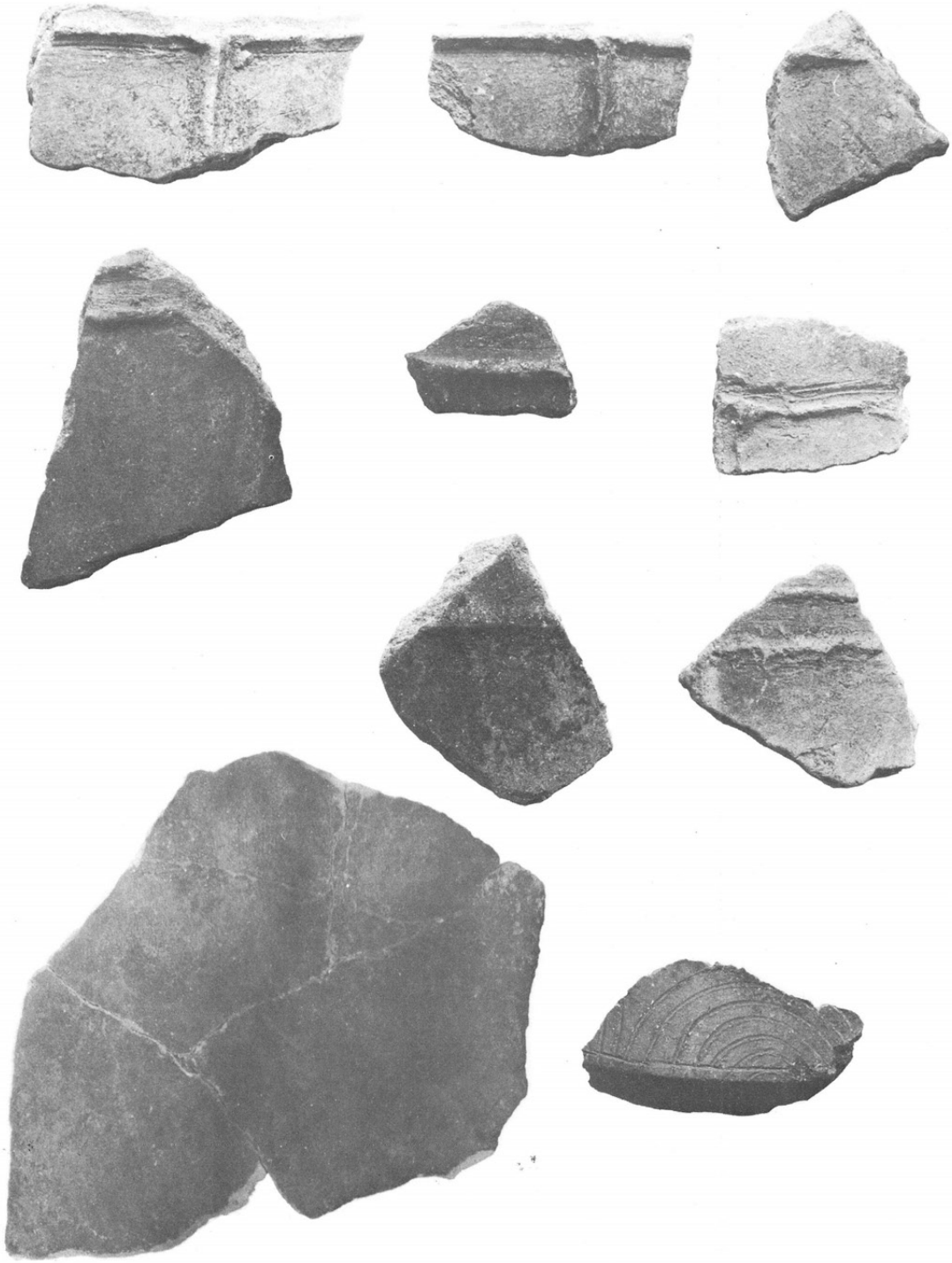


第II類・第VI類甕形土器口縁部



第Ⅲ類土器・沈 線 文 土 器

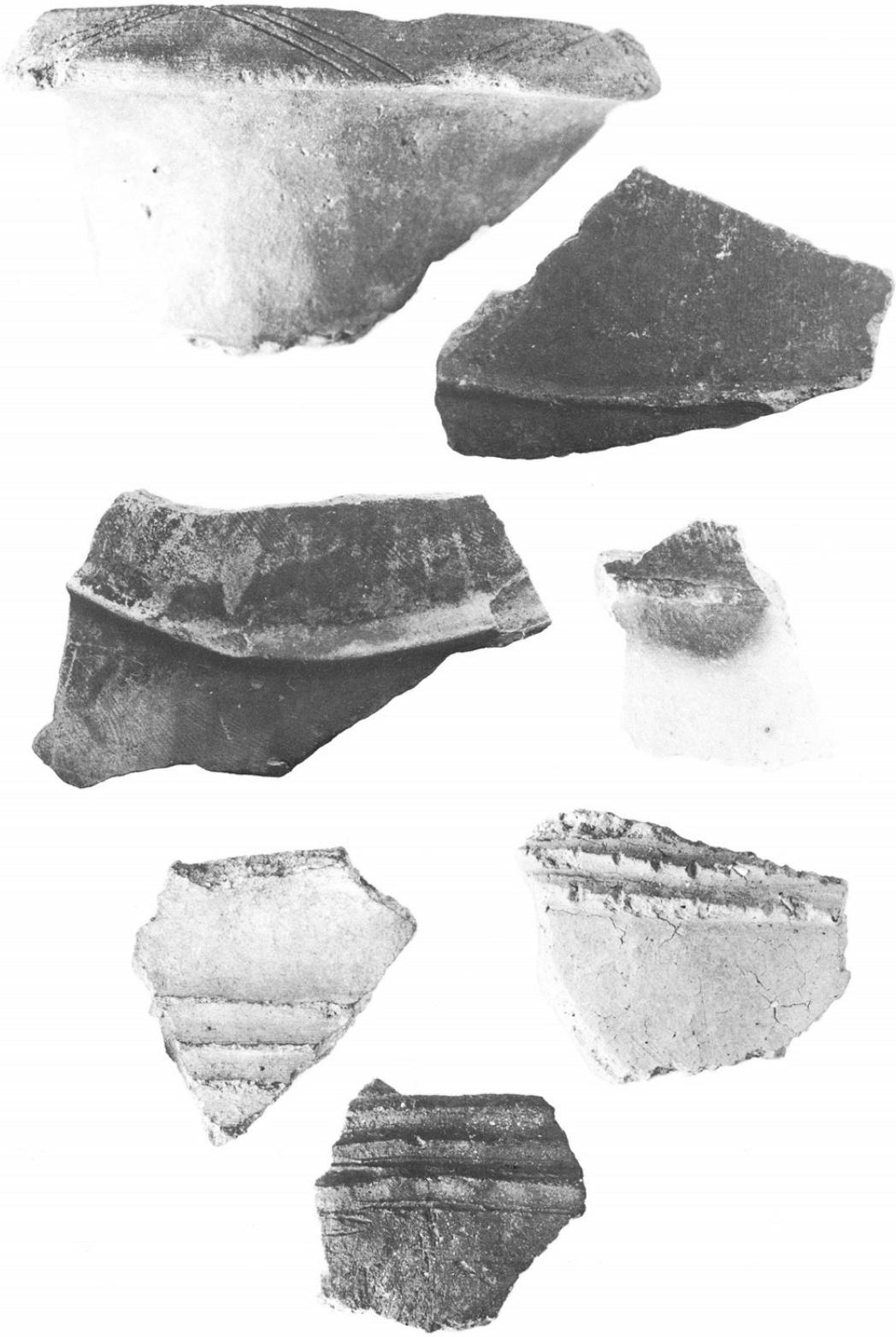
図版14



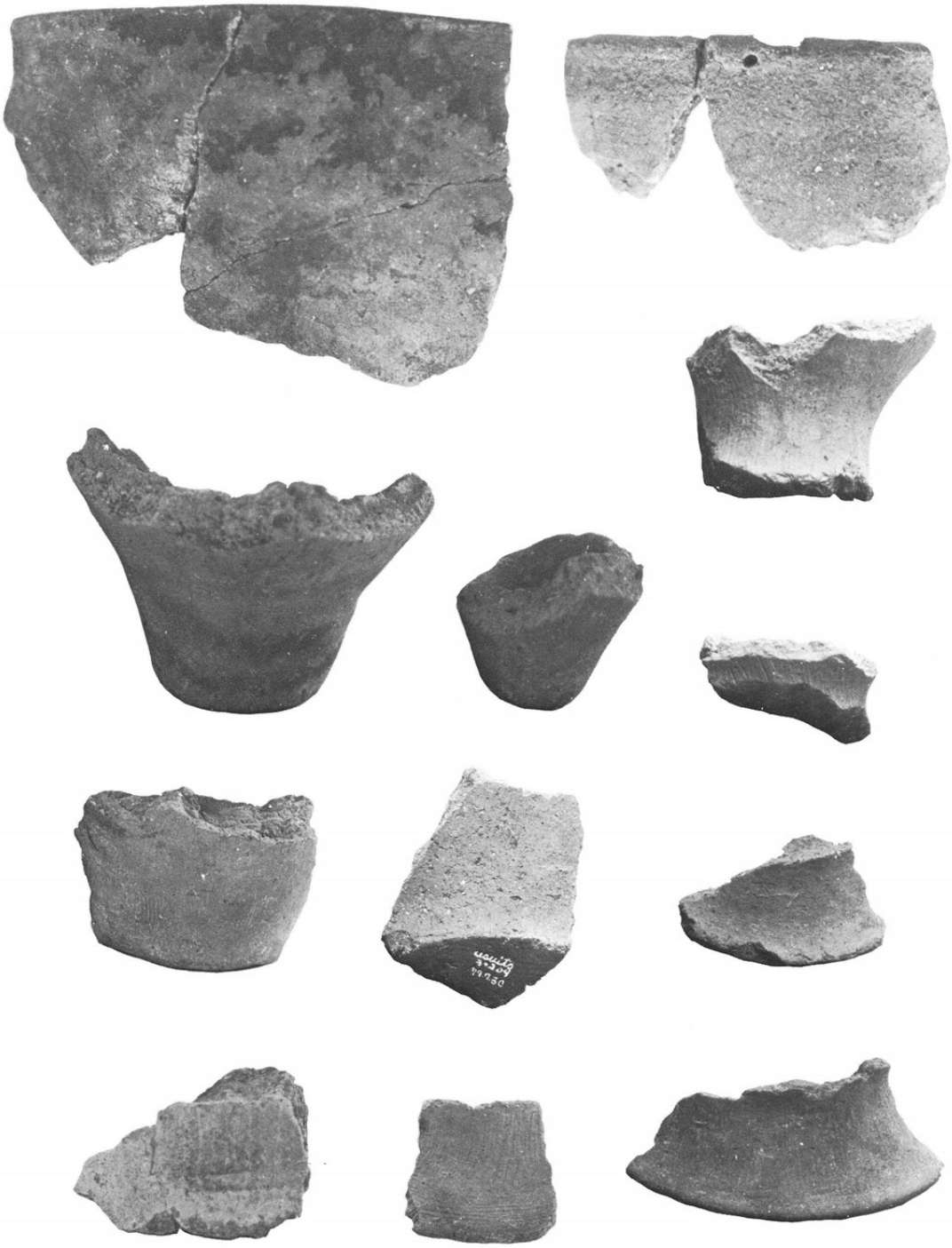
第Ⅳ類土器・免田式土器片

第 V 類 土 器

図版16

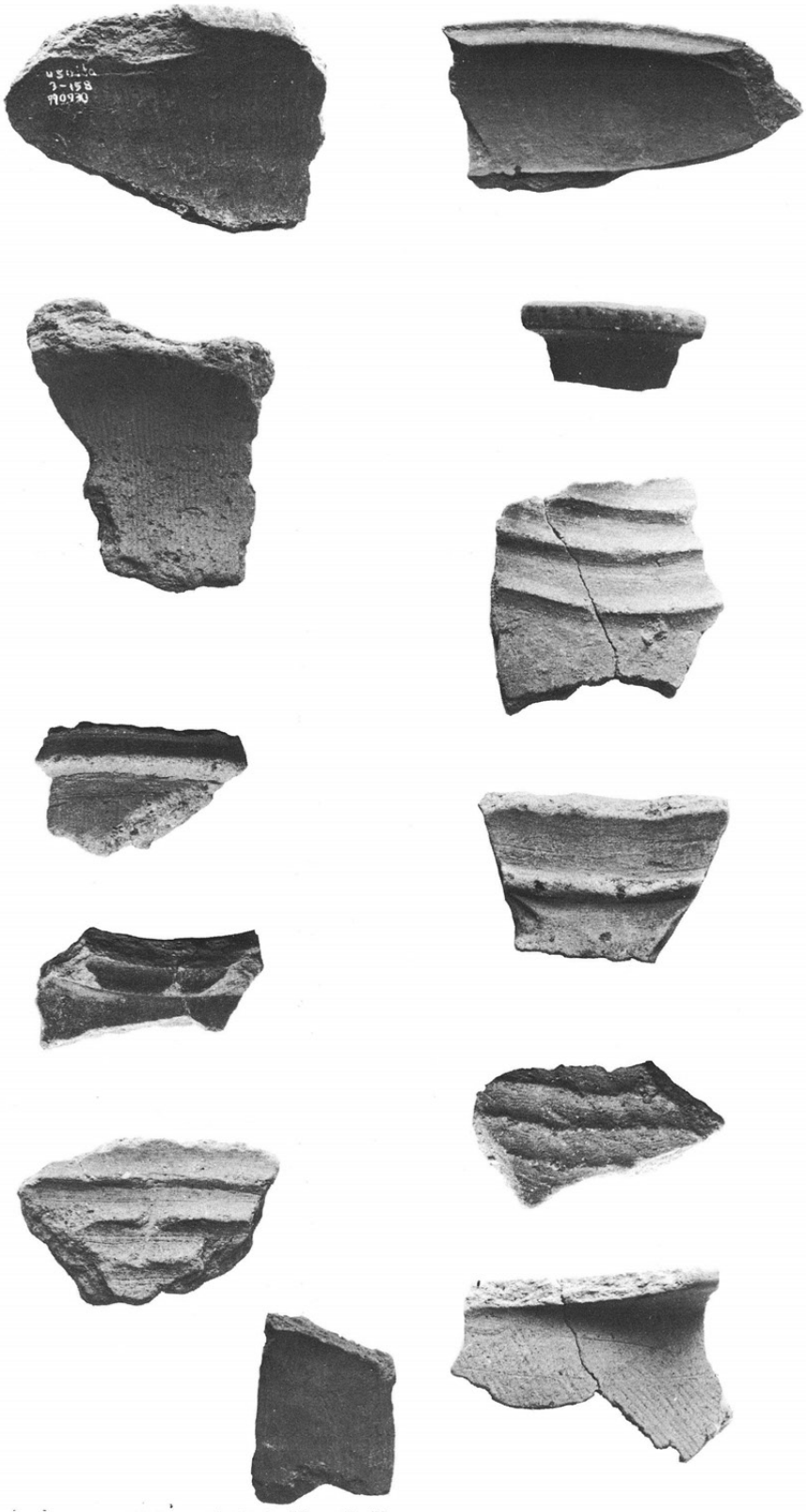


壺形土器口縁部・頸部・甕形土器

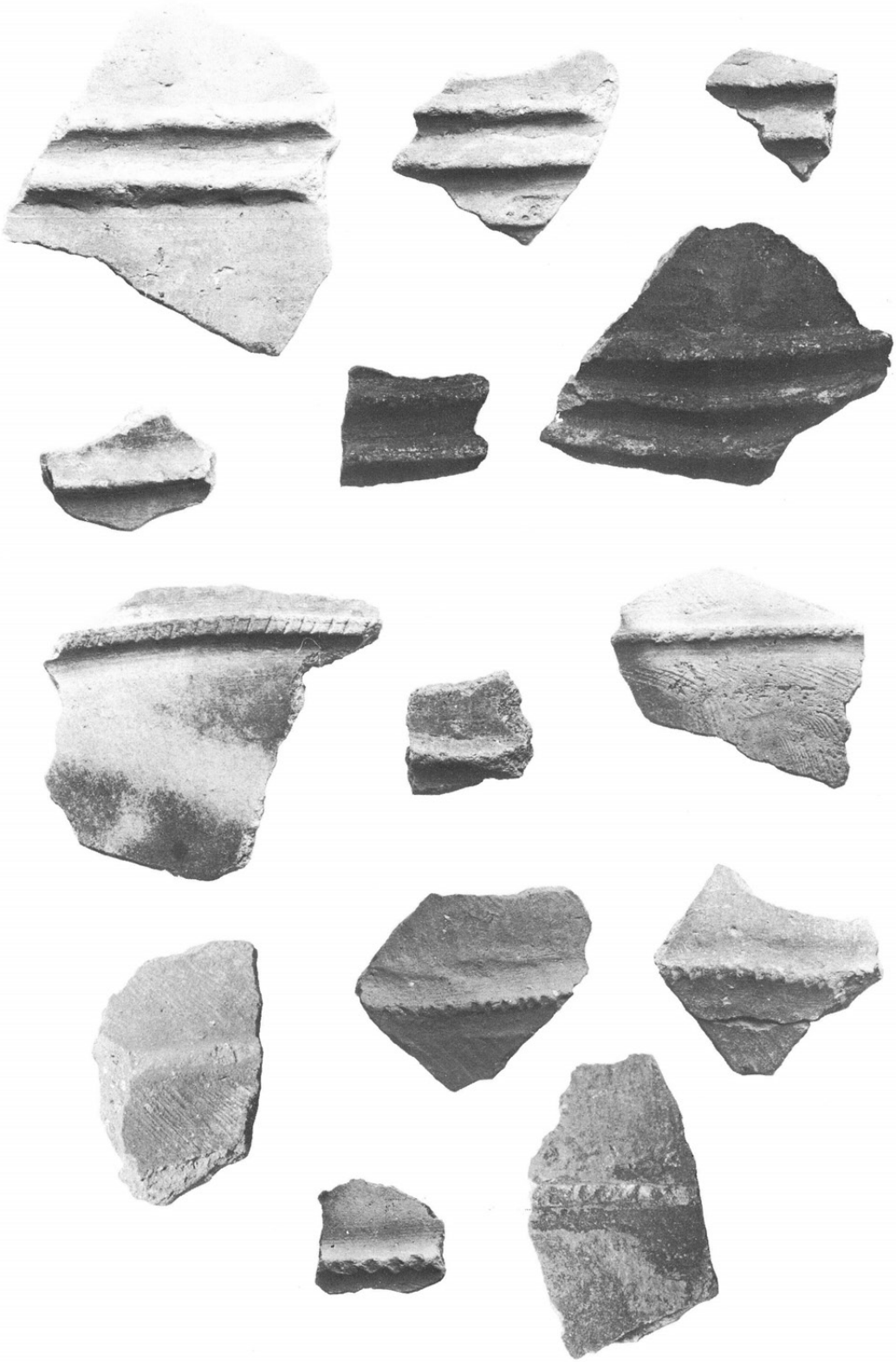


鉢形土器・底部

図版18

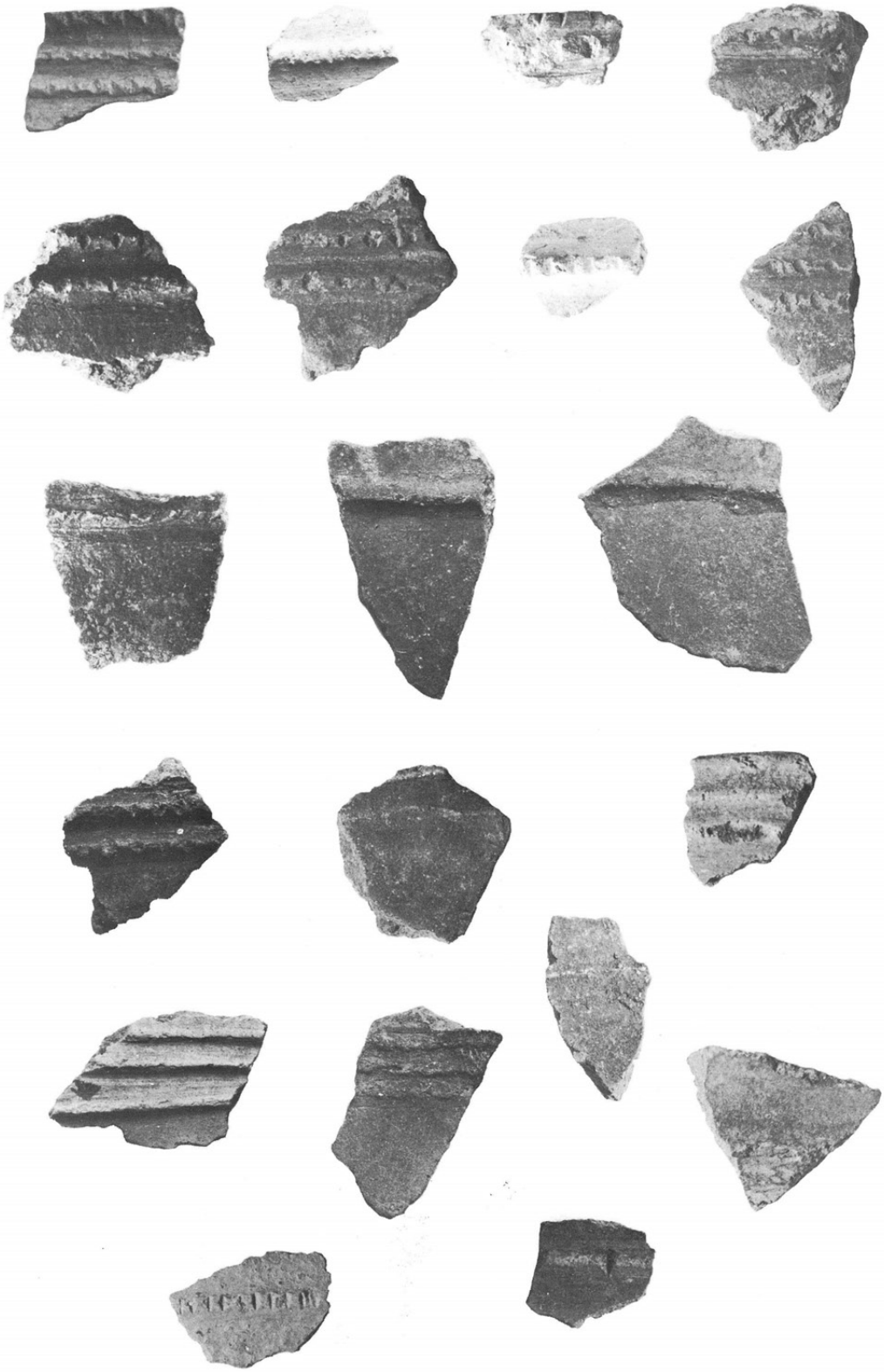


壺形土器口縁部・頸部・甕形土器口縁部

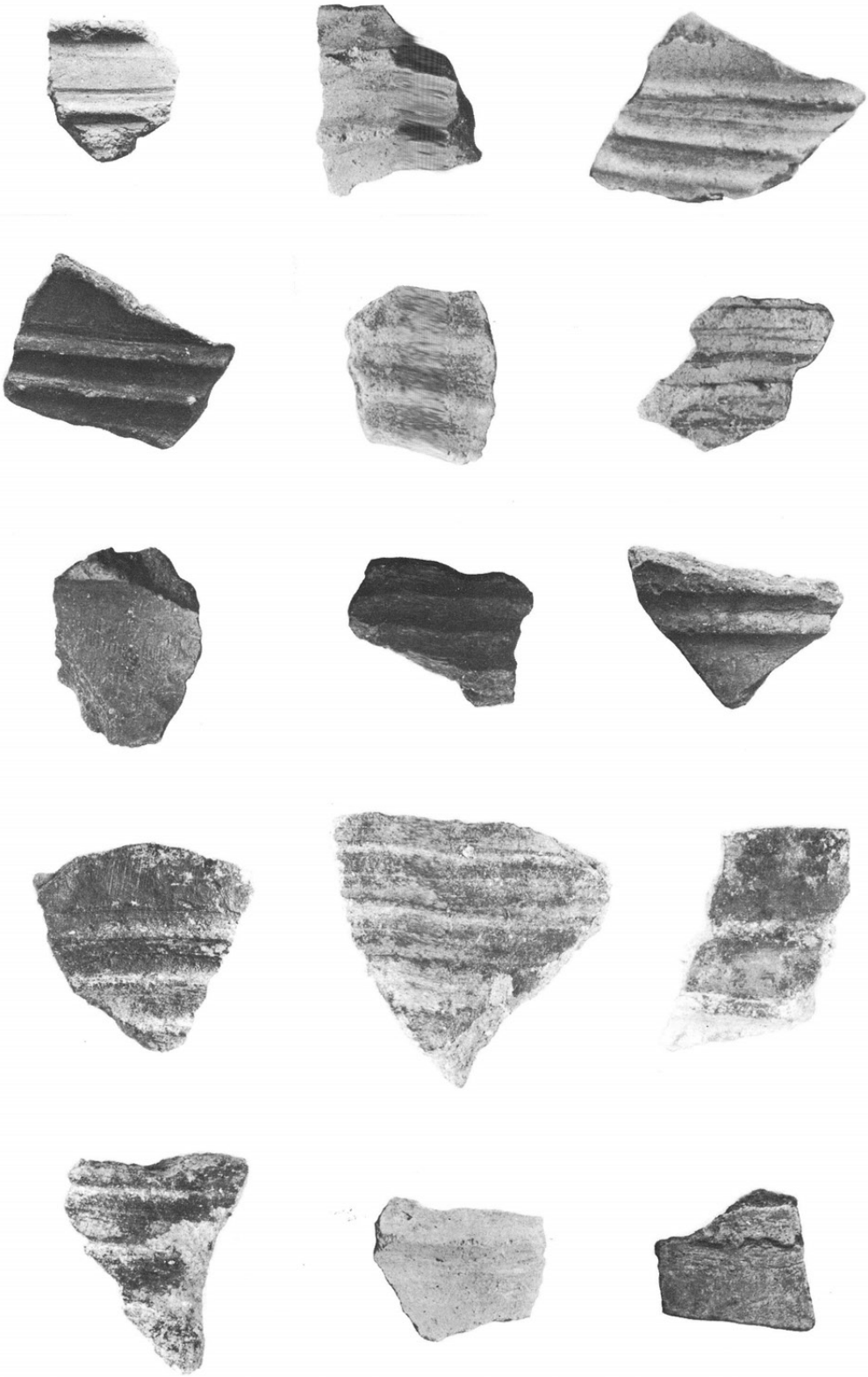


壺 形 土 器

図版20



甕形土器口縁部・刻目突帯・突帯



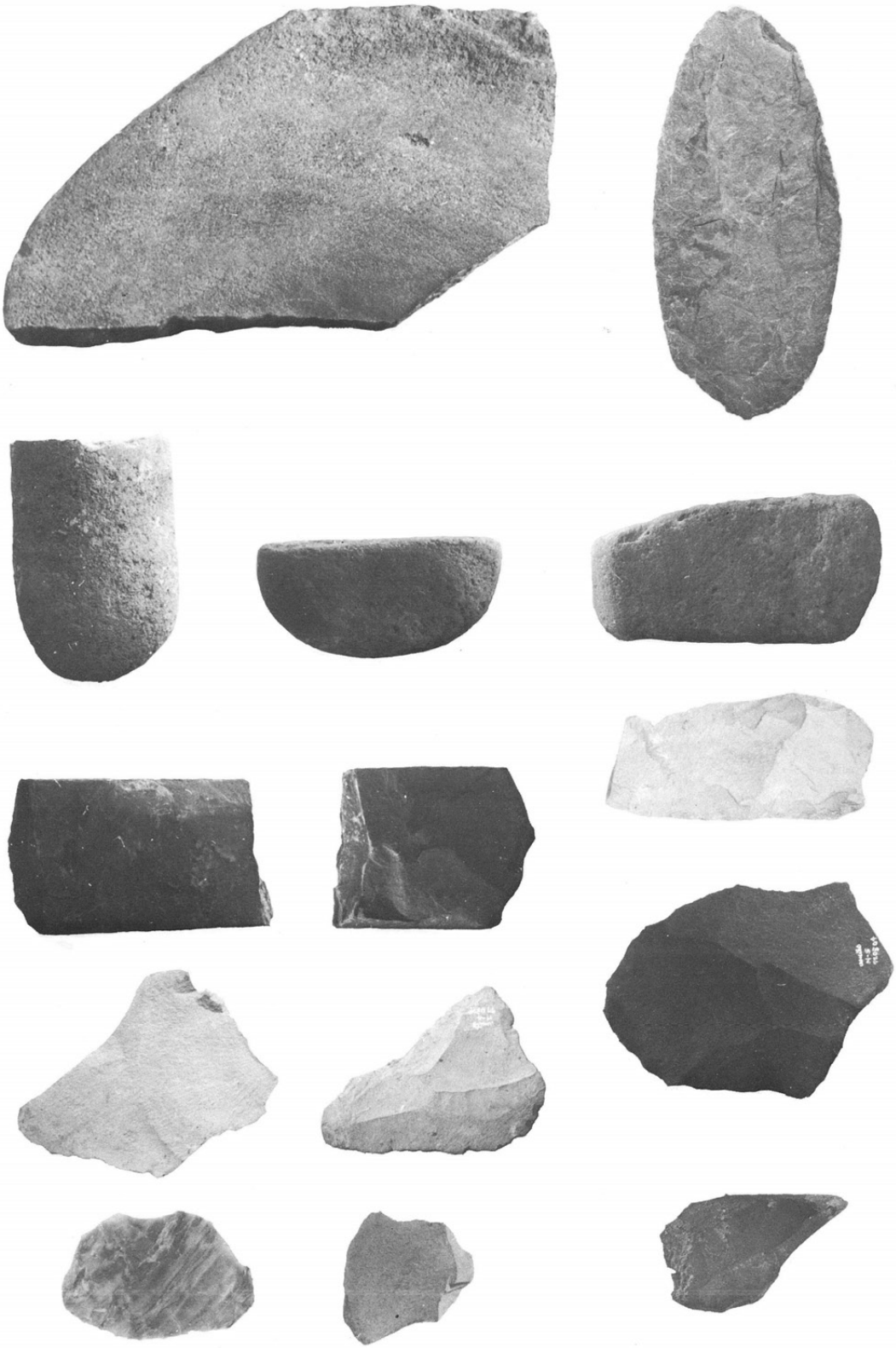
甕形土器資料

図版22

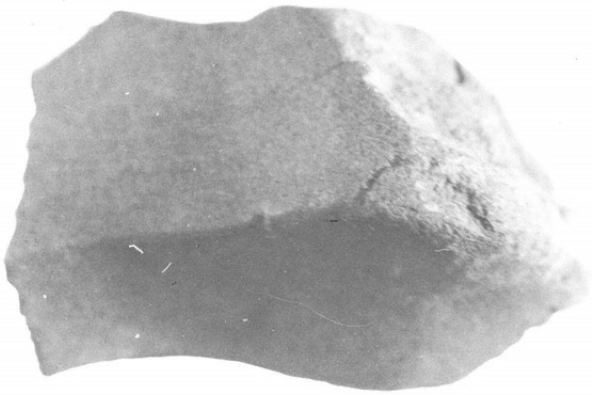
磨製石鏃

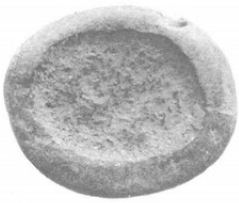
磨製石鏃未製品・打製石鏃（最下段の右３点）

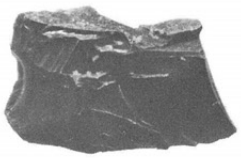
図版24



石皿・石斧・磨石・敲石・砥石・スクレイパー







砥石・石庖丁・管玉・小凹石・鉄鏃・剥片

薄糸平遺跡

昭和53年3月31日

発行所　日本鉄道建設公団下関支社
高千穂町教育委員会

印刷所　川辺印刷所・藤屋写真印刷